

妙くとも三四十分は歎歎やら追懐やら悲しい繰言やらに過ぎた。けれどいつ迄かうして居る譯には行かなかつた。

お駒は先づ其屍の傍に寄つて、『眼を開けて居てはいけませんからね、お閉ぎなさいよ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛』と生きて居る人に物言ふごとく、眼を閉ぢ口を閉ぢて遣つて、

『あゝあゝ後生が好い、ほら、好い顔に成つた、やさしい顔になつた!』

効々しく後に廻つて、汚ないものもしまや出て居はせぬかと調べて見た。『あゝ綺麗になつて居るよ、何も出て居やしない!』

『さうだらうともねえ、氣丈な母様だつたから、』とお米はまた顔を掩つた。

お駒はふと氣が附いたらしく、『足や手は體の柔かい内にちやんとして置かないと、あとで困るがねえ……』茶の間に行つた主人を呼懸けて、

『鏝さん、棺は何うするんですえ! 寢棺ならかうして置いてもいいけれど……。』

『無論寢棺さ!』と秀雄は聲高く言つた。

三十

呼吸を引取る前と引取つてからとでは人々の頭腦が著しく變つた。前には成ることの結果を急いで、

早く結末を見たいといふやうな空氣が漲つて居たが、さて結末が到着して見ると、今度はそれとは異つた清い美しい悲しい情が溢るゝばかりに流れ渡つたのである。

けれど一方では兎に角これで重荷をおろしたといふやうな氣がした。誰れも皆な其前に新しい生活の開かれるのを見た。同胞の間の關係も、親といふ連鎖が斷られたので、全く獨立した自由と寂しさを感じた。

お駒とお米だけ先に立つて遺骸を薄縁のござの上に北向に臥かして、長い間敷いて居た蒲團を裏の縁側の夕日に干すやら、小形の六枚屏風を逆に立て廻すやら、有合せの晒木綿を取敢へず机に懸けて、其上に香爐を据ゑるやら、線香を立てるやら、裏の野からお貞が折つて來た花を供へるやら、いろ／＼其始末に忙しがつて居る間に、主人と銚之助と秀雄は、先づ第一に報知すべき親戚知己を選んだ。同時に主人の胸には葬式の費用のことが先づつかへた。銚之助は兄の兼ねての性質を知つて居るので、正面からは切つて出さぬが、内々其れと句はして、自分も萬一の時と思つて貯めて置いた金二十圓があるから使つて呉れと申し出ると、

『まア、大恩になつた母の葬式だから、成るだけ立派にしたいからナ、少しは助けて貰ひたい!』と主人が言つた。

『兄様は大變だけど仕方がたい。僕等も何うかしたいけれど、貧乏少尉で、金なんかありませんから

ね。仕方が無い、借りるさ！』
と秀雄はのんきだ。

で秀雄は近い親類——殊に是非来て手傳つて貰はなければならぬ人々に電報を打ちに神樂坂の郵便局に出懸けて行く。主人は色の褪めた紺の脊廣を着て、金の工面に神田まで行く爲めの車を呼ぶ。銑之助はひとり残つて通知の端書を書くべく四疊半に入つた。

死の報知が傳つたので、近所の人々が先づ第一に悔みを言ひに来る。前の夫婦者、右隣の二階屋の細君、軍人の細君、それがひとりづゝ遣つて来ては屏風の蔭に置かれてある遺骸の顔の上の手巾を取つて、線香を二三本上げて、同じやうな悔みの言葉を述べて歸つて行く。『まア、まア、こんなになんはずつてね、長い御病氣でしたからねえ、』と隣の老婆が例の調子で言つた。

一家は何となくそは／＼して居た。別にこれと謂つてまだ用はないが、何だか非常に用があるやうな氣がされる。お梅は何をして好いか解らぬので、彼方に行つて立つたり此方に行つて立つたりして居た。そして思ひ出したやうに、をり／＼屏風の蔭に行つて線香を上げる。お米は母のことから引續いて自分の夫のこと家のことを思ひ出して、絶えず眼を赤くして居た。銑之助が端書を書いて居る前の庭には、百日紅が鮮かに夕日に照つた。

郵便局は空いて居た。秀雄は電報を十通打つた。自分の中隊長にも知らせて遣つたが、最後にも一通

打つた。無論、それは娘の家である。ふと、あと一週間経てば歸れる！と思つた。で、神樂坂から矢來の長い暑い路を、母のことやら娘のことやらを思ひ續けに歸つて來ると、家ではお駒とお米とが茶の間に坐つて、頻りに白い葬衣を縫つて居た。

夕暮近く人が次第に集つて來た。

深川に居る叔母も來た。退職軍人の義兄も來た。死んだ母の甥で本所で櫛職人をして居る男も來た。お駒の姉で天理教の信者だといふ五十恰好の中老婦、お桂の實家の長兄、お梅の實家の仲兄、幾年越し往來したことの無い祖父の甥に當るといふ兀頭の禰宜、狭い家はいとど狭く、挨拶やら歎歎やら追懷談やら、煙草と線香との煙は暑苦しく薄暮の一家を籠めた。

四疊半には、同胞の他に、重立つた親類が寄集つて、頻りに葬式の準備を相談して居る。主人は二三軒奔走して、漸く百圓足らずの金を借りて來たが、其中のひとりには維新後の別離の時藩侯から紀念として抽籤で頂戴した雪舟の羅漢の一福を抵當にした。此一幅は吉田の家の寶物同様にして置いたもので、祖父の生きて居る頃は、長持の底深く珍襲して、一年に二度床の間に掛けて孫共に見せるのが例であつた。そして祖父はこれを吉田家の生命のやうに孫共に説聞かせて、これを人手に渡すやうなことがあつては、もう吉田家もお了ひだと口癖のやうに言つて聞かせた。銑之助は祖父の言葉を思出して、自分等の腑甲斐の無いのを悔ますには居られなかつた。

父が戦死して靖國神社に合祀されて居るので、母の葬儀も神道で擧げることには評議一決した。貧乏はして居るが、成るべく立派にといふ主人の意見で、近所にいくらもあるのを擱いて、鎌倉河岸の大きい葬儀社に一切を託して、日比谷の大神宮から神官を呼ぶことにした。兀頭の禰宜が萬事馴れて居るといふ處から、其方の世話は總て其人がすることになった。生花が三對、造花が二對、柳が一對、御簾の二重に下がる棺臺を選んで、銘旗をも立てる筈だと話すと、『それなら立派だ！ 高等官の葬式でもそれまでだ、』と退職軍人の義兄は言つた。今夜湯灌をして成るだけ棺に納めて了ひたいので、兀頭の禰宜はすぐ大神宮から葬儀社へと出懸けた。

逆屏風の中には新しい花が更に多く供へられた。西洋蠟燭が美しく點つて、飯を山のやうに椀に盛つた上に箸が二本差されてあつて、枕圍子が其傍に置かれてある。神道ではさういふことはせぬものだといふ説もあつたが、神官の來ぬ中は、矢張佛様なのだからといふ女連の説に従つたのである。屏風の外には、人々が皆な思ひ思ひに座を占めて、故人の話やら雑談やらに耽つて居た。

茶の間から勝手に懸けては、非常なる大混雜、火鉢には鐵瓶の湯が煮え立つて白い湯氣を立て、居るし、竈の下には火が赤い舌を出して居るし、流元では水を使ふ音がざぶざぶと聞える。女連が一生懸命に夕飯の準備をして居るさまが晝のやうに……。

やがて夕飯が出る。洋燈が點く。晝の暑さは夕暮から出た涼しい風で少し疲ぎよくなつたが、蚊が多

三十一

日が暮れてから一時間経つた。

お梅は留守番に頼んで置いたお貞と代つて、夕飯を食はせようと思つて裏の家へと歸つて行つた。其時銑之助は鮮かな月の光を浴びて門の處に涼んで居たが、今行つたと思つたお梅が少時すると戻つて來て、

『貴郎』と手招きをする。

『なんだえ』と言つて、行かずに居ると、

『貴郎、ちよつと、話すことがありますから……。』

何かと聞くと、お梅は聲を低く、『今ね、門の處まで行くと、家の垣の中で話聲がするんですの。可怪しいと思つて立留つて聞きますとね。お貞さんが向うの書生さんと……』と言懸けて笑ふ。

『何うしたんだ？』

何も言はずに益々笑ふ。

『可怪しいぢやないか。』

生

『だって話せやしませんわね。……だから、私は、ソツと引返して來ましたの。』

『困るぢやないか、……そんなことになつちや、前からそんなことがあつたのかねえ？』

『そんなことは知りませんが、ちよいちよい、話などをして居るのは見たことがありません。』

『困るねえ。』

『お駒さんに話して上げる方が好い……。』

『まア、それより行つて見よう。』

二人は行つて見た。もう無論其男が居よう筈が無い。お貞は茶の間の洋燈を後に、脊を丸くして坐つて居たが、疵持つ足の唯そはくくと落着かぬ様子、先程の足音を鳥渡耳に入れたので、勘附かれたかといふ疑が其胸にあつた。縁側から上つて行つた銚之助は、黙つて厭な眼色をして小柄な桃割に結つた娘を上から見下したが、お梅は打解けて、

『お腹が空いたでせう。もつと早く代るつもりでしたけれど忙しいもんだから。』

『ちつともお腹なんか空きやしませんよ。』

『でも退屈でしたらう？』

『いゝえ。顔の赧くなつたのが洋燈のかけでも解つた。
知々にして逃げるやうにお貞は縁側から歸つて行く。』

若夫婦は顔を見合せて笑つた。二人は代るくく看病に忙がしく、久しくかうして長火鉢に向つて坐つたことがなかつた。それに弟や姉が絶えず遣つて來るので、人目の關が多かつた。勿論二人の間はもう新婚當座のやうな甘い歡樂は無いが、それでも時には手の一つも握つて見たくないことは無かつた。二人は今一度顔を見合せて笑つた。お梅は派手な中形の浴衣を着て、丸髻の鬢のほつれを二筋三筋色白の肥つた頬に亂して居た。

八疊の座敷は暗く、洋燈は徒らに茶の間を照らした。

少時して銚之助は月の明かな庭を彼方此方と歩いた。例の感情的神經で、死んだ母と子等の關係との頼むに足らざるを思つて、何うしてかう人間は汚ないものであるかと考へた。こんなことは當り前のことである、何でも無いことであると思ひ返しても、渠は矢張胸苦しかつた。

下の家に行かうとして、門を出た。實に好い月夜だ。母のことを考へるに、これほど好い記念になる夜はあるまい。畠の芋の葉にはもう夜露が置いて、蟲の聲が叢にすだく。銚之助は思はず冥想に耽つて、門から少し行つた處の右の小徑に秀雄が立つて居るのを知らずに過ぎた。秀雄は久しい前から門の傍に立つて居た。其處から垣を越して銚之助の家の中がはつきりと見えるのである。

仲兄を遣り過して、後から口笛を吹く。銚之助は氣が附いて振返つた。

『誰だお前か。』

『好い月だねえ。』

『先程から此處に居るのか。』

『いゝや。』

『もう棺が来たかえ？』

『いゝやまだ……』と言つたが、『田舎の姉と嫂さんと喧嘩ばかりして居て爲方がありやしない。』

『何か遣つたのか。』

『ナアに、言合はしはしないがねえ、何ぞと言ふと、二人ともすぐぶつぶつと怒つて、變てこで、外聞が悪くつて仕方がありやしない。』

『困るねえ。』

『何うしてあゝだらう？』

『氣が立つてるもんだから、お互ひに小さなことに角を立てるんだ。』

三十二

通夜は賑かであつた。神官が来て誄辭を讀んで二時間ほど居て歸つた。白木の位牌には何々の命といふ長い戒名が新しく書かれた。櫻岡と線香の間の間に遺族の長く横はつたのが見えて、三種の玉を懸ん

だ山の物、海の物が三寶に載せて靈前に供へられた。

人々は皆な思ひ思ひの場所に座を占めて思ひ思ひの談話に耽つて居た。老人はお國替時分のことを語つた。軍人の義兄は父親の戦死した頃のことを語つた。其時この佛が氣丈であつたことが繰返された。

櫛職人は若い放蕩時代に櫛を行商に日光の山奥を彷徨したことを、禰宜は館林に居る頃祖父によく小言を言はれて上目で睨められるのが、此上なく怖かつたといふことを話した。若い者はまた若い同士で、秀雄を中心にした一群は、士官學校の試験の話、數學の話、若い士官の話、演習の話などを熱心に聞いて居るし、銑之助を中心にした一群は、紅葉、露伴の小説から紀行文の話、名所古蹟の話、山水の話など殆ど其の盡くる所を知らなかつた。滑稽の話も出ると見えて、をり／＼聲高く笑ふものもあつた。

主人の伯父に當る老人が狐に化かされた話をした。化かされると知りつゝ化かされて行く心外さを手眞似をして話した時には、人々は皆笑つた。狐の話から幽霊の話が出て老人組の方も中々賑かになつた。

『賑かなお通夜で、佛様もさぞ喜んで居らつしやるだらうねえ！』とお駒の姉の天理教が言つた。

玄關の前では月が檜の樹に懸つて、黒い影をつくつて居た。其蔭に、お駒とお貞が立つて居た。銑之助はお駒にお貞のことを話したので、それで、娘は母親からしたゝか油を絞られて居るのである。娘の歎けけるのを母親は頻りに小突き廻して糺問した。其處に棺が来た。

取敢へず縁側に置いた。五分板の立派な寢棺である。棺を譽める聲が彼方此方からする。普通の棺だ

と、足を折つたり、首を曲はたり、窮屈で厭なものだが、寢棺ではその心配が無くつて好いと言ふものもあつた。

第一に棺に納めたいと言ふので、肉身のものが寄集つて、湯灌をすることにした。湯はもう以前から沸いて居た。先づ雨戸を半分たてる。茶の間と座敷との襖を仕切つて、他の人々には茶の間の方に一先づ集つて貰つて、屏風と遺骸とを一隅に寄せて、中央の疊を三枚揚げた。

大盥に湯が波々と汲まれる。湯灌をする連中は古い單衣に着かへて、繩の帶を緊めて、其盥の周圍に立つた。お駒とお米がそのまゝ遺骸の衣裳を脱がせたが、『まア此様になつてねえ！』とお米が得堪へずまた泣き出すのを、主人が手傳つて、盥の處に運んで來ると、櫛職人はかういふ世話はよく爲つけて居るといふ風で、効々しく手やら足やらをさぶくんと洗つて遣る。『綺麗におんなさいよ、ねえ、叔母さん！』とお駒は顔を洗つた。

死人はぐたりと手を垂れて首を曲げて眼を閉いで居る。それを薄暗い洋燈の光が朧ろ氣に照して、氣味悪く死の影を四邊に擴けた。肉身のものは少しでも洗つて遣るものと言ふので、皆な手やら足やら胸やらを洗ふ。南無阿彌陀佛の唱名が處々に起る。秀雄は無造作に手拭で顔を拭く。銑之助は見るに忍びないやうな暗い顔をしてじつと立つて、このさまを見て居たが、最後に思切つて足を洗つた。死の冷

かさかさが總身に傳つてギョツとした。
で、棺の中に納める。薄い蒲團を一枚敷いて、葬衣を着せて、白い脚絆に白い甲がけ、胸には頭陀袋を懸けて六道錢を入れた。佛式でないからとの注意がまたあつたが、女連はそんなことに頓着しなかつた。杖も入れた。草履も入れた。遺骸の周圍を埋めた檜の枯葉の香が一室に漲り渡つた。

三十三

焼香の順序に就いて、お米とお桂の間に暗闘があつた。葬式に列する女連の衣服に就ても紛紜が起つた。紋附を持つて居るものは遠い血統でも行列に加はり度いし、持たぬものは衣裳を見せびらかす爲に行くのならやめて貰ひたいといふ腹がある。お米とお駒とは止むなく損料で紋附を借りた。

銘旗墓標の揮毫、青山墓地の準備萬般のことはやがて皆整つた。更に一夜を賑かな通夜に過して、出棺は午後一時、午砲の鳴る頃には、家内は戦場のやうに混雜に混雜を重ねて、じつとして坐つて居るものはひとりもなかつた。

主人と銑之助は神主の衣冠を着けて葬式に従ふことになつた。秀雄は退職軍人の意見で軍服を着た。四疊半で銑之助は神主の衣冠を着けて居ると、秀雄が入つて來て、

『銑ちゃんよく似合ふぜ！』と笑ふ。

銑之助の其姿は實際可笑しかつた。冠を冠ると面變りがして濟まして坐つて居るのを見ると誰も噴出

生

したくなる。出棺前の誄辭を神官が讀む間、秀雄は隣に坐つたお梅の膝をつゝいて頻りに可笑しがるので、お梅は笑ふには笑はれず困つて居た。

長い誄辭が濟むと、焼香が始まる。それも濟むと、今度は愈々最後のお別れ！ 親しい人の限りは棺の周圍に集つた。棺の蓋を取ると、其瘦せ果てた醜い顔！ 涙の雨はまた一しきり人々の袖を濕したが、やがて葬儀社の人足の監督が来て、冷かに棺の蓋をカンカンと打附ける。其音が狭い暗い家の隅々まで響き渡つた。

庭には會葬者が既に多く集つて居た。夏の暑い日盛、樹の蔭、家の蔭に白い扇がばた／＼と動く。生花、造花、榊、白衣の人足は門前に群を爲して、十數臺の俵は前の坂の半まで續いてゐる。近隣の人々も思ひも懸けず葬式の立派なのに驚いて眼を睜つた。

棺は縁側から運ばれて棺臺の中に納められる。人足がすぐ擔ぐ。やがて庭樹の間を門前に出た。主人から銚之助、續いて少尉の新しい軍服を着けた秀雄、位牌は孫の男の兒が俵に乗つて持つた。銘旗が風に翻つた。

棺は坂の上まで行つて、しばし後から續く行列の揃ふのを待つた。行列の順序を世話する役目の齷齪の紳士は、てんでこ舞をして、女連を車に乗せて居る。――やがて行列は續いて棺は動き出した。家に残る人々は門前に立つて長く見送る。隣のお婆も坂の下の處に出て居る。近所の人々の中には、あつた

づかしい婆様も居なくなつて、旦那はこれから仕合せ！』など、言つて居るのもあつた。

喜久井町の通では皆原の家を知つて居た。白髪頭の、齒の抜けた、難かしさうでそして他人には丁寧なやさしいお婆さんをよく知つて居た。で石屋、車屋、理髪屋、烟草屋の亭主やら上さんやら皆な店頭に出て、其行列を見る。角の氷屋の意氣な姉妹も出て居た。

一町ばかり來ると、材木屋の娘が朋輩らしい十六七の娘を伴れ立つて此方に歩いて來たが、葬式の行列を見て、

『そら 酸漿のお婆さんさ！』

『さう……………。』

と他の娘も立留つた。

途中は長く暑かつた。それに風の強い日で、青山の練兵場は黄い埃を揚けた。銘旗がばた／＼と音して、徒歩の群は半ば後れ勝になつた。

共葬墓地には吉田の家を取つて縁故のある墓が少くない。祖父母、嫂、嫂の子、それに總領の姉も此處にあつた。盆とか彼岸とかには、同胞は母親と一緒によく墓參をした。早く死んだ總領の娘の墓に母親は秋の草花を手向けて泣いたことがある。交番の前の藤棚の茶屋、櫛と線香とを買つて、手づから桶を下けて、墓と墓との間を縫つて行くのが常であつた。其頃は秀雄はまだ少年で、歸途には屹度青山の

練兵場を銚之助と競争して驅けた。原の外れの一株の銀杏の樹、其陰にはいつも荷車や俵が五六臺休んで涼んで居たが、其處で兄弟は後れた母親の來るのを待った。

長兄はそれよりもつと以前のことを思ひつゝ歩を運んだ。まだ練兵場にならぬ前、古い屋敷と古い町、檐の低い商家が連つて、衰頹の氣が巴渦を卷いて居た。其町に六道の辻といふ處があつた。其處を姉——力にした姉の葬式の行列に跟いて行つた時のことを思ひ出した。

青山の齋場では、神官が傳記に似た祭文を朗讀した。神道の式は簡單ではあるが、何となく人々の心を動かした。

會葬者の中には、父親の舊友が少くとも四五人は居た。根岸に居る時分よく酒を飲み合つた連中である。一人は警部長、一人は本郷の區長になつて居た。長兄が和文で書いた弔詞を讀上げる時、『皆な大きくなつてかうして立派な葬式を爲るやうになつた！ 吉田が生きて居たら、さぞ喜んだらうに』と思つて、軍服を着けた秀雄が悄然と頭を低れて居るのを見た。

式が済むと棺は墓地へと運ばれる。三坪の狭い要垣の中に、數箇の墓標は半ば朽ちて祖父のなどは雨風に全く腐れ果てゝ居た。十年の間に四度の葬式、先妻の墓石の他に祖父母の墓石を建てたいといふ願は常に主人の心にあつたが、貧しい苦しい生活ではそんな餘裕は無かつた。

成して居た。土に塗れた人足は棺を受取るや否、細引を懸けて、する／＼とそれを穴に下した。土塊の棺の上に落ちる音がする。

親戚知己は皆な土塊を拾つて穴に投げ入れる。瞬く間に墓は築かれて、新しい墓標は楓、椿などの繁茂を明るくした。一同は形の如く水を手向けて葬式を終つた。

親しい人々は藤棚の茶屋の奥座敷に休んで茶を啜つた。銚之助は長押に懸けてある油畫を立つて見た。主人は義兄と襖の名家の書に就いて話した。ある事業を終つたといふやうな満足は誰の胸にもあつた。家に歸つてから床の間に飾つた位牌の前で、しるしばかりの酒宴があつたが、やがて親戚の誰彼も暇を告げて歸つて、一同は連日の疲勞に死んだやうになつて熟睡した。

夜深く神前の蠟燭は消えて居た。

三十四

のんきな平凡な日が續く。母の居なくなつたことは何となく淋しい。殊に銚之助には其感が深かつた。何うかするとまだ其處に寝て居るやうに思ふ、難かしいことを言つて居るやうにも思ふ……何んなに難かしくつても生きて居て呉れた方が好いなどとも思つた。母の面影はまだ其暗い家の軒を離れなかつたのである。

墓参には交るゝ行つた。三日目には墓前の生花が全く凋れ果て、居た。家では主人が同胞と一緒に亡き母の遺物の整理をしたが、其中からは古い鏡やら帳面やら古金銀の包やらが出た。小さく包んだものを何かと展けて見ると、それは子供等の産毛と臍の緒で、主人のも銚之助のも秀雄のもあつた。父親の筆蹟で生年月日と名とが記されてある。猶別に同じ小さい紙包があつた。それは父親の遺髪であつた。これを見るといづれも黯然として父母の一生を思つた。

『皆なの臍の緒を己が持つて居たつて仕方が無いから皆なに返すぞ、』と暫くして長兄が笑ひながら銘にそれを渡し、『お米のは何うして無いんだらう？』

『私のは私が持つて居るよ。東京に皆なが出て来る時、お前のはお前が持つてお出でつて、母様が私に渡して呉れたから。』

『さうか、それなら好い。』

『臍の緒も自分自分に保存しなけりやならくなつたんだナア、もう。』
と悲しさうに銚之助が言ふと、

『それはさうさね、お前。いつ迄そんなこと言つて居られるもんかねえ。お前だつてもうぢきお父様になるんぢやないか。』とお米は笑ふ。

古金銀は一朱金が五枚、二枚金が十枚、一分銀が五枚ほどあつた。秀雄は一朱金を頼りに持つて居たが、

『僕は何も形見はいらんから此を貰ひ度いな。』

『それを何うするんだ。』

『指環でも拵へさせるさ。』

『お前が指環をはめるのか。』

『どうせいゝ人に遣るのさねえ！』と銚之助は傍から冷かした。

『いゝだらう、兄様！』

『するい、するい……。秀はするいよ、』とお米は言つた。

『好いさ！ 僕は貰うんだ！』と秀雄は猶それを弄つて居た。

同胞は形見分けの相談をした。母は平生着物などを餘り多く持つて居なかつた。好いものは總領の娘とお米とに既に大抵は遣つて了つた。秀雄が士官學校を卒業した時にこしらへた紋附位が先づ重なるものである。主人はそれをお桂に遣る下心らしく、お米は自分がそれを貰ふ権利があるやうに思つた。二人の暗闘はこれにも起つた。

三十五

十日祭の前夜には重立つた親類が皆集つて、賑かな酒宴があつた。明日お墓参をして、秀雄もお米も

國に歸ると謂ふので、晝間それ／＼形見分をする。母親の紋附はお米が貰ふことになつた。

長々の看病、御苦勞様だとあつて、今日は女連も皆な座敷に直つて膳に就いた。八時頃には客は大方酔つて、折を持たせられて歸つて行くものもあつた。

座は既に白けた。

ふと主人が氣が附くと、お桂は濟まして膳に向つて頻りに酒を飲んで居る。飲むと言ふよりも寧ろ呷つて居る。顔は眞赤になつて、物に激した調子が名残なく其態度に顯はれて居た。少し離れて坐つたお米の顔にも何となく不穩の色が上つた。

『お桂!』

と主人は呼んだが返事も爲ない。

『お桂! 馬鹿をするな!』

と續いて言つたが、聞えぬ風をして、徳利を手にしたまゝ、頻りに盃に酒をつぐ。

『お桂、お前は聞えないか!』

此聲が甚だしく尖つて居たので、お米は險のある赤い顔を主人の方に向けた。

『嫂さん中々酒が行けるんですね?』

ふと傍から言つたお米の言葉には冷笑の調子が籠つて居たので、

『えゝえゝ、酒なんかいくらでも飲めますとも!』

『お桂、馬鹿をするなといふに。』

『いゝぢやありませんかねえ。酒位飲んだつて。本當に馬鹿々々しい。自分一人で看病したやうな顔をしやがつて……酒々として……。』

『何ですつて、嫂さん。』

とお米は屹とした。

『何ですもあるもんかねえ。何方が姉だかわかりやしない……。』

席は少時沈黙に落ちたが、避くべからざる暴風は遂に來た。

『嫂さん、今一度言つて御覽なさい。何ですつて、碌々世話もしない癖に……。人の親を死ねがしに扱つて、嫂さんなどに取つちや一刻も早く死ね方が好いだらうけれど、……私には大事な親だからね。』

『誰が死ねがしに扱つたぢやかねえ?』

『誰だか心に聞いて御覽。』

『さういふお前さんこそ……。』

『私は何うしたえ?』

生

『人の家に入つて来て、勝手なことをして、自分一人で看病したやうな顔をしやがつて……。あきれた女ぢやがナア。』

『大きな御世話だ。』

『お桂！ お桂！ 黙つて居れ！』と主人は聲を厲ました。

『黙つて居られるかねえ。こんなに馬鹿にされて……。』とお桂は泣聲になつて、『人を散々踏付けて、勝手なことをされて、私や口惜しい！』と忽ちお米に武者振ついた。

隣にある膳の皿やら茶碗やらが、滅茶々に壊れた。主人が慌て、それを留めに中に入つた時はもう遅かつた。お桂はお米の胸倉を取つて手を舉げて亂打した。お米も負けずにお桂の髪を掴んだ。

席にあつた人は總立になつた。何事かと勝手からお駒も飛んで來た。主人と義兄とがやつと二人を引分けた時には、お桂の髪は滅茶々に壊れ、お米の顔には爪の痕があつた。

『放してお呉れよ、嫂も糞もあるもんか。お位牌の前だから勘忍して居れば好い氣になりやアがつて……。』と頻りに罵りながら、執られた袖を振放たうとするお米を、押すやうにして銚之助は四疊半に連れて行つた。

後を見送つて、

『大きなお腹をして本當に危いよ！』

と義兄が言ふ。その言葉には笑つたやうな調子が籠つた。

主人は黙つて居た。妻の無法を羞かしく思つたらしい。秀雄もお梅も吃驚して立つて見て居た。お駒は『何んだらうね、まア、大きなりをして、喧嘩なんぞして、呆れたものだよ。』

お桂も一時の感情が覺めると、流石に羞かしい。けれど夥しく酔つて居る。前の船乗の夫の仕込で、酒を飲むことは覺えて居るが、こんなに酔つたためしは無い。險しい顔は青く、眼は据つて居た。

でも何うやら彼うやら白けた席がまた賑かになつて、やがて駄洒落を言つて面白けに笑ふ主人の聲が賑かに四邊に聞えた。

三十六

墓參を済ましての翌日、お米は淋しい心を抱いて母の家に別れを告げた。田舎の家の生活もつらい、十年以上連添つた夫も頼みにならない、けれどもう一度と再び此家の闕は跨ぎ度くないと思つた。もう親の家では無い、兄の家だ！ お別れにもう一度位牌の前に線香を上げた。細い煙がすうと青く立上る。お米はそれをじつと見て居たが、堪らなく悲しく心細くなつて、涙は我知らず霞のやうに袖の上に落ちた。

お米は大きな風呂敷を俵の蹴込の下に、メリンス友禪の單衣を着た女の兒を八月の大きな腹の上に抱へて、主人と銑之助と秀雄と其他の女連に見送られて別れて行くのであつた。

秀雄も發つ準備をした。鞆の中には娘に贈物の半襟と帶留、娘の弟妹に遣る繪本とリボンなどが入れてあつた。酒呑の中隊長に頼まれて、新橋際の大きな陶器店で豆腐鍋を買つたが、さてこれを壊さぬ様に何うして持つて行かうかなど、苦心した。榮太樓の甘納豆、玉だれなども其中にあつた。

暑い日であつたが、何となく秋の氣が空に満ちて居た。目白の停車場まで、銑之助が送つて行くと言ふので、俵には荷物だけを載せて兄弟は歩く。

亡き母のことや、嫂のことや、長兄のことや、お米のことなどをいろいろに語り合ひながら、軍服を着た秀雄の白地の浴衣にへこ帶をしめた銑之助とは、戸塚町の軒の低い貧しい商家の家並の午後五時過の日影を拾つて行つた。

面影橋に曲る道の角あたりで、何うした調子か、秀雄は娘の話始めた。

銑之助はざつと聞終つて、

『それは好い、それは好い。』

『何うも親類がむづかしいから、旨く行かんかも知れんけれど……。』

『なアに、大丈夫だ。此方の考さへきまつて居りや。』

『それは、もうさうする積りなんだけれど。』

『それは好い！』と銑之助は其身のことでもあるやうに喜んだ。

秀雄は種々のことを包むところなく語つた。勿論、軍人の訥辯で話した積でも十分に其戀物語を傳へることは出来なかつたが、しかし銑之助は自分の想像で聞くので、其消息はよく解つた。

『折があつたら、兄様にも話して置いて下さい。』

『よし、よし。』

『何うせ、話を進めれば、兄さんや銑ちゃんに世話にならんけりやならんのだから、僕からも兄さんに言ふけれど……。』

『よし、よし』と點頭いて、『早くきめる方が好いぢやないか。』

『だつて、少尉ぢや食つて行かれないからねえ。』

『そんなことは無いさ。』

『それにおもてむきの結婚となると、保証金も入るし……。』

『さうく、さういふ厄介ものがあるね。』

『だから、今一二年、中尉になるまでは、結婚は出来ないけれど……。』

『もう、今年の暮あたり昇進するんぢやないか。』

『旨く行けば、さうだけれど、競争者が多いからねえ。』

面影橋をもいつか過ぎて、兄弟は雜司ヶ谷の通に出る低い坂を登つて居た。

『寫眞があるだらう？』

『うむ？』

『歸つたらすぐ送つて呉れ。未來の義妹に早く御ちかづきになりたいから。』

秀雄は躊躇して居たが、『實は持つてるよ。』

『持つてる！ 寫眞を。』

『うん。』

『ぢやお見せ！』

『鞆の中に入れてあるから、停車場に行つてから……。』

銑之助は笑つて、『それなら早く見せれば好いのに！』

『だつてそんな氣になれなかつたもの。』

通に出て、肴屋、荒物屋、馬具屋、桶屋などの軒を並べた場末の汚い町を抜けると、潤々とした野の上に、秋近い白い雲が靡いて、榛の並樹で縁取つた田舎道を空車の音が高く響いた。
停車場は空いて居た。時計を見ると、時間まではまだ二十分ほどある。切符もまだ賣出さない。銑之助に促されて秀雄は鞆を明けて書籍の間に挿んで置いた光子の寫眞を出して渡した。銑之助の眼には可愛い眼をした小づくりの娘の姿が映つた。

『何處か中町の絹さんに似てるね。』

『うん！』

と秀雄は顔を赤くして、仲兄の手から寫眞を取つた。中町の絹さんは秀雄の幼馴染である。

待つ間程なく汽車が来る。若い士官は劍鞘を鳴して二等室に入った。場末の停車場は乗降の客も少く、車掌が手を舉げて笛を鳴すとすぐ動き出した。

秀雄は窓から顔を出して、停車場に立つて居る白地の浴衣姿を小さくなるまで見て居たが、やがて線路が曲つて見えなくなると、そのまゝ腰を下して、隠袋から寫眞を出して、飽かずその姿をながめ入つた。汽車が赤羽に着く頃、銑之助は淋しい顔をして、高田の穴八幡の傍の坂を降り懸けて居た。

三十七

お駒も歸ると、跡は靜かになつた。主人とお桂と男の兒と夕飯の膳もさびしい。

男の兒は箸を置くと其儘、急いで遊びに出て行つて了ふ。夫婦は黙つて飯を食つて居たが、それも濟むと、主人は床の間の神前に線香を添へて、庭から井戸端のあたりを逍遙する。お桂は水を汲んだり跡

仕舞を爲たり、襷懸になつて効々しく働いて居たが、洋燈が点く頃、二人はまた長火鉢に相對して坐つた。

主人は煙草を一服吸つて、トンとはたいて、

『まア、これで濟んだ！』

『随分の騒ぎ…………。』

『お前も大變だツた。』

『本當にねえ、此間など、私つくづく厭になつて了つたがねえ。』

『でもお前も中々隠藝があるナ、』と莞爾する。

『隠藝ツて何ぢやね。』

『あんなに酒の曲飲みが出来るとは知らなかつた。』

『何ぢやね、阿房らしい。』と打つ眞似をした。

二人は始めて一家の主人になり得たやうな心地がするのである。かうした鳥渡した戯も今迄は決して出来なかつた。夫婦の愛情を少しでも表面に顯すと、すぐ厭な眼で睨まれた。主人など殊に其感が深い。他所の夫婦は睦しさに縁日に出懸けて行つたり、一緒に三越に着物を買ひに行つたり、思ふまゝの快樂に耽つて居るのに…………。其身ばかりはさうした甘い味も全く知らずに、むづかしい口小言と衝突と

暗闘とにあたら月日を送つて來た。主人は今更のやうに、一人は死し一人は離縁した先妻を氣の毒に思つた。

『お前なぞ仕合せだ。』

『何故ぢやね。』

『もうこれからは樂が出来るから。』

『お雪さんを又思出したのかね。』

『馬鹿な。』

『だツて此間の手紙ツたら厭ツたらしい、見られやしないがね。樂が出来るやうになつたから、お雪さんと呼んで上げるが好いちやがねえ。』

『お前は何うする！』

『人に散々苦勞をさせて阿房らしい。』と、今度は本當に膝の處をピシヤリと打つた。

主人は笑つて居る。

賑かな笑聲が原の家に聞えるやうになつた。隣の細君は例の若づくりで、絶えず遣つて來ては面白さうな話をして行く。眼の悪い老婆も縁側に來て、用も無いのに長い饒舌を續ける。お桂の甥に當る早稲田の學生も今迄は一度も來たことも無いのに、行きかへりにちよいちよい寄るやうになる。生活状態は

時間の間に全く一變した。

三十八

秋は來た。露は草の葉にしとゞに置いて、蟲の音が物哀れに垣根に鳴く。月の明かな夜が幾夜か續くと、今度は冷たい雨がしとしと降つた。

銑之助はさびしい思をして居た。下の家はもう兄の家嫂の家になつて了つた。丁度其頃かれは最初の小文集を公にするつもりで、出版元から日毎に送つて來る校正を見て居たが、最後の一臺を終つて、序文を書かうとしたのは、母の四十日の祭を濟まして歸つて來た夜であつた。晴れては居たが、闇で、天の河が明かに空に横はつて、星が閃々と輝いて居た。

理由なしに涙が滴れる。子の爲めに親は其總てを盡した。子は親の爲めに果して何を盡したか。母は難かしかつた。けれど難かしい以上に温情であつた。われ等の爲めに、眞心から悲しみ、眞心から憂ひ、眞心から、怒つた。むづかしかつたのは優しかつた爲めである。であるのに、子等は何を以てこれに酬いた？

人間の淺ましさが今更のやうに背と胸に迫つた。少時して思返して、

『よ。』

茫然として涙が溢れた。

思返して序文を書いた。和文調で母の死に逢つた悲哀を叙した。『これよりは時雨降り、木の葉散り、さらでだに悲しき秋を、かしの實のわれ唯一人に侘しき世をば經べき、』と書いた。最後に、『大なるめぐみに酬ゆべきもの無し、せめてはこのはかなき小さき文をだに御前に奉らばや。』

かう書いて筆を擱いた。まだ涙がかれの頬を傳つた。かれは大きい手を顔に當て、歔歔けた。

垣根では蟲が頻りに鳴く。

其處にお梅が來て、

『何うしたんですの？』

『母様が死んで了つた。もう一人だ。』

見ると夫が泣いて居るので、お梅も悲しくなつた。慰むべき言葉も出ない。

『もう一人だ！』と銑之助は繰返して言つて、『もう力になつて呉れるものは無い。お前と二人で此世の中を渡らなければならぬ。』

お梅も催されて泣いた。

少時は沈黙に落ちた。

生

やがて、『本當に力になつて下さる母様でしたのに……』とお梅は言つて、『けども、もう爲方がありませんから、……二人で一生懸命に、どんなことでもして。』

二人は始めてうき世の波に觸れたやうな痛切な悲哀を感じたのである。夫婦としての意味以上に、ある力強い密接な關係がかれ等の上に生じた。

お梅は丁度六月である。

五十日に今一度お祭があつて、一家揃つて墓參をした。床の間に飾つた神壇は其日を限り撤せられて、位牌は父親の靈の祀られてある家の神棚に加へられた。主人の手向けた花は暗い家を明るくした。

三十九

二年経つた。原の家はもう原の家ではなくなつた。老百性夫婦の借りて耕した畠も宅地になつて、縦横に路が附けられて、新しい家屋が幾軒となく建つた。和洋折衷の下宿屋も出来れば、大きな門構の板塀圍ひの二階屋も出来る。路の角に新につくられた共同の井戸には、近所の女房連が終日長く饒舌を續けた。

北に寄つた小路の奥に、小さな門の四間ばかりの新建の家屋があつた。狭い庭には樹も無ければ草花も無い。玄關の格子を明けると、綺麗にみがいた長靴と短靴とが置かれて、出来で買つて来た下駄箱には、端珍の鼻緒のすけられた新しい女の踊下駄が入れられてあつた。毎朝風く、軍服を着けた中尉が靴

の音高く出勤すると、後では子供の泣聲がして、若い細君が頻りにそれをなだめる氣勢がする。若い細君は光子であつた。

二人の戀愛問題は中々難かしかつた。老祖母の反對、親戚の反對、これも随分烈しかつたが、それよりも一層困つたのは、田舎新聞が何處から何う材料を搜し出したか、光子の懐妊した事を其紙上に麗々しく掲げたことである。で、大騒ぎになつて、手紙が原の家に来て、母親の死んだ翌年の二月、主人は弘前に出懸けて行つたが、一緒に伴れて来た光子はもう六月の大きな腹をして居た。光子はなつかしい父母、なつかしい戀人に離れて、二百里の都に二人の嫂に介抱されて、その母親の死んだ八疊で男の兒を分娩したが、其年の秋には何うやら彼うやら話が纏つて、おもてむき秀雄と結婚することになつた。それに秀雄は翌年の春、戸山學校に術科研究の爲め隊から派遣されることゝなつたので、それで取敢へずこの兄の近所に家を持つたのである。

光子は美しかつた。それに性質が優しいので、近所でも評判であつた。唯、弘前なまりが容易に取れぬので、いつも嫂達に笑はれる種をつくつた。

兄弟三人——三軒の家は一家のやゝに睦しく往來した。男達が交るく御馳走を拵へさせて酒を飲むと、女達は男達に留守番を頼んで、一緒に神樂坂の縁日に出懸けた。

裏の家では女の兒が産れて、お梅がねんねこで負つて、其處等を歩いて居るのを常に見懸ける。銚之

助は母親の死んだ年に、思想上に少なからぬ變化を來して、自から進んでながし雜誌社の編輯員になつて、今でもわづかの俸給で、毎朝風呂敷包をかゝへて出勤して居る。長兄の洋服姿も依然として淡竹の大藪の向ふにてくくくと歩いて行く。

ある日曜に、光子は縮緬の着物に縮緬の羽織といふ立派な扮装で、同じく盛装した兒を抱いて、下の家へと出懸けて行くと、

『もうおつくりが出来たのかねえ、まア、綺麗にねえ……』とお桂は迎へた。

『上の嫂様もまだ入らつしやらいの？』

『え、え、まだ來ませんがねえ、もうぢき來るでせうよ、』と子供の着物を見て、『よく似合ふのねえ！』

『い、え。』

と言つたが座敷の机に坐つて居る長兄の前に行つて、『兄さん今日は……』と丁寧に挨拶する。

今日は女連が三人お揃で、九段の鈴木に行つて、記念の寫眞をとらうといふのである。

やがてお梅も綺麗に粧つて、女の兒を抱いて來た。女の兒は友禪縮緬の美しいのを着て、莞爾して居る。相變らず扮装の話が出る。やれ帶留が好いの、半襟の色合が好いの、櫛が好いの、簪が好いのと際限がない。光子が金の指環を二つ迄はめて居るのを、お桂もお梅も羨ましいことに思つた。

お桂は一人を待たせて支度をした。鏡の前に立つて、髪の癖を頼りに直したが、生れつきぢやれ毛の

何うも思ふやうにならぬので癩癩を起して、『本當に厭になつて了ふよ、』と焦れて見たが爲方がないで、大抵にして着物を着た。じみな鼠か何かの紋附で、帶もよく見馴れた緋珍の丸帶である。

でも脍削なので、ちよつと姿が好い。

『嫂さん、よく似合ひますよ。』

とお梅が言ふと、

『え、え——、よく似合ふでせうとも！ 髪がべちやんこで、着物がお古のおゆづりと來てるぢやか

ね、』と言つて、帶をキウと堅く緊めて、『旦那様がもう少し働きがあんなさると好いんぢやけどねえ。』

『まア、嫂さんがあんなこと！』と光子は笑つた。

支度が出來て、俵が來て、いざ出懸けようとする時、主人が、

『歸りに土産を澤山買つて來るんだよ。』

『はいく〜かしくまりました。』とお桂は茶化したやうにいふ。

俵なので、存外早く、午少し前には、三人は寫眞を撮つてもう歸つて來て居た。紅谷のあんころが土産であつた。主人が自ら立つて來て茶を淹れる。寫眞屋の話が始まつた。室が立派であつたの、鬚の生えた寫眞師が可笑しかつたの、何處かの華族のお嬢さんが馬車でうつしに來て居たの、ダイヤモンド入の指環が立派であつたのと、話は容易に盡きなかつた。

一週間目に其寫眞が郵便で届いた。割合によく寫つて居た。立つた光子のが一番立派で、眉の長い細面の丸鬚姿がすつきりとして居た。男の兒をお桂が抱いて、お梅は自分の兒を膝にして、二人並んで腰を懸けた。女の兒の笑顔がいかにも可愛らしかった。

寫眞の話が一時三軒の家を賑かにした。いろ／＼な批評が出た。お梅の眼色の可笑しいのを言つたのは秀雄で、光子の手附の變てこなのを見出したのは銑之助である。お桂の位置の取りようが悪かつた爲め、顔が鳥渡別人のやうに見えるのを、『今少し傍に寄れば好かつた、』と主人が言つた。

『一番好く寫つた人は、割前をたんと出すが好いね。』とお桂はキャツ／＼と笑つた。

序に寫眞を藏つて置く小箱が其處に展けられる。明治の初年に大阪で撮つたといふ大小を差した父親の寫眞はもう黄く薄くなつて居た。それに兄弟が三人揃つて撮つた少年時代の寫眞、誰れだか解らぬ丸鬚の女と一緒に撮つた中年の頃の母親の寫眞、死んだ叔母の寫眞、嫂の寫眞、總領の姉の寫眞は其頃はやつた種板其まゝの硝子製で、木の框の壞れて取れたのを丁寧に母が白紙に包んで藏つて置いた。其の他に昨年英男と一緒に寫した母親の寫眞が一枚あつた。兄弟は皆なそれを手に取つて見た。

妻

妻

—

其頃はまだ電車はなかつた。見附の壕端の櫻は昨夜の雨に催されて大分蕾があからんで来たが、からりと霽つた朝は此頃にめづらしい麗かさで、朝日を受けた片側町には番傘が處處に干されてあつた。評判の細君の居る書籍店、理髪店のペンキ塗、靴屋、馬具屋の看板、麩麩屋、鰻屋と檐を並べて明神の宮の大華表へと接して居るが、其間に一軒、ダイヤモンド齒磨のびらの際立つて眼につく雜貨店があつて、色の白いよく肥つた言葉附の丁寧な五十二三の中老婦がいつも坐つて居た。

何うせ場末の小さい雜貨店、金目の品が置いてあらう筈はなく、毛糸、シャツ、ズボン下、革帶、石鹼などの日用品に子供相手の學校用具、繪草紙、繪はがき、手帳、インキ壺位が關の山であるが、それでも商賣はかなりに繁昌して、月々の儲けは一家の經濟を半ば補けて行くに十分であつた。それといふのも此中老婦の愛嬌が呼物になつたからで、此界限での唯一の御得意の士官候補生からは、『をばさんを

ばさん』といつもなつかしがられて居るのである。

『をばさん』は例の無邪氣な心配の無ささうな顔をして、前硝子の棚の前に、小さい錢箱を控へて、いつものやうに坐つて居たが、不圖傍にある算盤を取つて、二三度珠を動かして見て、何か少し考へて、今度は小さい帳面を出して、昨夜遅く賣つた品物を考へくつけ始めた。前の通りには女學生が行く、騎馬の士官が行く、フロックコートの紳士が行く、交番の傍の客待の車夫の群では、中折帽の洋服男と相談が出来て、籤に當つた車夫がガラ／＼と車を挽き出した。

其處へおろし屋が來た。

『今日は、』と元氣よく腰を懸けた。

『おや、革屋さんかね、』と眼鏡越しに男を見て、『まだ澤山あつたがね。此次にしてお呉れな。』

『さうですか、』と言つたが、腰を懸けたまゝ、煙草を出しかけるので、老主婦はマッチを取つて渡した。

『何うも不景氣で困るぢやないかね、』と莞爾しながらいふ。

『それでもお宅などは好いでせう。學校前の讃岐屋などではお客が無くつて困るつてこぼして居ますが、候補生さんが皆な此方を買ひに來るんで……。』

『あら、ま、さうかな、そんなことは無いぢやろがな。私の方こそ學校が遠いので生徒さんを取られて困るぢやないか。』

『何しろ、をばさんは商賣が上手だから敵はん。』

『さうかなこれでも上手かな、』と笑つた。

客が一人來てナイフを見せて呉れといふ。

主婦は脊髓の持病で曲り勝になつた腰をもたけて、種々のナイフの入れられてある箱を出して示した。

あれのこれのと客は選擇に迷つて居る時、ふと八丈の羽織を着た色白の丸鬚が眼に入つた。をばさんの胸は波立つた。をばさんはこの丸鬚を今朝起きた時から待つて居たのである。

丸鬚は昨年さる處に縁附いた娘のお光で、今日來るといふ傳言があつた。

お光は店からすぐ上らうとしたが、混雜して居るので思返して、家の傍の路次から裏へ廻つた。

劔の鳴る音がしたと思ふと、忽ち軍人が其處へ出て來た。昨年士官學校を卒業した少尉で、砲兵の黄い肩章と丈の高い姿とが際立つて眼に附いた。満更知らぬ顔でも無いので、お光は躊躇して顔を赧くして立留つた。

でも軍人は快活に、『や、これは失禮、』と言つて、二人並ぶことの出来ぬ狭い路次を笑ひながら身をかはして、さつさと街道の方へ出て行つて了つた。

勝手から入らうとすると、姉が流元に躡んで、せつせと跡仕舞をして居た。

『おや、お光！ 早いね。』

『ええ。』

と笑つて、『菓子屋に居る軍人さんは大變遅い出勤ねえ。』

『あ、今行つたね、いつももつと早いんだけど……。』

『あの山本さんと同期生ね？』

『あ、さうともねえ、山本さんが家の二階に居る時分、始中終よく来たがね……。そら杉原さんとか言つたがね。』

『さうでしたか。』

とお光は上らうともせず立つて居るので、

『何をしてるのさ、お上りな！』

お光は繻珍の鼻緒の新しい駒下駄を古下駄やらバケツやらの散らばつた汚い狭い入口にぬいで、棧に埃の積つた重い硝子戸を開けて八疊の間に入つた。八疊の間！ 此間はお光に取つて追憶の多いなつかしい室である。兩方は壁、天井も低いので、外から入ると、鳥渡何物も見えぬほどに暗いが、それでもお光には此暗いのがなつかしかつた。母親は門徒の信者なので、暗い壁に添つて、金色の大きな開きの

お光は店をのぞいて見たが、客は未だ去らない。母親は客の相手をしながら、お光と顔を合せて嬉しさうに笑つて見せた。また一人客が入つて来た。

つまらなさうな顔をしてお光は立つて居たが、ふと思ひついて、たぎつた鐵瓶に水を差して、また勝手元の姉の方へ行つた。

『ちよつと待つてお呉れ、これさへすますと、もう好いんだから、』と言ひながら、丸髻に結つた肥つた姉は頻に鍋や小皿を洗つた。

この姉は此家の總領娘で、なにがし大尉の未亡人で、今年十二歳になる女の子が一人ある。

『少しお手傳しませうか。』

『い、よお手傳なんぞ、お前、』と軽く言つて、『母様何うしたえ？ お客かえ？ 此頃は少しは店が忙しいもんだから……』と洗ひ終つた鍋を棚に伏せて、『お前が来るツて言ふと、母さんはそれア大變なんだから。』

『何うして？』

『それは大騒よ。季子はあ、も可愛もんかと思ふよ、』と笑つた。また始まつたとお光は思つたが、話を改へて、

『山本さんから便があつて』

妻

「此間奥さんをつれて来た話をお前は知つてるねえ？」

「いゝえ……奥様お貰ひなすつたの？」

「あゝ、伏見で貰つたんだって、此間伴れて来てお友達にして貰ひたいって言つてたよ。」

「何んな奥様！」

「ちよつと綺麗な、丸顔の。」

「いくつ位。」

「さうね、お前位だらう。」

「どんななりをして。」

「派手なお召を着て金鎖を下けて、指環の三つも箆めて大したなりだつたよ。」

「それぢやお里が好いのね。」

「何でも宇治の金持の娘だつて、京都の高等女學校を卒業して學問もあるんだって話だよ。」

「それぢや私なんぞお友達どころか……。」

「あれで丈さへあると立派な奥様なんだけれど……。」

「そんなに小さい人？」

師は點頭いて「何うも押出しが立派でないね、……だから折角のなりもちつとも引立たないのさ。」

「何處に居るの。」

「よく聞かなかつたけれど、何でも大久保に下宿して居るつて……。」

「夫婦で？」

「それアさうさね、お前、」と笑つて「いづれ近いうちに家を持つんだらう。」

お光は其士官の此二階に居た時のことを思ひ出した。まだほんの娘で、何の氣も無かつたが、裏のお政さんがぞつこん其士官に打込んで居たので、唐物屋ではお光ちゃんをあの人に押附ける積だの何だのと吹聴した。其士官も亦戯談半分にお光の肩に手を懸けて「お光さんは私と一緒に伏見に行きませんか、」など、言つた。寄席にも一緒に言つた。少尉の服を着けた寫眞も貰つた。

あの頃はまだ父様が居た！と思ふとお光はなんとなく悲しくなつた。無邪氣で快活で嫁に行く時にも涙一つ滴さぬ程の娘であつたが、何うした加減か、此頃は夥しく物思はしけになつて、何ぞと言ふと涙が出る。

「田村さんは？」

「あの方久しく見えないよ。母さん、お嫁さんを世話して遣り度いつて言つたけれど——。」

「今も砲工學校でせう。」

「あゝさうだらうよ。好い人だけれど、舅や小舅が多いんだってね。それだから困るつて母さんが言

つてたよ。』

『本當に氣の毒な人よ。妹が二人弟が二人あつて、それを皆な世話しなくちやならないんだから——。』と少し途切れて、『だから自分でも僕の處なんかに来る女はありやしないつてよく言つて居てよ。』

『本當に好い人だがね、』と姉はバケツを提げて裏へ水汲に行く。

お光はほつねんとして居たが、佛壇が開いて居たので、思ひ出して、此正月に死んだ父の位牌の前の香爐に線香を一本立てた。香の煙が暗い中にすうと細く颯る……ふと座敷との間の硝子戸が重さうに明いて母親が入つて來た。

聽て相對して坐つた母親も莞爾して居る。娘も莞爾して居る。一言も交へぬけれど、二人共此の上なく嬉しさうである。母は娘の眼を顔を、娘は母の眼を顔を互にちつと見合はした。少時してから、

『此頃は忙しいのね、』と言つて、紫の風呂敷を解いて、つい其處で買つて來た母親の大好物の餅菓子を出した。

『何ぢやね、まア、こんな心配は措くが好いがね、來る度々に氣の毒ぢやなア。』

『なあに母さ、其處に出來立のおいしさうなのがあつたから。』

母親と相對すると不思議に音聲が出る。母さんを「母さ」と短く呼ぶのは行田流である。母親はなまに

急須を載せて、茶の罐を出しながら、『お前加減が悪いつて何うぢやな。』

『大したことは無いのだけれどね、何だかだるくつて、氣分が悪くつて……胃が悪るいんだと思ふけれど……。』

『醫師に見せたら何うぢやな。』

『それほどのことも無いから。』

『無理をするといかんぞな、』と言つた母親は、ちつと娘の顔を見た。娘の顔はいくらかやつれて居た。眼の周圍には暗い影のやうなものが出來た。

やがて茶が掩れられる。姉のお榮がせつせと雑巾懸をして居る姿が勝手の硝子戸越に見えたので、『お榮、茶をあがらんかな、お光が御馳走を持つて來て呉れたで。』

『それは御馳走様。』

かう言つたが、姉の働いて居る禪懸の姿は依然として硝子越に見えて居た。

母子が餅菓子を食べ、茶をすゝり、樂しげな長い物語を爲て居る間に、店に客が來て母親は二度立つた。さうする中にお榮も勝手の跡仕舞を濟まして其處に來て坐つた。

『それぢや御馳走になるかね。』

と、笑つて鹿子餅を一箇取つて、『勤さんこの鹿子を好きね。』

『さうよ、』とお光は笑つた。

『かの子ツて、名が好いッて言つてたよ。』

『何うしてぢやな。』

『かの子の君とか何とか新體詩につくるんだらう、それでだよ。』

『まアさうかな。』

と母親は大袈裟に笑つた。けれど母親にはよく其意味が解らなかつた。すぐ言葉を續いで、

『勤さん相變らずかな。』

『え、』とお光は煮切らぬ返事をしてゐる。

『お前の家も随分變つてるね、』と姉はがさつ者の無遠慮に、『相變らず屏風を立て廻して遣つてるんだらう。本當に氣が盡きる商賣だね。頭腦から絞り出すんだからね。………それにしてもよく種切にならないね。』

と、口癖の『ね』を頻りに重ねる。

『本當よ。書いてる時は氣むかづしくつて本當に爲方が無い。いつかなんぞも筆を買つて來いッて言ふから、坂下へ行つて買つて來ると、いつものやうな筆でなかつたッて、それは怒るの、怒らないのッて、

此間なぞも、これから書かうとして机に向つてると下の家の下女が來てべちやんく饒舌つたんでせう。

腹が立つたと見えて、歸れ早く歸れッて嘸鳴るんですもの、私は氣の毒で何うしようかと思つたのよ。』

『あのお雪かえ、さぞ喫驚したらうねえ、』と姉は笑ふ。

『喫驚する位なら好いけれど、それから怖がつて、滅多に來はしない、用があつて來ても、すぐそこそと歸つて行つて了ふのよ。』

『それでも書きさへすりや好いお錢になるんだらうね?』

『何うだか知れないのよ。』

母親は婚の青い顔を浮べた。季つ子の可愛さ! 十七やそこらで手離すのには忍びなかつた。其話のあつた時にも少からず反對した。お光の兄が今の婚の親友で、兄が二階に居る時よく遊びに來て、其顔は昔から知つて居たが——堅さうなしつかりした人だとは思つて居たが、あゝいふ人に最愛の季子の娘を嫁けようとは思はなかつた。貧しい中から父親の反對するにも拘らず、お嬢さんのやうに育て、琴の奥免許までも取らせたのは何の爲め? 立派な三枚襲も作つて遣り、金の指環の一つも買つて遣つたのは何の爲め? 年頃に悪い評判でも立てられぬやうにと氣を揉んだ上にも氣を揉んだのは何の爲め? 士官候補生の日曜下宿などよくいやであるのに、進んで世話をして遣つたのも何の爲め? 若い士官を二階に下宿させたのも何の爲め?

其處から餘り遠くない屋敷町に、お光の學校友達が一人居た。小學校を卒業すると華族女學校に行くもの、お茶の水に入るもの、家に居て裁縫に通ふもの、其家々の都合で區々の運命を得て、木の葉のやうに散々になつて了ふのが女の習であるが、此二人は學校を出てからも、二年間同じ琴の師匠に通つたのが縁で、遊びに行つたり來られたり、曾ては先方の母親も縁談のことで慇々訪ねて來たことがある位、嫁いてからも里に來る度毎に、お光は其友達に逢ふのを樂みにして居た。

其日も菓子折を持つて、午後からお光が行くと、友達は大喜び、引張るやうにして自分の室に伴れて入つて、學校に居た頃と少しもかはらぬ物語が始まつた。

盡きぬ話の中に母親が入つて來て、

『お光さんの丸髷のよくお似合なさること！』

『いゝえ。』とお光は頭を氣にして顔を赧くする。

『もう、やゝさんがお出來なすツても好い頃ですのに、まだですの？』

『いゝえ。』

『お母さん、そんなこと何うでも好いぢやありませんかね。』

と娘が傍から言ふと、

『好いがね、まア、本當にお光さんなどは立派な奥様におなんなすつた。お前なぞももうぐづぐづしては居られませんよ。』

『母さんはぢきあんなこと言ふんですもの。厭になつて了ふよ、ねえお光さん。』

『もうきまんなすつたんでせう？』

『まア、お光ちゃんまでそんなこと！』

と娘は呆れた顔をする。

『だつて本當でせう。私、母から聞きましたもの、ねえ、をばさん。』

『そんな話があるんですけれど、捗々しくありませんでね。』

『母さん、うそよ。』

と娘は一生懸命に打消した。

娘は名をお常と呼ばれた。何方かと謂へば、容色は餘り好い方では無かつた。父親は舊大名の家扶で、近所のお屋敷に毎日朝から詰めて居る。ひとりつ子で養子を貰はねばならぬ身の上なので、八方に口をかけて頼んで置いたが、久しく好ましい縁が無かつた。處が今度或役所の技手で、いよく話が纏つたといふことをお光は母から聞いたのである。

お光は嫁いてから一年になるが、夫といふものがまだ好く解らぬ。嬉しいやうな、難かしいやうな、畑たいやうなものと思つて居る。夫婦と言ふものは、夫婦にならなければならぬからなるので、餘り好んでなるべきものでは無いと思つて居る。

それは自分も嫁に行く時は羞かしかつた。けれど人が羞かしかつたり、其親達が一生懸命に養子をさがしたり、自分と同じやうに夫を持つたりするのと思ふと何だか不思議でならなかつた。

『本當に何時ですの？ をばさん、』と改めて訊くと、

『うそよ、うそよ、私養子など貰ひませんから。』

とお常は猶頻りに打消した。けれど何處となく調子のはしやいで、様子がいつもとは違つて居た。

『そんなに隠さないでも好いぢやありませんか。』

『だつてうそですもの。』

『それなら好う御座んすよ。何うせ分ることだから………けどもね、』とお光はお常の顔をぢつと見て、『けどもね、二人はいつまでも仲好くしませうね。』

『えい、えい。』

とお常はお光の手を握つた。

母親が養子を連れて来た時、二人は向ひ合つて居る。二人は向ひ合つて居る。二人は向ひ合つて居る。

二人が合奏するのを、母親は楽しさうに嬉しさうにして聞いた。相の手の多い松づくしの中途で、お光が調子を外して顔を赧くして少しどぎまぎした。お常の爪音は冴えて高かつた。

合奏が終るとお光は琴爪を直しながら、

『少し遣らずに居ると、すぐ忘れて了うんですもの、此間もお師匠様の處に行つてさらつて頂いたんですがね、鳥渡した處を忘れて了つて本當に仕やうがないのよ。』

『お家でもよくなさるんでせう？』

と母親が訊く。

『うちで居ない時など、少しはさらつて見ますけれど………何だか餘りのんきらしくつて、里に居る時のやうには参りませんの。』

『そんなことは無いでせう、』とお常は笑つて、『旦那様に聞かせてお上げなさい、旦那様琴お嫌ひ？』

『嫌ひなことは無いでせうけれど………矢張煩さいんでせう。』

『煩さいの。』

この琴の音をうるさいとは思議至極と言つたやうな顔附をした。

『それは始めの中は、喪分など弾いて御覽なつて言つたこともありましたが、此頃ではまづ私の琴なんか聞き度くないんでせう………減多に爪をはめることなどないのよ。』

『ふい。』

とお常には矢張不思議であつた。

お常には旦那さんといふことは謎である。學校友達は結婚すると、多くは變な風になつて、いつとなく交際が出来なくなつて了ふが、何うしたわけか、それが先づ第一にわからない。此のお光さんなどはそれでも結婚してからも、かうして交際して居るが、結婚しない前とは何處かに違つたところがある。さうかと謂つて、何處が違つたかと言はれ、ば、それは解らぬけれど確かに違つて居る。何處か違つて居る。

『御亭主を持つてはなか／＼さうは我儘には行きませんからねえ！』などと母親はいつもよく言ふが、夫といふものは、そんなに難かしい面倒なものかとお常はいつも思ふ。

これまでもお常はお光に由つてその疑問の幾分を解かうと試みたことは幾度もある。けれど娘の身ではさう露骨に尋ねることも出来ない。お光もまたいくら親しい友だと謂つて、すつかり打明けて話すやうなことはしない。寧ろお光にもまだ夫といふものがはつきり頭に映つて居ない。従つて謎は依然として謎であつたのである。

で親しい二人は三時頃まで、琴を弾くやら、お詣を食べるやら、學校時分の楽しい話をするやらして面白く遊んだ。殊に、お光に取つては此三時頃が命の光輝でもあるかのやうに思はれた。

餘り遅くなつてはと思つて、やがて暇を告げた。里に歸ると母と姉とは御馳走するつもりで、一生懸命に五目飯をつくつて居た。竈には火が赤く燃えて、釜が吹きかゝつて居る。俎板の上にはかんべうの煮附けたのが載せられてある。皿には赤漬生薑が入れられてある。姉は襷がけで頻りに慈姑を細かく刻んで居るところ……。

お光は其身の娘であつた時のことを思ひ出した。赤い襷を懸けて此勝手元に働いた時のさまが眼に見える。其頃兄が二階に居た。兄の友達がよく來た。今の夫が緋の羽織を着て、店の硝子戸を明けて、其處に人が居れば軽く挨拶して二階に上つて行く。兄の友達は長座のものが多かつた。飯時が來ても中々歸らうとしなかつた。何があんなに話があるんだらうと母親はぶつぶつ言ふ。兄は詮方なくありもしない自分の巾着の錢を掻集めて、蕎麥の盛をお光に命じた。ある時などは耶穌のかたまらしい頭の毛を長くした男が來て、午頃から夜の十時過ぎまで、兄と疊を叩いて議論した。箒に手拭を被せて置いても何の効能も無い。不思議にして居ると、それも其箒、箒が倒れて居たのが後で解つて、大笑をしたことがあつた。兄は又兄で夜遅くから、新體詩といふものを作つた。鼻をほじくりながら、ウーンウーンと唸りながら筆を運ぶので、眠られなくなつて困つて、『兄さん唸るのだけはよして下さい、』と頼んでも頼んでも矢張唸つた。今の夫に嫁ぐ話のあつた時、『兄さんのやうに唸る人なら厭だ、』と言つて笑はれたことを思ひ出した。

半切に移した飯を團扇で煽いで、細く刻んだ材料を混ぜる。先づお初に神棚と佛壇とに上げて、さて歸りが遅くならぬやうにと、お光は其暗い八疊の一隅で急いで御馳走になつた。

『それでは、母様、また來ますから。』

と、店で客の相手をして居る母親に聲を懸ける。

何となく心細かつた。

『さうかな、もう歸るかな。』

と母親は振返つて、硝子戸の前に浮き出す様に其姿を顯はした娘を見た。母親の胸も物淋しかつた。

『また、暇を見て出懸けてお出！』

『母様も一日出て來ると好いがね。家では晝の間は留守だから。』

『あゝ、其のうち都合して行くわ。』

『それでは左様なら！』

『體も大事にせんといかんぞな。なんなら醫師に見て貰ふ方が好いがな。』

『あゝ。』

『いろんなものも持つたかな。』

傍に風呂敷包があつた。其中に淺草紙やら齒磨やら洗濯石鹼やら封筒やら巻紙やらが入つて居た。母親はそれを帳面に附けて置いた。お光は來る度に母親から何か店の品物を貰ふのが例になつて居たが、今日は新形の博多地の錢入れを一箇貰つた。

『姉さん大變御馳走になつて、……………』

『ちよつとお待ち、今、……………』と五目飯を詰めた小重箱の上を布巾で拭いて、『これを勤さんに持つて行つてお上げよ。何うせ旨くはないけれど。』

『さう氣の毒ね。』

『重いからかへつて迷惑かも知れないよ。』

と笑つて、『鳥渡その風呂敷をお出し、包んで上げるから。』

重箱を下に、上に雜貨品を載せて包んで自分で下けて見て、

『そんなに重くはないよ。』

『あゝ大丈夫、ちつとも重くはない！』とお光も下けて見る。

『ぢや姉さんも其のうち來ると好い。』

『あゝ其のうち……………ぢや勤さんにも宜しくね……………』

姉がかう言つた時は、お光はもう下駄を穿いて居た。

路次を出て、店先で今一度母親の顔を見て、挨拶して、そして歸途に就いた。五時に近い日影は蔭つて町通も何となく忙しい。角の牛肉屋では女がキャツ／＼と騒いで居る。氣まぐれな風が何處からともなく吹いて来て、四辻に黄い埃を高く颺けた。

交番の巡査は退屈さうに立つて居た。芽を出した柳が青々と靡いて居る。見附の方から、スコッチの脊廣の焼けたのを着た丈の高い男が、海老茶の風呂敷を抱へて、腰辨の群のするやうな態度をして、疲れ切つたといふ風で歩いて来た。

『お光！』

と聲の懸けられて、お光ははッとして、頭を舉げて、役所に勤めて居る仲兄の顔を見た。長兄は田舎に行つて東京には居ないのである。

『今お歸り。』

『あゝ。』

『此頃は遅いのね。』

『何アにさうでもないさ。』

こんなことですぐ別れた。

米屋の角で曲つて、荷い溝について、たぐりかきした衣を上つた。いつも通る角の酒屋には、酒に酔つた労働者の聲がする。夕日はベンキの剥けた戸の堅く閉された小さい耶蘇會堂の屋根に淋しく照つて、其餘光が黒い汚い溝に映つた。

ふと、ある路の角で、

『お光さん』と又呼び懸けるものがある。

三

お光は胸を躍らした。

角帽、金釦——色の白い眉の昂つた好男子。

『何處に行つたんです？』

『鳥渡……』

『母さんの乳を飲みに行つたんですね。』

お光は顔を赧くしてもじ／＼して居る——二人は並んで歩いた。

『中村君此頃出てますか。』

『えゝ。』

妻

『社へ出るのは厭だつて言つてるでせう?』

『此頃ではそんなにも……』

『左様ですか。』

又黙つて歩いた。

『お里でもお變りありませんか。』

『え、皆な……』

『此頃は姉さん御一緒ですね。』

『え、。』

『柳町の家はもうすつかり疊んだんですか。』

『え、。』

『お父さんがゐなくなつてツツから淋しいでせう?』

『え、何うしても……』

お光は『え、』で持切つて居る。何だか嬉しいやうで、きまりが悪いやうで、なつかしいやうで、自分で自分の身が自由にならぬのがもどかしいやうで、胸が際限なく騒ぐ。夫の親友、長兄の親友、其身が今の夫に嫁ぐに就いても、此人が一方ならぬ盡力した。容易に承知せぬ母を説いて、『何時までお光さ

んに水汲をさせて置く積りですか?』と言つた。深切で、やさしくツツて、そして年寄のやうな解つた口を利くので、長兄の友達の中でも此人のみには父母も感心して居た。いや、そればかりではない……實際そればかりではない……。

長兄の居る頃二階によく來た此人も、長兄と同じく新體詩をつくつた。正月には歌留多に來たこともあつた。長兄の友達にも、かういふ人があるかと思つたこともあつた。

今の夫に嫁ぐ日に、荷物の宰領をして、荷物と一緒に俥に乗つてついて行つて呉れたのも此人である。結婚届に證人になつて呉れたのも此人である。

少時黙つて歩いたが、

『今日は何方へ?』とやがてお光は訊く。

『ちよつと其處まで。』

『甲良町にいらつしやるんでせう、』と、續いて訊かうとしたが、それは口から出ずに、

『此頃はちつとも御出になりませんのね。』

『少し學校の方が忙しいもんだから、つい御無沙汰してました。その内行きますから、中村君によるしく言つて下さい。』

丁度別れる路の角に來て居た。角の家に白蓮が美しく咲いて居た。

『それぢや……』と男は帽子を取る。

『左様なら。』と、お光は丁寧にあ挨拶した。

暫し立留つて其後姿を見送つたが、男は振り返りもしなかつた。其路から少し行つた處に、大きな屋敷があつて、其門際に見事な八重櫻がある。其屋敷に今年十五になる娘が居て、將來は其大學生が其處に養子に行くに決つて居るといふことをお光は夫から聞いて知つて居た。

お光の心はさびしかつた。自づと出る涙を襟袷の袖でソツと拭つた。夕暮の風が埃を立てる。

四

夫はもつ歸つて居た。不機嫌は兼ねて期して居たが、期して居たよりも一層不機嫌であつた。是までも里に行つて好い顔をされた例しは尠いが、さりとして今日のやうなこともなかつた。遅かつたとか、亭主が飯も食はずに居るのに何時まで遊んで居るとか、小言を言つて呉れ、ばまだ好いが、今日は知らん顔をして、洋燈も點けず薄暗い座敷にほつねんと坐つて、見えもせぬ本を見詰めて居る。

『只今歸りました』

と挨拶しても返事が無い。

お光は機嫌を取らぬ顔で、大變遅くなつて済みませんでした。ちつと早く歸る積りでしたけれど、お光の處に行つたり何かしたもんですから、つい遅くなつて了つて……さぞお腹が空いたでせうね、』と言つて、急いで平常着に着改へて、洋燈を點けて夕飯の準備に取懸つた。

やがて出来た夕飯の膳に向つても、夫は矢張押黙つて難かしい顔をして口を利かうとしなかつた。姉が持たせて寄越した五目飯を食ふには食つても、旨いとも拙いとも言はず、何處から持つて來たかも訊かず、お終の湯を飲み終ると、箸をからりと捨て、ふいと座敷に立つて行つて了つた。

例の屏風を立廻す氣勢がする。

お光はたつて懇望されて此處に嫁いで來たのである。まだ年も若いし、裁縫も十分稽古させて無いし、殊に、學問にかけては何も出来ないから、……と長兄が幾度も斷つた。それにも拘らず、何が出来なくつても好いからとたつて望まれて來たのである。

それは母親の手傳をして、飯の炊きよう汁のつくりよう位は知つて居た。家事に懸けても満更のお嬢さんでも無かつた。けれど十七の小娘に文學などの解りよう筈はない。

お光が此家に来て、第一に困つたのは夫から小説を讀ませられることであつた。講談とか落語とかなら寄席に行つて聞いても居るので、全く解らぬことも無いが、難かしい字の入つた、戀とか涙とか悲哀とかいふ小説は、少しも頭腦に入らなかつた。それを始めの中は、夫は熱心に説明して聞かせて呉れる。此處が好い處だ、この文章が巧い、この文句が堪らない、此男と此女とがかうした具合で失戀の境に陥

る、情もあり涙もある。實に清い涙だ、悲しい情だ！ と長い頭髪を顔の傍に寄せて、熱い呼吸を吹き懸けながら語る。それがお光には堪らなく辛かった。嚙殺しても嚙殺してもあくびが出て来る。點頭いて解つたやうな顔をして居ても、心は里の母親の處に飛んで居る。

遂には夫も失望して、

『お前は小説など讀んだことは無いのか。』

『讀んだことはありますけれど、小説は嫌ひですから。』

とお光はいつた。

それから筆を執つて書くといふことも、お光にはよく呑込めなかつた。一枚書けばいくらかななる位、唯ほんやりした考で、書いて居る間は何故あのやうに機嫌が悪いか、何故あのやうに氣を焦せるのか、何故あのやうに人に當るのか、そんなことは一向に解らなかつた。でも、今では段々それにも馴れて、解らぬなりに、さうしたものと決めて了つて、其時は腫物に觸るやうにソツとして置く。

自分の周圍を見廻しても、夫のやうな人は少い。下の家でも里の近所の人々でも、もつと快活で、さつぱりして居て、日曜日などには細君子供を伴れて上野淺草に出懸けて行く。夜も偶には睦まじさうに伴れ立つて寄席に行く。官吏軍人には殊にさうした樂しげな夫婦が多かつた。それは夫も結婚當座は彼方此方と遊びにも伴れて行つて呉れた。新婚旅行といふほどでなくとも、兎に角江の島鎌倉にも行つた。

けれど内の人は何うもはきはきしない。捌けない。沈んで居る。それに、話すことが難かしくつて解らない。面白くもないことを面白がるかと思ふと非常に面白いことを見向もせず、さつさと行つて了ふやうなことがある。

箱根に行つた時、大地獄といふ處へ伴れられて行つたが、夫の愉快さうなのに引かへてお光は恐れ慄いて顔を眞青にして了つた。面白いどころか、珍らしいどころか、駕籠に取附いて一刻も早く山を下ることをお光は望んだ。其時夫は『駄目だなア、怖いことは一つもありやしないぢやないか、かうして己も立つてゐるぢやないか、』と叱るやうに言つた。夫は雲が美しいと謂つては佇立み、水が綺麗だと言つては駕籠を停め、湖水が面白いと言つては其處に一泊しようとした。けれどお光にはさうした自然の景色よりも賑かな東京の街の方が面白かつた。

ある時、夫が友達に、『女といふものは、君、始末に行かんもんだね。一緒に伴れて歩くにしても世話が焼けて仕方がありませんよ。言はゞまア小便の世話まで爲て遣らなければならぬのだからな！』と言つて笑つた。これは其前の日曜に珍らしく夫に伴れられて瀧の川の紅葉見に出懸けて、歸途に便所が無くつて困つたことをそれとなく言はれたのである。お光は顔を赧くした。

兎に角お光は淋しかつた。家に舅小姑でもあれば、まだそれにまぎれて、いくら賑かに暮すことが出来たかも知れぬが、若い同士の鼻を衝き合はせての日毎の平凡な生活！

夫は西洋の本を買つたり借りたりして来て、よくそれに讀耽る癖がある。筆を執つて居らぬ時は、必ず机に向つてそれを讀んで居る。時には寢食を忘れることすらある。一人で面白がつて居る。そして退屈すると、妻を一人打棄て、置いて勝手に出かける。

妻の身にしては、これが何より物足らなかつた。時々長火鉢の前に来て坐つて、妻の淹れた茶を旨さうに飲んで、態々使に行つて買つて来た餅菓子を食つて、埒も無い世間話でも爲て貰ひたかつた。それは何うせ面白い話は出来ぬ、高尚な話に調子を合はせることも難かしいが、さし向ひになつて莞爾と楽しさうな顔を見もし見せもして、互に打解けるのが夫婦ではないか。

お光は本を憎み、筆を憎み、立て廻す屏風を憎んだ。

五

勝手の洗物を済まして、お光は長火鉢の前に坐つた。茶を一杯湯呑に注いでさびしさうにして飲んだ。里のこと、お常のこと、途中で逢つた大學生のことが胸に集る。何だか悲しいやうな氣もすれば、遣瀨ないやうな氣もする。

體が懈怠い、何をするのも厭だ。今日母さんに積つて裁つて貰つて来た夫の袷を縫はうかと思つても見たが、何だか開くつて針箱を出す氣にならぬ。ふと、月々あるもの、縫いの思ひ出して、……もしやと思ふ。『もしや出来たんぢやないか』と繰返して見る。それは今迄にも時々無意味に停滞することであつた。けれど其時には頭腦が痛いとか、氣分が悪いとか、屹度何處かに異狀があつた。月經丸を用ひさへすれば、二三日の中には必ず効能が現はれた。何うも今度は様子が少し違ふ。薬を先月も飲んだが効能がない。頭痛も爲ない、氣分も忘くはあるが、いつもほど神経が昂つたり苛々したりしない。『出来たのか知らん、』とまた考へて見る。

子と謂ふことはお光には尠くとも新しい問題であつた。懐妊する、子が産れる。珍らしくもない事實である。けれど他人が子を産んだり育てたりすると、自分が産んだり育てたりするのは大分違ふ。

お光は其新らしい問題に突當つた。

譯もなく悲しくなる。『子供が出来れば、もう一生——』と思ふと涙が出た。一週間ばかり前に夫婦で衝突して、この長火鉢に相對して、『いけないなら、今の内ですから………本當に戯戯ぢやありませんか、眞面目に考へて下さい、』と言つた。夫は暗い顔をして、黙つてお光をぢつと見詰めた。離縁——いけないものなら、離縁するのがお互の爲めである。世間にもいくらも例がある。恥かしいけれど恥かしい位には更へられない。とかうお光は思つて居る。夫は其時は黙つて何も言はなかつたが、二三日して機嫌が直つてから、『お前の没分曉わかしやにも困る。己がこれほど思つて居るのがお前には知れないのか。一度結婚した以上は離婚などといふことを考へてはならぬ。離婚などさう容易く出来るものではない、』と言

つてそして戯戯半分に、『お前よく愛憎づかしを言つたな、今に後悔させて敵を打つて遣るから覚えてお出！』と聲高に笑つた。

お光は夫に氣が合はぬと謂ふのではない、そんなことは無論意識しては居らぬ。優しくさへされると好い夫、戀しい夫、力になる夫、一生を託するに足る夫となるのであるが、難かしくされると、『もつと好い人？』がすぐ胸に込上げて來るのである。

『子供が出來ると、もう一生連添つて居なければ……』と再び思つて、涙を袖で拭つた。

あたりはしんとして居る。蛙の低い聲が何處からともなく聞えて來る。隣の家では老母と娘とが提灯張の夜業をして居ると見えて、時々物を打つ音がして、話聲笑聲が其間に交つて聞える。向うの二階屋では娘が琴のおさらひを始めた。

お光は立つて、裏の雨戸を閉めにかゝつた。裏の林は眞暗で何となく無氣味だ。雨戸を繰つて了ふと、屏風で圍んだ夫の机の上の洋燈が殊に際立つて明るく障子に照りかゝやいた。何をして居るのか、眠つてでも居はしないかと思はれるほど靜かである。お光はソツと覗いて見た。夫は机の少し横に肘を張つて跼坐をかい、髪の毛の長い頭を紙の上に低れて一生懸命に筆を走らせて居た。

ぐるりと廻つて表の雨戸を閉めに懸ると、『もう少し明けてお置き！』
夫の聲は説かつた。

お光は茶の間に戻つて猶少時坐つて居たが、思返して押入から針箱を出した。洋燈の心の切りやうが拙いのか、石油が悪いのか、ほやが眞黒になつて、あたりがいかにも暗い。餘り氣になるので、一度消して、掃除して、心を切り直して見た。けれど矢張煙が立つて、やがて元のやうに暗くなる。

風呂敷包を出して中から裕を出した。瓦斯入銘仙の黄懸つた縞である。母は忙しい中で、それを裁ちながら、『勤さんが見立て、買つて御座つたのか、地味ぢやな、これは……』と言つた。成程地味である。何うせ買ふなら今少し好いのがありさうなものだ。私が買つて來ると、何時も難癖をつける癖に、自分で買つて來たのなら、こんなのも好いと見える。

こんなことを考へながら、お光は針山から針を取つて糸を通した。袖になるところをやがて縫ひ始める。

時計が八時を打つ。

琴のおさらひがまだ聞えて居る。今のは確かに越後獅子だ。あの相の手の處が出來ぬと見えて、幾度も幾度も繰返してさらつて居る。娘時代が何となく懐かしい。

ふと座敷の障子が開いた。

續いて、夫が縁側から駒下駄を突懸けて庭に出る氣勢がする。氣が盡きたと見える。お光は茶の間の障子を明けて闇を覗いて見た。夫の黒い影は庭の彼方に行つたり、此方に來たりして居る。

『お茶でもあがりませんか。』

と聲を懸けて見る。

返事が無い。

やがて、黙つて夫は門を出て行つたやうな様子。

暫くすると、今度は女の小刻みな足音が近づいて來た。聞き馴れて居るので誰だかすぐ解つた。

『嫂さん。』

と其人は其處に來て聲を懸けて、色白の顔を闇から出した。

『お孝さん?』

『嫂さんお裁縫?』

と縁側に腰を掛けたのは今年十九、勤の弟の軍人の内縁の妻で、宇都宮の士族の娘だが、祝言をせぬ中に懐妊したので、この正月から下の家に来て居るのである、

『まアお上がんなさいな。』

『難有う……』

と言つたが、『今其處で、兄さんに逢つてよ。』

『下の家にいらしたの?』

『何うですか、』と言つて、途切れて、『其處等散歩に行つたんでせう、屹度。』

お孝はやがて茶の間が上がつて來て坐つた。

『嫂さん、よく御精が出ますのね。』

『いゝえ。』

『兄様の裕?』

『えゝ。』

お孝の腹はもう人目に立つほど大きくなつて居た。

『今下の家の嫂さんと言合つて來たのよ。』

と突然お孝がいふ。

『何うして?』とお光は眼を睜る。

『宇都宮から下の兄さんの處へ手紙が來ましてね……重い物を持たして呉れるなつて言つて來たんでせう……私、悪かつたけれど、此間、烏渡さう言つて遣つたの。下の嫂さん、水を汲ませたり何かするんですもの』

『それで何うして?』

妻

『何もそんなこと向うに言つて遣らないでも好いだらうつて嫂さん、むきになつて怒つてるんですもの。私は困つて了つてよ。それや私も悪いのよ。世話になつて居て、そんな我儘を言つて遣つたのは悪いけれど、……家に居て達者な時でさへ、水桶を下けたことなどは無いのに、この體で、あの細い路次を……。』

『でも懐妊して居る時は、働く方が好いつて言ふぢやありませんか。』

『だつて嫂さん……』

『兄さんはなんて言つて居て?』

『兄さんも怒つて居たやうでしたよ。いつもなら、何とか言ふんですけれど黙つて火鉢の處に坐つて居ましたよ。』と云つて、考へて、『でも爲方が無い。體には換へられませんかからねえ。』

『さうですともねえ。』

『宇都宮でも下の嫂さんは、あゝした女で爲方が無いから、勤兄さんの方に行つて何でも相談しろつて、いつでも言つて來ますのよ。此方の兄さんは、しつかりして居て嫂さん仕合せですわねえ。』

『いゝえ……』

とお光は煮え切らぬ返事をして、

『もう、來月?』

『いゝえ、さらい月よ、嫂さん。』

『もう、そんなになると、大儀でせうね。』

『それはね、何うしても……』

とお孝は笑ふ。

『一體に、懐妊して居ると、何んな風ですか?』

『さうね、ちよつとどんな風ツて、言ひ難いのねえ。……』

お光の出した茶をお孝は飲む。

『でも、まア、何んな風?』

『さうねえ……』と躊躇して居る。

『もうお腹ん中の子が可愛いでせう。』

『さうねえ、可愛いツて言ふほどのことはないけど……もう動きますからねえ。』

『どんな風に動いて?』

『それ今も動いてよ。』と、お孝は自分の腹の帶の處を指して、

『そらまた……動くのが見えるでせう?』

お光にはちよつと解らなかつた。

『動く時はそれは變な氣持よ。丁度、あの牛乳の煮え立ちかけた時の皮ね。あんな風に動くのよ。』
『何だか氣味が悪いやうねえ？』

『それは氣味が悪いのよ、嫂さん。』

『生れる迄は心配でせうね？』と他人事でないやうな氣がする。

『それはもうねえ、早く産れりや好いと思ふのよ。』

『人間ッて、變なものね！』

『さうねえ！』

と二人は顔見合せて笑つた。

『嫂さん、あるものはあつて？』

と更めてお孝が訊く。

『ありませんの。』

『ぢや、屹度出來たのよ。』

『まだ分りやしない！』

『出來たのよ、屹度、』とお孝は笑ひながら嫂の顔を見る。

お光は里から買つて來た五日飯を籠に盛つて、小若を添へて出した。で、お孝が脚籠走になつて居ると、また門前にけた、ましいい足音がして、呼吸を切らしてはひつて來たのは、下の家の嫂のお三輪である。

縁側からお孝の長火鉢の前に坐つて居る姿を見て『なんぢやね、まア、お孝さん、此處に來てるのかね、フイと出て行つて了つて歸つて來ないから心配したがね。呆れた娘ぢやないかね。』

今年二十八、あけつ放しの元氣な女で、東京に來て久しくなるが、相變らず昔の田舎訛が除れない。子が無いので言ふことが若かつた。

『まア、お上がんさい、』と、お光が立つと、『まア、措いとくれ、この娘が居さへすれや好いんぢやから。』

と、今しがた互ひに言合つたとは思へぬほどの上機嫌である。

お光は無理に嫂を上に請じた。暗かつた室は忽ちにして賑かになつた。嫂の饒舌る聲と笑ふ聲とが闇を破つて聞えた。

勤は散歩から歸つて來た。縁側から座敷の屏風の中に入つて、漸く集めて來た思想を筆に上さうとした。けれど次の間の女連の笑聲がいかにも喧しい、下らぬことをキャツ／＼と騒いで居る。けれどまさか呶鳴るわけにも行かぬので、チョツと舌打をして、執り懸けた筆を投じて、仰向に倒れて了つた。

翌日は日曜日で上天氣。お光は午後^に下の家に行つて見ると、兄様も留守、嫂さんも留守、お孝が八疊で机に向つて、長い手紙を書いて居る。

宇都宮に遣る長い手紙!

『嫂さん鳥渡待つて下さい、もうぢきですから。』と言つて、せつせと書き續く。

『嫂さんは?』

『屹度いつもの處でせう。』

『石渡さん?』

『え、。』

『あの奥さん、此頃何うして?』

『矢張、夢中よ。昨日も行つたんでせう。何でも東京座の役者だつてね、臺灣に行つてる旦那に知れたら、大變でせうにねえ。』

『でも、あの奥さん、前にもさういふことがあつたんですつてねえ。それを承知で今度の旦那がお貰ひなすつたんですつてね。』

『本當に、私などには、あんな眞似はしたくつても出来はしない。指環でも着物でも何でも質に入れずんく行くんですからねえ。』と話しながらお孝はせつせと筆を運んで居る。

近所の噂が若い二人の話の題目となつた。此近所には後家が多いこと、氣のさくい細君が多いこと、その人達が寄り集つて話をする^とそれは笑はせられるといふこと、此家の兄さんがその中に入ると面白いといふこと、太田の後家さんの笑ひ方が可笑しいといふこと、あんな若い子息のやうな中尉さんと好い交情になつて居るさうだが呆れたものだといふこと、木村の後家さんも何でもさうした人があるといふこと、何うしてあの年頃になるとあゝした露骨な話が平氣で出来るものかといふこと、此間向うの女狂人が裸で飛び出したといふこと、通りの芋屋の馬鹿が甘薯を食ひながら歩いて居たといふこと、それからそれへと話が盡きずに居ると、嫂のお三輪が歸つて来て、お孝が巻紙を片手に筆を持つてゐるのを見て、

『まだ書いて居るのかねえ。まア。いくら戀しい人ぢやつて好い加減にしなはれな、六錢では行かんがな。』

言ひ懸けて、けたましく笑つた。

『まア嫂さんが——』と、お孝もその餘りに業々しいのに呆れて居ると、

『まアも無いもんぢやがね。毎日毎日一通つゝ出して、それでよく書くことがあるぢやね。戀しき、

戀しき君さままゐるって毎日書いて居るんぢやらうがね、それならいつそ活版にでもして置くとか好いな。

元氣よく笑つた。

細君が一人、井戸端の折戸の處から、お三輪の後を追懸けて来て、

『奥さん、ちよつと、ちよつと。……』

『なんぢやね、もう解つてるがね。』

『好いからちよつともう一度。』

『もう澤山、お惚けなら澤山！』

『いゝから……』

と頻りに手招きをする。

『それより、まア、家にお上がんさいよ。若い娘共が來てるから、面白い話があるぢやらうから。』

『まアちよつと。……』

『まアお上がり。』

頻りに戯談のお復習おききをして居る。石渡の細君といふのは、少佐夫人で、頭を束髪にして、金の指環をはめて、ぞろりとした絹物づくめ、色の白い内附の好い丸顔の美人、年は二十九位。

根氣負けがして少佐夫人が縁側から上つて何か考へる風で坐ると、

『しつかりおしなさいよ！』

とお三輪は少佐夫人の肥えた膝をいきなりピシヤリと叩いて、體を崩して笑ふ。

少佐夫人は存外眞面目な顔をして居る。お三輪に比べて何處かに品格がある。娘の時分、舊藩の若様に見染められて夜のお伽に上つたといふ話を、自分でよく自慢さうに話すが、成程若い時は美しかったらうと思はれる。

『本當に眞面目な顔をして、平氣で惚けを言ふんぢやがね、此人は！』

『まア、好いよ。』

『ちつとも好いことはありやしない。旦那に知らして遣るがね。……』

夫人は笑つて居る。

お三輪は夫人から、昨日の意氣筋を聞かせられたのである。とある待合に役者と行つて、一夜に費つた金の高、待合の座敷の構造、女將や女中の如才ないといふこと、小さく切つた間の多いと云ふこと、其他いろいろ面白い話を聞かせられた。お三輪の夫は月四十圓位の屬官である。さうした話はお三輪には珍らしかつた。

勿論、お三輪にしても、其話を總て眞に受けて聞きはしない。話半分に思つて居る。けれど時々嘘で

ないといふお安くない證據を見せつけられる。

夫人は平氣で随分立入つた話をして笑つた。かういふ種類の女には節操などいふ思想はない、品格などいふ考もない、自己の品格や節操を一場の笑ひに供して何とも思つて居ない。

今まで氣が附かずに居たが、ふと見るといつもはめて居る右の指のダイヤモンド入の指環が無いので、『何うしたのぢやね?』と驚いたやうに訊く。

夫人は黙つて笑つて、頤をしやくつて見せる。

『まア入れちやつたのかね?』

と、お三輪は大きな聲を立てた。

『奥さんの聲の大きいこと!』

夫人は落着いたものだ。

『だつて——まア。』

大枚二百五十圓で買つて貰つたダイヤモンド入の指環!

お三輪は其大膽に呆れ果て、言葉も出ずに居ると、ふと垣の外を同じ遊び夥伴なぐさの太田の後家さんが通る。

『太田の後家さん』

とお三輪はわざと頓狂な聲を出して呼ぶ。

其調子が可笑しいので、傍に居たお光もお孝も笑ひ出した。太田の後家は聞えぬ振をしてさつさと歩いて行くので、お三輪はわざと縁まで出て、業々しく手を叩いた。

矢張知らぬ顔で通つて行つて了ふ。

『太田の後家が、何うだらう、まア。知らぬ顔の半兵衛さんをして濟まして行くぢやがね。』

とわざと聞えるやうにいふ。

この後家とお三輪とは交情が好い。いつも互に行つたり來たりして戯談の言ひつこをして居る。年は三十七八で、今年十五になる娘がある。亡夫は警察署長を爲た人で財産も一二千圓はあつた。で、この屋敷町の一隅の空地に一軒十圓内外の貸家を三軒建て、其一軒の自分の家には、戸山學校に出勤する若い士官を下宿させて置く。

『あの人、何うするんでせうね。』

『あの人ツて誰ぢやね。』

『あの若い人さ。』

『何うするもかうするも無いぢやがね。』

『でも、まさか、御自分で御亭主にする譯にも行かんでせうがねえ?』

『それはさうぢやねえ。……』

『あの若い人だつて唯引懸つて居るんぢやないだらうから。』

『それはさうさね、金でも無くつて、誰があんなお婆アさんに引懸るもんかね。かういふ若いのがいくらも貰へる身なんだもの……』とわざと傍に居るお光とお孝とに笑ひ懸ける。

『さうね、かういふ若い方が好いからね。』

と夫人も笑ふ。

『まア、いやな嫂さん。』

とお孝も笑つた。

『でも……親類には、』とお三輪は煙草を一服吸つて、『あの娘さんね、あの子の婚にするつもりに言つて置くんだつて。……』

『大變なお婿さん!』

と夫人は舌を出して見せる。

『それから此方も大騒ぎだがね。』

とお三輪は烟管で隣の方を指す。

『此方つて、其處?』

と顔をちよつと上げる。この顔を上げるのがこの夫人の癖である。

お三輪は可笑しげに笑つて唯點頭く。

『何うしたのさ!』

『それは可笑しいの何のつて……』と乗地になつて、『本妻とお妾と二人で競走ぢやからねえ。先刻見るとね、まアあの色の黒い奥さんが眞白にこてくと塗りつけて、』と白粉を塗る眞似をして、『べらべらした絹物なんか引摺つて居るぢやがね。本當にお妾さんに負けちや大變だからねえ。』

『此間までそんなでも無かつたぢやアないの?』と夫人が不思議がると、

『其處が面白いんぢやがね、其處が話ぢやがね。そら、此間お妾さんの子が死んで、まア好いと思つてると、今度は本妻の子の四つになるのが死んだでせう。それからだがね、二人白粉のつけつこを始めたのは!』

『さうかねえ、まア。』

『何方が早く子供を拵へるか、早いもの勝と言ふんぢやがね。』

とお三輪は可笑しさに堪へぬといふやうに相好を崩して笑つた。

『旦那さんも骨が折れることだね、』と夫人が平氣で言ひ足したので、お三輪は更に大に笑つた。少時して笑が收つてから、

『一體あのお婆さん何うして出来たのかね!』と夫人が訊くと、

『つい、一昨年越して来たのぢやからよくは知らないけれどもね、何でも根岸あたりの八百屋の娘で、始めから家に小間遣をして居たんぢやと、……處が本妻が子宮が悪くつて、箱根とかに湯治に行つてゐる留守に、旦那さんつい手を出して、それから、するくべつたりに今日まで附いて離れずに居るんだつて。……いつか本妻が子供が居なければとうに出してしまふんですけれど……つて溢して居たがね。』

『それが今度は競走、どつちが勝つか負けるか、よいしょ!』

と夫人まで柄に合はず浮かれ出したので、お三輪もお光もお孝も皆腹を抱へて笑つた。

話は話と續いた。笑ふ聲が垣の外を行く人々の足を留めた。

『相變らず戯談を言つて騒いで居る! 暢氣な家もあればあるものだ、』などと思つて行く細君もあつた。其家は丁度路の角で、疎らな庭樹の間から、縁側に置いてある小さい瓶などが見えて、軒の物干竿の手拭が微風にピラ／＼靡いて居た。

此家の主人は三十七八、鬚の立派な、中肉中脊の、柔しさうな人で、いつも黄縞の羽織を着てよく鉢物などを弄つて居る。常に莞爾として誰に向つても丁寧に口を利くのが評判である。それに世話好きで、相談を懸けられると、どんな難かしい話でも、乗つて眞身になつて聞いて呉れるので、近所の細君連

らは好い旦那さんとして立てられて居るのである。

お三輪も面白いきさくな細君だと思はれて居る。隠し立てをしたり、品格を作つたりしないから、眞面目な家庭からは、卑められたり、笑はれたりするが、體の自由な後家さんや、亭主を尻に敷く細君連や、遠く放郷を都に出て力になる親類の無い軍人の若い細君などからは、二なきものに思はれて、互ひに何も彼も隔てを置かぬので、時の間に十年も附合つた交情のやうになつて了ふ。

一年前には家に難かしい姑さんが居た。細君が近所に行つて油を賣つて歩くのを、常によく口汚なく罵つた。従つて、前の路を通る人も、不愉快な物争ひの氣勢をのみ聞いて、難かしい陰氣な家だとばかり思つて居た。間もなく姑さんが病氣で死んだ。掌を翻すやうに忽ち家は賑かになつて、笑聲が絶えず聞えて、夜は遅くまで、雨戸も閉めずに、洋燈が明るく障子を照らした。

近所の人々は、姑が死ぬとあゝも變るものかと驚いて居る位。

容易に話が盡きずに居ると、其處に、又若い束髪が入つて来た。ちき裏に居る中尉の細君である。

少佐夫人の居るのを見て、少し極り悪るさうに躊躇して居たが、

『奥さん、ちよつと。……』

『何ぢやね、お上がんなさいナね。』

『ちよつと。……』

と顔を赧くする。

言ひ憎いことと察して、お三輪は縁側の處に行く。

耳を假して中腰にして居る恰好が可笑いとて、此方では皆なが笑ふ。

點頭いてお三輪は聞いて居たが、

『何ぢやね、まア。お易い御用ぢやがね、』と元氣よく言つて、引返して、座敷の箆笥の一番上の抽斗を明けて、彼方此方とさがし廻つて、もみくちやになつた横綴の帳面を皺を直し直し持つて来る。質屋の通帳である。

座敷の闕の處で自分でちよつとひろげて見て、

『奥さん、あの着物は何うするのさ！ 今月少しでも入れて置かんと、流れて了ふがね。』

と少佐夫人に言つた。夫人は點頭いて、唯笑つて居る。

縁側に持つて行つて、

『いつでもおつかひなさいよ！』と渡す。

『それぢやちよつと拜借しますよ。』

『えゝえゝ。』

と軽く點頭いて、「旦那さんに知れると大變ぢやで、用心しなさいよ」と謝りながら笑ふ。

若い細君は田舎から来たのだから、お洒落で、浮氣で、夫が陸軍士官なのを自慢にして、白粉を塗つたやうにつけて、人前も憚らずに大口を利く。自然お三輪とも氣が合つて、月給の出る前に、財布が空になると、十錢二十錢と借りに行つたり來られたりする仲である。

お光は何故か此細君を蟲が好かぬ。

お三輪は細君を引留めて猶ほ頻に饒舌つた。やれ、旦那が優しくつて好いの、二人切りでお睦しくつて羨しいの、子供を邪魔にしてはいけないのと例の同じことを際限なく言つて笑つた。

お光は急に暇を告げた。

『まア好いでせう、嫂さん、』とお孝が留める。

少佐夫人もお三輪も留めたが、お光はさつさと下駄を穿いて外へ出た。何だか變な氣がする。此家に來る人々は其身の境遇も心持も感情も甚だしく違つて居る様に思はれる。お光は少佐夫人のことをも考へた。夫がある身で役者買をするとは何うしたこと！ けれど其役者買といふことが、お光にはまだ本當には解らなかつた。續いて質の通帳を借りに來る細君のことをも念頭に浮べた。

一方では亦かうした自由な放縱な生活も羨しいやうな氣がした。其身のさびしい生活とも較べて見た。

ふと笑聲が耳に入つて、お光は頭を擧げた。小さな門に、庭の松が蔽ひ懸つて、もう芽を出し始めた要垣が長く續いて居た。疎らな垣の絶間からは、六疊の間が明らかに見える。

笑聲は其處から來た。

見るともなく見ると、さつき噂をした妾が新聞記者だとか言ふ三十七八の鬚の生えた旦那と並んで、頻りに戯れて笑つて居る。座敷には酒が出て居た。

あることを思ひ出して、自分ながら可笑しくなつて、お光は獨り笑つた。嫂が二三日前、頓狂な聲を出して、『あの家の旦那さんがね、お光さん、私が朝起きて水汲に行く時に、いつでもあのお妻さんの處から寢巻のまゝで出て行くがね……寝ほけ顔をして、變な恰好をして、それは可笑しいの何のツて……』と話したことを思ひ出したのである。

其妾は成程ちよつと色の白い愛嬌のある丸顔の好い女だ。時々庭に出て花など弄つて居るのを見ることがある。絹物を着て、ぞろぞろして、白粉をつけて路を歩いて居ることもある。二三日前には本宅の勝手口に立つて下婢と何か話して居た――

七

それから二月になる。

お光の懐妊はもう知れ渡つて居た。例の酸い物好み、不思議なほど涙脆くなつて、物を食ふと、嘔氣を催して困つた。

何故涙が出るのか、何故このやうに悲しいのか、お光自身にも解りなかつた。亡つた父親のことを思出したとは泣く。母親のことを思出したとは泣く。夫のことを考へたとは泣く。夕雲を見たとは泣く。琴が床の間に置かれてあつたとは泣く。木の葉が動いたとは泣く。

中でも一番悲しいのは、かうして母親と離れて居ることであつた。風が吹く毎に、雨が降る毎に、母親との情が一日一日薄くなつて行くやうな氣がする。自分では無論そんな氣は微塵もない。片時も忌れぬほどに思つて居る。母親も亦自分と同じやうに、自分を思つて居て呉れる。それに相違ない。けれど何と言つても彼と言つても、親子の間が段々薄くなつて行くやうに思はれて爲方が無かつた。それにまた母親はをり／＼來て、『お榮はよく世話はして呉れるが、どうもお前のやうでないぢやでな！』など、染しみ染しみ話す。と愈々悲しくなつて、涙が今更のやうにこぼれる。

薄い縁だなどと考へる。もう少し家に居ればよかつたと思ふ――賑かな明い街が歴々きんと目に見える。夫の出勤は八時、あとは唯一人。勝手を片附けて了つて、長火鉢の前に来て坐ると、何をするのも厭になつて、自分で悪いとは知りながら、ぐたりと首を俛れて火箸で灰に字など書きながら、取留めもななくいろ／＼のことを思ひ耽ける。

一時間二時間はかうしてわけなく經つ。

裁縫を出しても矢張同じこと、一日懸つて袖さへ縫へぬこともあつた。新しい箆笥の上に、鏡臺が置

かれてあるが、其鏡に其身の青白くやつれた顔を映すが最後、容易に其處を離れようとしなかつた。それでも時には賑かな下の家に行つて、嫂さんなど、話をしようと思ふこともあるが、それは極く稀で、寧ろこのさびしい室に、一人してかうして居る方が好いと思つた。

ある日、夫の机に凭れて、ほんねんとして居た。戸外は細かい雨が降つて、庭の木の葉が泣いたやうに濡れて居る。蛙の聲が遠くで聞えて山の手の午後は静かだ。

遅咲の躑躅が赤く庭を彩つた。

お光は筆を取つて傍にあつた原稿紙にむだ書がを始めた。種々な字を書いて見た。學校に居る頃、難しかつた「壁」といふ字のくづしたのを幾度も書いて見たが、矢張巧く書けなかつた。で今度は參らせ候といふ字を五箇も六箇も並べて書いて見る。ふと傍に夫の著した本があつたので、それをひろけて見て、すぐ伏せて、更に夫といふ字、妻といふ字、中村勤といふ字を數限り無く書いた。

學校友達と書き競まをした不倒翁を描いて見て、其頃の無邪氣を思出して獨り笑つた。

ふと下駄の音がしたので障子の二寸ほど明いた間から覗くと、玄關の前の檜の樹の蔭に蛇の目傘がちらと見えて、誰か来たやうな様子である。晝間、夫の留守に客のあつた例は滅多にない。嫂さんでも来たのか知らんと思ひながら、物欄く立たずに居ると、玄關の格子戸が明いて、障子が明いて、其處にめぐらしい、田舎の中學の教師をして居る長兄の姿が見えた。

『まア、兄さん』

とお光は思はず立上つた。

長兄の名は貞一と呼ばれた。丈の低い小づくりな餘り揚らぬ風采であるが、脇に更紗の風呂敷包を抱へて莞爾と笑ひながら、玄關と茶の間の闕の上に立つた。

『誰も出て来ないから留守かと思つたよ。』

『私、兄さんとは思懸けなかつたんですもの、』とお光は嬉しさうに、兄の顔を見て、

『何時出て来たの?』

『昨日。』

貞一はまごころして立つて居た。お光はやがて氣が附いて、座敷から座蒲團を持つて来て、いつも夫の坐る長火鉢の向うに兄を請じた。

一年以上も逢はぬ挨拶などは抜きにして、

『昨日は家に泊つたの?』

『あゝ。』

『何時の汽車で来たの?』

『夜の九時に新橋に着いた。』

妻

『それぢや随分遅かつたのね。』

『あゝ。』

『母様喜んでせう?』

『あゝ。』

無数の小質問がお光の口を衝いて出る。餘りの意外、餘りの嬉しさに茶を出すことも忘れて了つた。

『今度は長く居られるの?』

『あゝ、もう今度は彼方を辭つて來たからね。』

『さう、辭つて來たの?』

辭つて來たことが何でも無い當り前のことであるかのやうなお光の調子。

『ぢや此から始中終東京ね!』

『あゝ、』と貞一は同じやうな無意味な返事をしたが、『田舎の寺の話がね、段々運んでね、何うしても私が跡を相續しなくつては困るッて言ふもんだからね。』

『田舎のお寺? さうく母様が此間もそんなことを言つてた……誰か世話人が態々訪ねて來たつて?』

『あゝ。』

『それぢや兄さん、田舎の和尚様になるのね。』

『まだきまらないけれどね、』とちよつと切つて、

『皆なに相談して……中村君にも相談して見ようと思ふの。』

『あゝ。』

貞一はお光のさまを見た。自分が第一に進んで、反對する母親をも説いて、親友の黙止し難い望に應じた。『中村君の處に嫁くなら、これから一生世話もして遣るし、力にもなつて遣るが。厭だと言ふなら、もう兄さんは、お前が何うならうが一切構はんからね、』とまで兄は妹に言つた。従つて、貞一は此結婚に就いて言はば全責任を帯びて居る。この新夫婦の睦しく平和ならんことをかれは常に祈つて居た。

昨夜、母から妹の懐妊したことを聞いたが、兄の眼には妹は別に變つては見えなかつた。成程いくらかは寢れて居る、何處か沈んだ處も見える。けれど母親の心配するほど瘦せては居らなかつた。昨夜も母親からしたゝか口説かれた。軍人ならば夫は萬一のことがあつても、恩給と言ふものがある、それに年限さへ無事で勤めれば、ちやんと定つて立身する、山本さんなどを御覽、もう來年は大尉になるがね……など、言つた。

貞一は勤の性質に熟して居る。多い友達の中でも心から力になつて呉れるのは此人である。氣難かしいのと神経過敏とが弱點だが、正直で勤勉でそして熱心である。それに貞一とは合口で、二人相對する

と、顔を見たゞけでも氣が打解けるといふほどの交情だつた。

貞一は明治の文壇をよく知つて居た。大家と青年文士との差別、雑誌記者と作者との關係、黨閥朋閥の交際、かけ持批評家の無操持、原稿料の階級、生やさしいことではこの波の荒い文壇を乗切つて行かれぬことも諳じて居た。かれは早稻田を出てから、田舎に行くまで一年ほど、羽振の好い勢力のある某雑誌記者の英語の教師になつて、其宅に賓客ともつかず書生ともつかず寄食して居たので、勤などよりも一層文壇の内部の事情に通じて居たのであつた。

『田舎のお寺に今まで誰か居たの？』

とお光は猶訊く。

『老僧が亡くなつてから留守番が置いてあつたんだがね、荒れて了つて爲方が無いつて檀家が強つて言ふもんだから。』

『母さんは其方が好いつて言ふんでせう！』

『あゝ。』

『兄さん、さうするつもり？』

『さうしよつかとも思つて居るのさ。あの寺には田地が四町、檀家が二百軒もあるから、彼處に入りさへすりや、食ふには困らんからなえ。』

『それはさうでせうとも！』

かう言つたお光は、其身がまだ七歳位の時、母に連れられて其寺に行つたことを思ひ出した。兄は十歳の時から其寺にお小僧に遣られて、其時は丁度十八歳位、玄關の側の三疊の寮に居た。門から本堂に通ずる長い敷石道の兩側には、紅い白い松葉牡丹が一杯に咲いて、子供心にも綺麗だと思つたので、今でもはつきりと其時のことを覚えて居る。老僧は六十位の鬚の生えたやさしさうな方丈さんであつた。

田舎寺も好いが、

『東京に居て呉れると猶好いがね、兄さん。』

『まだきまつた譯ぢやないから。』

『さうね。』

お光が茶を淹れにかゝると、貞一は風呂敷包を解いてお土産を出した。

茶を飲みながら貞一は、

『それはさうと、お前もお目出度いッてね。』

『えゝ。』

とお光は笑つて居る。

『大事にしないといかんよ。』

妻

「あゝ。」

「中村君も喜んでるだらう？」

「何うですか、」と矢張笑つて居る。

「矢張、難かしいかね。」

「別に難かしいってことはないけども、……」

少しは難かしいといふ調子である。

「此頃は何か書いてるかね。」

「えゝ。」

「長いものでも書き初めてるのかね。」

「いゝえ、さうでも無いやうよ。雑誌か何かに出すんでせう。」

「いつも何時頃、歸つて来るかね。」

「さうね。」

と後を向いて時計を見る。針は四時十分の處を指して居る。

「五時には歸つて来ますよ。」

で兄妹は隣積る話をした。

其處へ疲れた足を引摺つて、餓ゑた腹を抱へて、功名に願いた心を重荷にして、勤は歸つて来た。倦んだ心には立關の踏石の上に置かれてある見馴れぬ爪革の高足駄も眼に映らなかつたが、障子を明けて迎へに出た細君の笑顔の向うに、なつかしい莞爾した親友の顔を見た時は、思はず喜悅の聲を擧げた。

じめ／＼と佗しかつた雨の長い路も、腹立たしかつた主筆の無遠慮な言葉も、絶望的の六號活字の批評も、何も彼も忘れて了つた。

勤には昔から此友の顔を見るのが尠なからぬ慰藉であつた。莞爾した其顔！ 其顔を見さへすれば、大抵な不愉快はまぎれて了ふので、此友の田舎の中學行を新橋停車場に送つた時は、自分の希望も、糧も悉く失ひ盡したやうに思つた位である。

「丁度好かつた！ 蟲が知らしたんだ。」

と言つて、途中で買つて来た竹の皮に包んだ豚を出して、「月末で金がピー／＼だから餘程やめようと思つて、五六間行き過ぎたんだが、思返して買つて来た。本當に君、蟲が知らしたんだ！」

で、火鉢に火を取らせて、すぐ貞一を座敷に延いた。お光が茶の間で聞いて居ると、普通の挨拶などは碌にせず、もう盛に話を始めて、面白けに楽しけに笑ふ夫の聲が絶えず續いた。

「社の方は面白いかね？」

妻

『駄目だよ、君、我々の理想で考へて居るやうなことは何處に行つたてでありやしない。』

『それはさうだらうとも！』と言つて、『でも此頃ぢやもう馴れたらう？』

『馴れたは馴れたけれど、何うせ我々は雑誌記者ではないから、駄目だよ。バンの爲めに遣つてるんだから。……』

『それはさうだね。』

と貞一は自分にも経験があるので、同情した。

『杉山君は相變らず盛んかね。』

『盛に活動して居るよ。見て居ても氣持が好き、うだ。けれど僕にはあの眞似は出来ない。氣の毒だと思つた原稿でも何でも遠慮なしにはねつけるからね。僕には氣が弱くつて、とてもあの眞似は出来ない……。それにあゝした策略を用ゆるのは厭だ。』

『けれど杉山君が居るのは君の爲めには好いだらう？』

『うむ。……』

と、勤は言つたが、餘り『うむ』でもなかつた。

今日も杉山が自分を冷かして、『仙人は困る、雑誌記者になつたら、もう仙人は止し給へ、』などと言つた。勤は人見知をするので、態度がおのづから臆病になつて、終日編輯室の机にへたばり附いて居るの

で、多い編輯員から『仙人』とか『聖人』とかの譚名を授けられて居た。店の小僧からは『厭世家、厭世家』と呼ばれて居た。

かれとて無論相應の力を持つて居る。使へば使へる人間である。けれど自己が勢力の中心にならなければ動かないといふ癖がある。で、黙つてむつりして居るか、強ひて笑を粧つて居るか何方かしてる。それに自分は『これでも聞えた作家』だといふ氣がある。普通の雑誌記者の群とは違ふといふ矜持もある。

『これも皆家庭の爲だ！』と思つて、いつもそれを抑へて居た。

『青年時代の煩悶は要するに夢のやうなものだね、君。青年時代の煩悶には、まだいくらかも餘裕がある。突當つて居ない。けれど家庭を造つて世の中に出てからは、青年時代のやうな空想や煩悶に耽つては居られない。』と友の顔を見て、『僕は此頃其問題についてしみぐ感じた。今、それを書き懸けて居るんだがね。』

『それは好い！ 僕も同感だ！ 實際人生は空想ぢやない。』

と貞一は深く感じた處があるものゝ如く、

『もう書いたのかね、君。』

『半分ばかり書いた——』

妻

『見せ給へ。』

勤は抽斗に藏つて置いた三十枚許りの原稿を出して示した。

いつもかうして互ひに好く見せ合つたものである。貞一の新體詩の朗吟を勤が熱心に聞けば、勤の作品を忠實に貞一は批評した。若い群の心はバイロンやワアズワースを透して、新しい藝術に對する限りない憧憬の情となつたのである。けれどかれ等とていつまでも青年ではなかつた。

貞一が田舎に行く時、彼等の群は五六人集つて、記念にとて寫眞を撮つた。友の世の中に出て行くのを見るにつけても、もういつまでも美しい夢を見ては居られないといふ考へは誰の胸にもあつた。群の中の一人は既に細君を持つて居た。一人は女のながい失戀の味を嘗めて、深い懊惱の淵に沈んで居た。眉の昂つたあの大學生は、其時『われも戰鬪者たり』といふハイネの文句を引いて、『かれの如き情の詩人すら猶且つ此言を爲して居る、我々も最早今までのやうにしては居られない。』と激語した。

其寫眞は小さい框に入れられて今も床柱に懸けられてある。若い血は皆な其の群の眉宇に漲つて、敗るゝまでは戦はうとする氣が其態度に充ち渡つて見えた。

勤は赤手にして世に出た。初めて獨り一家の主となつた夜は殆ど眠られなかつた。一月の借家賃すら得らるゝか否か、疑問であつた。釜、揺鉢、鍋、米櫃などを買ふには買つても、それが果していつまでかうして生活して居られるか自分にも解らなかつた。愚圖々々すれば、餓がすぐ其前に迫つて來た。

原稿を顧へして見て居た貞一が、初の處を少し讀まうとすると、勤は引奪くるやうにそれを取つて、

『まアよし給へ、今に皆な出來てから見て呉れ給へ。』

貞一の田舎寺行き相談がやがて持出された。

勤は考へながら、

『さういふ處に身を落着けて了ふのもかへつて心に餘裕が出來て好いかも知れない。けれど君、田舎といふ處は恐ろしい所だよ。田舎は底の知れない泥深い沼のやうなもんだからねえ。まご／＼すると埋つて出られなくなる！』

『僕もそれは考へるんだがね。』

『大に考へなけりやいけない。』

『けれど一方から言ふと、それは其人の心懸にも由ることだと思ふねえ、君。田舎の中學校の教師をして居たつて矢張同じことだもの。英語の初歩を毎日同じやうにして巻きかへしくりかへし教へて居たつて、埋れることは矢張埋れる。』

勤が軽く點頭くのを見て、

『それよりは、僕は此際斷然田舎に引込んで了つた方が好いかと思つて居るがね。僕は身體は弱いしね、筆は立たんしね、それに、原稿を賣つて生活するのは、もう懲々だからね。』と言つて、『それは文

壇に密接に觸れて戦闘を續けて行き得ればそれに越したことはないけれど、策略で成立つて居る文壇には僕のやうなものはとても容れられないよ。僕は寺に引込んで詩を書かうと思つて居るんだがね、何うだらう？ いかんか知らん。』

貞一は里の家の二階に居る頃、卒業しても口が無いので、父母に責められて、心にも無い原稿を書いた。それが金になつたりならなかつたりする。なれば無論苦情はないが、ならない時は痛いつらい皮肉やら罵詈をしたゝか家の人から浴せ懸けられた。勤はそれを知つて居た。

『僕は詩の方だからね、君。……』

と貞一は勤の顔を見る。

勤は黙つて居る。

『小説の方だとそれは出来んけども……。観察も要るしね、戦闘もしなければならんけれど……。』
詩は田舎に引込んで了つても十分出来ると思ふがね。バアンスでもワアズワアスでも皆なさうだからねえ。』

勤の身にしては力にした友をさうした田舎に遣るのが惜しい。折角學んだ學問が惜しい。今迄に築き上げたかれの文壇の名が惜しい。かれ等の群の主張から言つても、空しくかれを田舎寺に引込ませ了ふのが心外だ。

貞一は悠々とした調子で續いて田舎寺の話をした。今は荒れて居るが、昔は其附近の小本山で、御朱印が二十石もあつて主僧は駕籠でお先拂が附いた。今も其駕籠が高い天井に塵埃になつて吊されてある。寺のある町は青縞の産地で、機織娘に美しいのが多い。君の小説のヒロインになるやうなのはいくらもある。それに利根川に近い。半里とは無い位だから散歩には持つて来いである。本堂と庫裡との間には長い廊下を通じて、中庭が立派に出来て居る。室の数は二階まで合せると十以上もある。幾人厄介物が来て居ても、大丈夫だ。

『君、我黨にも隠れ家の一つ位あつても好いよ。』

と貞一は笑ひながら言つた。

一二年前連中が集つた時、ツルゲネフの『ルウヂン』の話が出て、レジネフがルウヂンに向つて言つた『敗兵にも隠れ家が必要だ』といふ言葉に就いて、大に激して語り合つたことがあつた。戦闘者には『隠れ家』などは必要がないといふ説と、敗れた者は一度靜かに其創瘡を養ふ爲めの『隠れ家』が必要だといふ説と二つに別れて盛に氣焔を揚げた。大學生は敗北せば寧ろルウヂンたらんと言つた。貞一はレジネフに同情を持つて居た。

其時から思ふと、考へが非常に變つて居るのを勤は明かに感じた。纔かに一二年！ かうも變るものかと思つた。其時分は渠には理想なくして世を渡することは不可能であつた。如何なる人も皆な眞面目に

深い意味を抱いて生活して居るものだと思つて居た。いや、さうなくてはならぬものだと思つて居た。勤は世の中に出た。其思想は實際に觸れて忽ち氷の如く釋け去つた。

日毎に出勤する社は如何？ 社に居る人々は如何？ 妻は如何？ 里の母親は如何？ 下の家の兄は如何？ 嫂は如何？ 否々かうして平凡に月日を空しく過せる自己は如何？

金がありさへすれば先づ好い。餓ゑさへしなければ兎に角安心だ。この『兎に角安心』が非常に勢力があるものであるといふことを勤は此の一年の間に痛切に學んだ。この『兎に角安心』で人は皆な生きて居る！

勤は其時分のことを考へた。其身も何方かと言へば、ルウヂン黨であつた。斃れるまで戦はうと固く思つて居た。大學生の感情的の高い熱烈な調子がかれの血を湧かした。けれど今は戦ふといふ意味が其時と餘程異つて居た。

『實際、君、我々はもう世の中の巴渦に入つたんだね。』

と染々感じたやうに勤が言つた。

『本當にさうだ！』

と貞一も嘆じた。

其處に、お光は夕飯の準備を揃へて運んで來た。

蓋を敷いて七輪に火の活々と起つたのを置いて、葱やら焼豆腐やら糸蒟蒻やらを入れた井を茶湯臺の上に載せた。勤はいつものやうに竹の皮から豚肉を焼けた鍋に移した。ジージと脂の音がした。

『久し振だね、かうして食ふのも。』

『本當だね……東京だと、かういふ好い肉が食へるから好いけれど……田舎ぢや君も知つてる通りだからね。』

と貞一は巻煙草に火を點けた。

勤は鍋の蓋を幾度も明けて肉の煮加減を見た。かれ等の群は、勤の『この豚の煮よう』に熟して居る。蓋を取つて事々しく加減を見る態度はかれ等の群の話の材料にまでなつて居る。貞一は其時分のことを思出した。

表に人が來た氣勢がした。誰かと思つて勤が耳を澄まして居ると、お光がばたくと嬉しさうな晴々しい顔をして入つて來て、

『西さん』

と莞爾する。西さんはかの大學生である。

『西君？』

と勤も喜ばしさうに言つたが、すぐ立上つて玄關に行かうとすると、大學生はもう其處に入つて來て

妻

居て、

『やあ！』

『やあ、君了度よかつた。早川君が来て居てね。』

『早川君？』

丈の高い色の白い姿は稍薄暗くなつた夕暮の室に浮き出すやうに明かに見えた。貞一は手を舉げて座をひろけて、矢張嬉しさうな顔をして、この新來の客を迎へた。

挨拶やら何やらがしばし續いた。

ふと豚肉が焼付きさうになつたので、勤は慌て、蓋を取つて、井の葱を無造作に其中に投げ込んだ。

白い煙がぱつと颯る。

『相變らず遣つてるね。』

と大學生が笑ひながら言ふと、

『もう君にや豚の御馳走でもなからうねえ、』と勤は皮肉をいふ。

『何アに、さうでもないさ！ 豚は暫く食はんからねえ！』

其處にお光は出雲焼の手焙を持つて来て、大學生がまだ座蒲團も敷いて居ないのを見て、簞笥の傍に置かれて置いてあるのを一枚取つて勤める。何となく驚愕して居る。

『もう洋燈を持つてお出でな。』

と夫に言はれて、

『え、唯今、』と立つて行くのを勤は追懸けて、

『この他に何か御馳走があるんだらうね。』

『え、。』

と振返つて、夫の顔を見て、お光は次の間に出て行つて了ふ。

竹筒臺の置洋燈が大學生と貞一との間に置かれた頃には、もう豚肉は大抵煮えて居た。外では雨が矢

張音もなくしよほくと降つて居る。

茶湯臺には赤い刺身が大きな皿のまゝに載せられて、椀にはお光の手製の拙い玉子の吸物が出來た。

爛のついた徳利を勤が取つて先づ貞一に酌いで、次に大學生に向けると、

『僕は酒は飲まん。』

『少しは飲むぢやないか。』

『いや廢す！』

『それぢやビールにしようか。』

『いや、澤山だ。』

要

『まア、そんなこと言はずに飲み給へ。もうかうして三人都合よく逢ふといふことは滅多にはありませんよ。久し振りで酔つて君の新體詩を歌ふのでも聞かして貰ふさ、』と勤は元氣よく笑つて、『お光！ビールがあつたね！』と大きな聲を立てる。

やがてお光の持つて來たビールの栓を抜いて、澤山だと謂ふのを、コップを押しつけるやうにして強ひて注ぐ。

しばらくして、貞一が、

『君は飲んだらう？』

『いや——此頃はやめてる！』と押附けられたコップを傍に置く。

八

『何うしました、君の話は？』

『僕の話って、何？』

と大學生は態としらばけると、其一伍一什を詳しく知つて居る勤は、大學生と貞一とを見くらべて笑を含んだ。

階に居た。其町は海が近かつた。大學生はレクラム版のハイネの詩集を得意になつて二人に讀んで聞かせた。それは丁度仲秋の前二日、月が雲間からほの見える夜であつた。三人は町の料理店の二階で、白粉を塗つた汚い女を相手に酒を飲んだ。興に任せて、新體詩や萬葉の古歌を朗吟した。歸る時、大學生が酔つて、編上けの靴の紐が結ばずに困つて居るのを、其女が『何てまア、難かしい厄介な靴やな、』と言つて、肩に手を懸けさせて結んで呉れた。其時から思ふと、時も人も思想も變つた。

『もうラブでも無いよ、ねえ、中村君。』

と大學生は笑つた。

『でも、國のは何うしました。』

『あれはもう終を告げたさ、君、』と辭退したビールを取上げて一口飲んで、『僕等は、もう眞面目にならなきやならんよ。いつまで空想に甘んじて居ることは出来んからねえ。』

『それは本當だ——けれどあれほどにしたのに……』と貞一が猶言はうとするのを、

『まア其話は跡で僕が話すよ』

と勤は傍から遮つた。

一しきり豚肉をついたり、酒を飲んだりして居た。田舎寺の話も出た。大學生の考では、貞一の田舎寺行は賛成であつた。かれは貞一の弱い性質と體格とを知つて居た。飽迄詩人肌の貞一には、到底中

學教師としての成功を期し難い。いや總て實際的の事務には其性質が不適當である。貞一が學校を出て東京に遊んで居る頃、かれは貞一の職業に就いて、いろいろ心配して遣つたことがあるので、其間の消息には寧ろ勤よりもよく通じて居た。

『何も君、詩を作るばかりが人間の務めではないさ。詩だとか小説だとか言ふことは何でも無い。實際の人々はそんなことを眼中に置いて居はしない。文學の存在などを知つてゐるものは普通の民の萬分の一、それよりも少い。だから僕は中村君などと、いつも此の議論をするけれど……詩人とか小説家とかしてよりも、先づ「人間」といふことを眼中に置いて貰ひ度い。つまり我々は「人間」になり度い、眞の人間になり度い。今までの空想を脱するといふのは、その意味で言ふのだ。だから、僕に言はせると、中村君なども一人で四疊半で文を書いて居るよりも、如何に實際の事務はつまらなくても、無意味でも、かうして家も持ち、細君も持ち、社に勤めて居る方が好い。そのことが一つの事業だと僕は思ふ、』と大學生は例の調子に段々と乗つて来て、『つまり空想に耽つて、實際を軽く見てるのが悪いんだ。我々はまだ夢を見てる。それはいつまでも夢を見て居たい。夢を見て居る方が美しいからねえ……。けれど僕にはもうそれは出来ない。だから早川君が田舎寺行は僕は賛成する。潔く頭を丸めて方丈さんになるさ。』

大學生は笑ひながら、『一體早川君はさういふ風に出て来るよ。袖を氣にして歩いて居る具合など何うしても和尚さんだ！』

『本當に左様だねえ、』と勤も言ふと、

『大學林に居た頃の癖が何うしても抜けないと見える。……』
と莞爾として貞一は杯を干した。

『僕にしても、もう、』と大學生は愈々調子に乗つて、『もうそんなことを考へて居られない。甘かつた酔が苦い痛恨の追懐になつて了つた今は到底昔の境に歸ることは出来ないぢやないか、君。あれほど努力し、あれほど苦悶したのは君達も知つて居る。それに結果は？ と言ふと、あの有様ぢやないか。』とビールを呷つて、『僕はもう詩などに満足して居られない。これから實際社會に入るんだ。戦ふだけは戦ふのだ。現に、僕はもう態度を改めた！』

『詩をやめなくつても好いぢやないか。』

『それは、君などはやめなくつても好いさ。君などはそれが目的なんだから……。けれど僕は文學が目的ではない、僕の詩はダイレクタンチズムだつた。もう僕は覺めた。戀歌を作つたつて何になる！その暇があるなら農政學を一頁でも讀む方が好い。』

『さういふことを言つて、實は詩を離れることが出来るのだから面白い。』

「それは、君達のやうな友達が居るから悪いんだ！」と笑つて、「けれど、お互ひにもう夢は覺めた。現に此處に居る三人の上で見ても解るぢやないか。あの戀愛神聖論者の中村君はもう父にならうとしてゐるし、早川君は田舎寺に行かうといふやうなことを考へて居るし、僕にしても御存知の通り……」と言つたが、不圖、あることを思ひ出して、「此頃田邊は何うした！」

「此間ちよつと來た。」

「何うしてるね？」

「好い鹽梅に新聞社に口があつて出るやうになつた。」

「何新聞？」

「報知の外交記者ださうだ。忙しくつて困るだらうと云つたら、なあにちつとも忙しくないって、社の俸を待たせて、一日遊んで行つたよ。矢張君と同じやうなことを言つて居たよ。」

「さうか、何んなこと？」

「二三年前のことを考へると、實に隔世の感があるツて言つて居た。昔の手紙など出して讀んで見た……。君が田舎から寄越した、「野の道」といふことなども話したよ。」

「一度逢ひたいと思つて居るけれど、僕も此頃は忙しくつてね……。」

「いやまだだがね、今度は卒業だから、少しは點も取つて置き度いと思つてね。……それに、それが済むと、またすぐ文官試験だから、一二年は忙しくつて駄目だ。」

三人が三人とも自己の境遇を考へた。勤は平凡なる家庭と俗悪なる社の編輯所とを思出して、狭い四疊半で自由にのんきに色彩の濃い空想を食物にして居た時代と較べて居た。貞一は田舎の中學でストライキを起されて困つたことと、これから引籠らうとする田舎寺のこと、を思つた。唯大學生の胸のみ希望に輝き渡つた。

「田舎行を此處できめて了ひ給へ！ 早川君。」

とかれば元氣よく貞一に言つたが、更に勤の方を見て、「中村君、一つ早川君の寺行の爲めに祝杯を舉げようぢやないか。」

で三人は杯を合せた。

其夜貞一は泊つた。

八疊の間はめづらしく洋燈に照り輝いて居た。もう十時を過ぎて久しく経つが、お光の笑聲がをりをり聞えた。

勤は貞一に大學生の話をした。

「何故養子になどいらつしやる氣になつたんでせうねえ？」

と傍に居たお光は笑ひながら聞いたが、勤はそれには返事をせず、

『だから僕も少しは其時は言つたけれど、西君は自分で思ひ立つと、ぐんぐん一人で遣つて了ふ方だから。それに僕も先生の爲めにさうした方が或は幸福になるかも知れぬと思つたからね。』

『何ういふ関係でその家に入出入するやうになつたんだね?』

『それは中々面白いさ。先の家ではね、君、西君が高等學校に居る時分から眼を附けて居たんださうだ。僕等が昔よく行つた戸澤先生の家ね、あの歌の會に、品の好いお婆さんが來たらう? 被布などを着た? あれが西君の將來の細君になる人の祖母様なんだ。先方ではあの頃から眼を着けて居たんだ。戸澤先生も中に入つたらしいよ。』

『さうかね。』

『昨年の夏だつた。突然僕の處に來て、その話をした。西君は平生家庭に非常に重きを置く人だが、其時もね、僕はもうラブなどはお終ひだ。好い家庭の快樂さへあればそれで満足だと謂つてね。』

『好い家庭なのか知ら?』

『ごく好い家庭らしい。僕はまだ行つて見ないから知らんが、姉さんが二人あつて、それが皆な好い處にかたづいて、西君の細君になるのは、未の娘ださうだがね。まだ虎の門に通つてゐるさうだ。中々快活な娘さんだつて、知つてゐる人が話して居たよ。』と言葉を切つて、昨年の秋だつたかしらん、先生、

少し身體が弱かつたもんだから、先方でも心配してね、海岸などに療養に行つて居たが、其頃は西君の境遇は氣の毒だつた。今ぢやすつかり治つたので、先方でも安心して、もう約束は大抵きまつたんだらう。』

『何うも西君は體が弱いねえ。』

『君も身體は餘り丈夫な方ではないよ。大事にし給へ。』

『僕は大丈夫だ!』と貞一は笑つて體をゆすつて見せた。

『田邊君などは西君の養子問題は大不賛成なんだ。何も先生など養子に行かなくつても好い。あの位の秀才だから、大學を出さへすれば立派に獨立して行かれる。何も自から好き好んで、束縛の中に入らなくつても好い。それも細君になる人が非常に別嬪でラブでもしたとか何とか言ふならまだ好いけれど、……本當に西君の氣が知れないつて、口癖のやうに言ふけれどもね、西君は屹度「やさしい束縛」といふやうな處が欲しいんだと僕は思ふね。』

『さう。』

『自分でもいつかもさう言つて居た、君などは束縛を非常に嫌つてなんでも自由でなければならぬやうに言ふけれど、「やさしい束縛」なら僕は喜んで受ける。さうした束縛が無くつては僕は淋しくつてたまらんと言つて居たよ。』

「西君は詩を読んで見ても話を聞いて見ても、何處か優しい捨て難い處があるねえ。」鳩の歌」と言ふのがあつたね、本當にあの通りだ。」と新體詩人らしいことを貞一は言つた。

「ピアノもお出来になるんだつて、兄さん、」とお光が突然傍から口を入れた。

「さうかえ。」

「西さんがいらつしやる時は、いつもピアノを弾いていらつしやることが多いんですつて……音楽學校に時々いらしつてね、ハイカラなんですつて。此間、あのお屋敷の前を通ると、ピアノの音がしてましたよ。」

「ふむ。」

と兄はうはの空の返事をする。

何うした加減か、お光はいつになく悪くはしやいで、

「貴方、寫真を見たことも無くつて？」

「ない。」

「今度西さんいらしつたら、さう言つてお貰ひなさいな。」

「お前が言へば好い。」

「私が言つても好いでせうか。」

「何故？」

「だつて何だか變ですもの。」

「ちつとも變なことはありやせん。」

「さうでせうか、それぢや今度いらしつたらさう言はう、」と少し途絶えて、「虎の門は何時御卒業なさるの？」

「まだ中々だらう。」

「それぢやまだ結婚するまでには、大分間があるんだね？」

今度は貞一が訊く。

「間があるともね、君。去年西君がちよい／＼行き始める頃、まだほんの子供だからつてよく言つて居たさ。今ぢやもう大分馴れて、そんなことは無いだらうけれど、其頃は可笑しかつた相だ。先方ぢや薄薄知つてるだらう、けれど戀といふ氣はないから、餘程不思議なんだつて。話をして何うもそれが餘程變なんだつて……。君、考へると、ロマンチックぢやないか。西君のやうな烈しい戀に憧れた人が、さういふ幕を打つといふのは餘程コントラストの妙があるね。」

「本當だね、」と貞一は言つたが、「國の方は何うしたねえ、もう終りをつけたと言つて居たが、一體何うしたんだ？」

妻

『肺で死んだんだらう。』

『さうか、それは可哀相だね。何でも親の無い、兄に懸つてる娘だつて聞いて居た。僕はその寫眞を見たことがあるよ。』

『君も見たか。』

『まア西さんに前にそんな方があつたんですか、』とお光は初めて其事を聞いて驚いたといふ調子である。

『別に何の事も無いのだけれど、』と勤はわざと笑つて、『死んだのは、何でも去年の三月頃だらう。布施あたりの姉さんの處か何かで死んだんだ。利根川を夜舟で其死骸を郷里に下して葬式をした相だが、實にロマンチックさね……昨年雑誌に出た先生の「利根のうれひ」といふのを君は知つてるだらう、あれがそれを歌つたんだ。』

『さうか、』と貞一が思當ると、

『まアねえ、可哀相に！……』とお光は其人のことを思つた。

しばし互に黙つて居たが、

『今度のはその反動だね！』

とささもく感じたやうに貞一は言つた。

三人は西君に就いて猶語り合つた。其娘の死は戀と關係があつたか何うか？ 西君の今度の養子問題は單に家庭の温さを知り度いといふばかりであるか、何うか？ 他に功名心を充たす爲めの誘惑もなかつたらうか何うかなどいふ疑問も出た。

室はいつもに似ず明るかつた。茶は幾度も淹れ易へられた。菓子鉢の餅菓子は残り少なくなつた。梅雨を稍肌寒く、引被けて着た黄八丈の派手な羽織は、お光の姿を若々しく娘らしく見せた。貞一は話の調子を軽く合せながら、をりをり煙管を出してトントンやる。

何かの機會で、勤が障子を明けたが、

『何だ！ まだ雨戸を閉めないのか！』

『さうでしたね、すっかり忘れて了つた。』

と言つてお光は縁側に出た。雨はザアと降つて居た。あたりはもうすっかり寢靜まつて、軒燈の其處此處に淋しく點いて居るのが見えるばかり……。

雨戸を閉めて、また一しきり話す。

十二時を聞いてから、お光は兄と夫の床を座敷に並べて敷いて、二分心の洋燈とマッチとを持つて行つて枕元に置いた。自分の床は茶の間の六疊に運んだ。

兄と夫は床の中に入つてからも久しく話合つて居たが、やがて夫の高い鼾が聞え出した。でも、洋燈

がまだ消えぬので覗いて見ると、兄は蒲團の上に腹這になつて、熱心に新刊の雑誌を讀んで居た。

九

翌朝、お光が手拭を被つて、襷を懸けて、火箸を片手に吹加減になつた釜を見ながら、竈の前に蹲踞つて居ると、下の家の下女が一夜眠られず眠くつてたまらぬと言つたやうな生あくびをして遣つて来て、

『若奥さんのお産だよ、奥さん。』

『えゝ？』

『昨夜十一時頃から苦しみ出しただよ。』

『もう産れて？』

『まだ生れねえ。』

『お産婆さん來てるの？』

『夜、一時頃に迎へに行つて、やつと伴れて來たけれどもな。何うも難かしいお産でな！』
難なかしいお産の一句がお光の胸につかへた。

『それぢやすぐ來て下されや。』と下女は歸つて行く。

お光は驚しいお産の一句を繰返して見た。何となく胸が騒ぐ。すぐ行かうかと思つたが、苦しむを見

るのが恐ろしいやうな氣がする。唯女のみ知るといふやうな同情も出て、神経が昂つて呼吸がはずんだ。竈の燃えさしを引かうとして慌て、板の間に落して過ぎ上る煙にした、か咽んだ。やがて釜の下の熾を長火鉢に移して、水を新らしくした鐵瓶を懸けて、十能を猫板の上に置いた儘次の座敷へ行つて、ぐつすり寢込んで居る夫を搖起して、お孝さんのお産が始つたから行つて來ると言置いて、急いで下駄を突懸けて外に出た。

雨は止んで居たが、靄が茫と一面に屋敷町を籠めて居た。

氣にしながら、下の家の門前に來ると、突然赤兒の新しい啼聲が朝の靜かな空氣に震へて聞えた。

前の縁側から驅け込みながら、

『生れましたね。』

と茶の間の障子をがらり明けると、其處に居た主人が大きな聲を立て、は産婦に觸ると言はぬばかりに笑ひながら手を舉げて制した。

『男？』

其返事も聞かぬ中に、座敷の襖が明いて、

『お光さん、そりや好い兒が出來ましたぜ……行つて御覽よ、そりや好い兒！……肥つた好い男の兒ぢやがね。』

妻

いつもながら頓狂なお三輪の調子。

『聲を少し低くおし！』

と夫にたしなめられて、

『大丈夫ですよ。もう産れて了ひさへすりや、少し位聲を立てたつて、ねえ、お光さん。』

『産は後が大切だから……………』

『大丈夫、大丈夫！』

と夫を失とも思はぬ。お三輪にしても、昨夜から徹宵の介抱、難かしいのを自分が生ませて遣つたといふ腹がある。

お光が襖を明けて座敷に入ると、丁度其時産婆が生れた兒に産湯を使はせようとする處であつた。傍には脱脂綿やら油紙やらオレール油やら金盥やらコップやらが戦場の跡と言つたやうに一面に散ばつて、新しい盥からは湯氣が薄く颯つて、其傍には桃色木綿の産衣が着せられるばかりにして展けて置いてある。産婦は疲れ切つたといふ風で、たばね髪を亂して向うむきになつて、大きい白い括枕を高くして寝て居た。

お光は逸早く盥の傍に行つたが、

『お光、可愛いわ。』

と思はず聲を立てた。

生兒は初めて觸れた世の中の空氣を怕るゝものゝやうに手足を縮めて眼を閉ぢて丸くなつて居た。人間の子と謂ふよりも小さな肉の塊と謂つた方が適當であつた。年の頃三十五六の産婆が熟練した風で、盥の湯の中にソツと入れると、生兒は聲を立て、啼いた。

『おおよしよし、そら綺麗におんなさいよ、』と言ひながら産婆は丁寧に其處此處と洗つてやつた。

お光の後にお三輪も主人も來て見て居た。

生兒は頻りに啼く。

氣になると見えて、若い産婦は向ふむきに寝て居た顔を少し擡げて、

『大變泣きますのね。』

『大丈夫ですよ、心配しないで、……………今産湯を遣はせたものだから、それであんなに啼くんぢやがね。』とお三輪が其傍に行く。

若い産婦は笑つて見せた。

『それやまア、好い兒ぢやがね、今、見せて上げますから。』

其處に、お光が顔を出して、

『結構でしたね、お孝さん！』

覗くやうに低い聲で言ふと、お孝は只點頭いて笑つた。

お三輪は平氣で、『今でこそお光さん、かうして笑つて居られるけどね、其時ツたらそれは大變、私もお産婆さんも蒼くなつて了つてね、お孝さんの顔なんて見られやしなかつたがね。』

『まア本當に結構でした！』

とお光は盥の傍に戻ると産婆は『おとなしい』とか、『大きな子だ、』とか言ひながら、頻りに産衣を着せて居た。

やがて抱いて伴れて行つて、

『そら、御覽なさい、こんな好いお兒様が生まれました。』

と見せる。産婦は晴々した嬉しさうな顔をして笑つた。

で、其儘、産婦と並べて小さい蒲團に小さい枕、上に八丈の黄縞のねんねこを被^かけて寝かした。

茶の間に來ると話が始まる。

お三輪が例の面白い調子で手眞似をしながら、昨夜からの一伍一什を話す。八時頃から少しお腹が痛いッて言ふから、始つたかなと思つて居ると、十一時頃になつて嫂さん産れさうだから準備をして下さいといふ。お産と謂ふものは、さう容易く出来るものではない、障子の棧が見えなくなる位にならなければ産れやしないと云つて一驚入すると、ふと枕邊で眼を覺した。見ると一時、それから下を

起したが、それが寢惚けて了つて何うしても起きなくつて困つた。やつと出して遣つてまア好いと思ふと、今度はいくら經つても歸つて來ない。此方では段々痛んで來る。氣が氣でない、内でも心配して、己が行つて來るつて出懸けて見ると、呆れるではないか、産婆さんでは、そんな使者^{つかひ}は來ないといふ。あの田舎者奴が前にも行つたことのある家を忘れて、飛んでも無い方角に行つて寢惚眼で搜し廻つて居たので、それから一時間ほどして、『奥さん産婆さんの家が解らねえがね』ッて歸つて來た。其時はもうお婆さんがちやんと來て居て大笑ひだつた。

話を突然やめて、

『今度はお光さんの番だね！』

と仰々しく言ふ。

お光は笑つて居ると、

『此度は大丈夫、もう私がつかり覺えて了つたからね、お婆さんなぞ來なくつても大丈夫ぢやわ、』と言つて笑つて、『丸だね、お光さん、私がひき出して遣つたんだがね。』

『本當に奥さんのお手柄！』とお三輪と平生知合つて居る氣さくな産婆は、丁度其處に入つて來て面白さうに言つた。

お三輪は突然、

妻

「お婆さん朧衣をかたして置いて下すつたかね？」

「え、え、其處にちやんとして置きましたから、何時でもお跨ぎなさいよ。」

「それぢや跨がせて貰はうかな」と、お三輪は立上る。不思議なことをすると思つてお光が見て居ると、縁側の隅に、土器かほけに入れて麻で結んで熨斗をつけて置いた朧衣を、お三輪は可笑な恰好をして跨ぐ。他人の朧衣を跨ぐと懐妊するといふ傳説があるのであつた。

「これで子が産れ、やお婆さん、それやどんなお祝でもしますがね、」と面白さうにお三輪は笑つた。

「奥さんも、一人お拵へなさいよ。」

「思切つて拵へようかね、若いものに負けちや口惜しいからねえ、」と態とらしく産婆に笑ひ懸けた。

お光が歸つて見ると、夫と兄とは長火鉢の前でもう例の盡きない話をして居た。貞一は兎に角今日田舎に行つて見る筈であつた。二人は生れた兒を見て來ると言つて續いて出て行つたが、十分も経たぬ中に歸つて來た。朝飯の準備は出來て、味噌汁の強い香が鼻を衝いた。好きな納豆が小皿に盛つて出された。

「今日一日延ばし給へ、さうすれば僕も社を休んで何處かに一緒に行つて見よう、」と勤は言つたが、貞一は同意しなかつた。八時を打つと二人は一緒に家を出て、少し行くと其の角で別れた。

勤はいつもの淋しい心を一倍深く感じながらも、淡竹の大藪に添つた道を歩いて行くと、ふと前に洋服を着た兄の出動姿が曲り角の處にちらりと見える。走るやうにして小學校の前でやつと這歸り、

「兄さん、足が早いね。」

兄は振返つて見て笑つて、

「お前も今朝は早いぢやないか。」

「今日は校正日で少し忙しいから。」

並んでさつさと歩く。繕ひに繕ひをした膏藥張の靴の悪く光つたのが眼に附く。鳶色の毛の摩れ切れた洋服もみじめだ。

「それでも安産で好かつたね。」

「あ、。」

「大變だつた。——」

「兎に角人の娘を預つてるんだから、心配さね。それに孝にしても他人の中で遠く親を離れてお産をするんだからな、もしものことでもあつては大變だと思つて一層心配したのさ、まあ好かつた。それに男だから。」

「勇造(弟)に知らして遣りましたか？」

「今、行きがけに電報を打つ。」

「喜ぶでせう！」と言つたが、「それで後は何うするつもりです？」

妻

『それも考へて見たがね、何うせ一緒に置く譯には行かんから……それに孝も産がすめば京都に當分行くことにして居るから、好い處を見附けて里に遣らなけりやならんがね……それがまた好い處がないんだ。無闇な處へ遣つて、新聞にあるやうな鬼婆にでつくわしても大變だから。……』

二人はいつか屋敷町から場末の小さい町に出て居た。上からは落ちないが空は曇つて路は夥しく泥濘だ。荷馬車の馬がビチャビチャ遣て來て遠慮なく泥を擧げた。町家の店も今朝は何となく陰氣に灰色に見える。兄は泥濘に靴を爪立てるやうにして歩いた。

交番の前に來た時は、勤はもう一人だつた。いつも通ふ長い路、宅から社までは一里以上ある。腰辨の群はぞろぞろと其間を通る。勤は種々のことを考へながら歩いた。大學生、貞一、妻、妻の實家、社の編輯所……世はさまざま、嫂のやうな生活をして居るものもあれば、里の母親のやうな月日を送つて居るものもある。兄のやうにして居るものもあれば、早川君のやうにして居るものもある。ふと今朝産れた兒のことを考へた。弟の勇造とお孝との戀を思出した。あゝして世間を憚つて子を産むといふことが面白いやうでもあり可笑いやうでもあり悲しむべきやうでもあつた。宇都宮の士族町のある家の二階で、熱い呼吸を取りかはした二人のさまを想像した。生れた兒の將來をも思つて見た。戀の結果といふことが強く頭腦を打つた。戀の後に戀、結果の後に結果、無数の人間と無数の慾情とが層々累々として此の世の中に重り合つて居るやうな心地がしたと思ふと、すぐ乾しい唇が心になつた。

氣が附くと、かれは小さい果物屋の前を通つて居た。節おくれの赤い林檎が山のやうに積まれてあつた。此果物屋は若夫婦で、かれが家を持つた頃に丁度此處に店を出した。朝夕二人が懸命に働いて居るのを見る毎に、勤は自己の毎日の生活に比較して微笑して通つた。柿や蜜柑を買つて遣つたこともあつた。赤い手絡を懸けた丸髻の愛嬌のある上さんだつた。今はその上さんも懐妊してやつれて六月位の腹を抱へて居た。

十

お光のつわりはかなり重かつた。嗅覺が鋭敏になつて、何處へ行つても厭な臭ひがする。木のにほひ、塵埃のにほひ、書籍のにほひ、織物の色素のにほひ、殊に臺所が一番厭だつた。

勝手元へ行くと、何うしてか堪らぬ臭ひが鋭く鼻を衝く。さうかと謂つて、それが平生の悪い厭な臭ひとも違ふ。一種言ふに言はれぬ形容の出來ぬ臭氣で、それを嗅ぐと、すぐ胸がむかつて來る。

けれど女の身で、臺所に入らずに居るわけにも行かぬ。始めはこれは不潔にして置くからだと思つて、一生懸命に綺麗に掃除して見たが矢張駄目だつた。お光は朝起るときから、勝手の流元で、よくけえぐ遣つて居た。

さうかと思ふと、臭くなくてはならぬやうなものがねつから臭くない。糠味噌桶などは平生は大嫌ひ

で、蓋を明けるさへ苦勞な位であつたが、妊娠してから、不思議にもそれが以前ほど臭く厭でなくなつた。糠のついた生米の臭ひが非常に好きになつて、米櫃からこつそり茶碗に一杯出して來ては嚙つた。火鉢の傍に置いたのを夫に見附けられて、

『何うしたんだえお前、此頃生米などを嚙るのか、』と言はれたこともある。

それから鯉節をよく嚙つた。土佐節の固いのは高くもあり、嚙るにも不便なので、和かな廉い龜の子節をわざ／＼買つて來て置いた。例の青梅は元より言ふまでもない、八百屋の御用聞が厭に笑ふのにもかまはず、ちよい／＼持つて來て貰つては、臺所の隅、裏の縁側の角すまなどに行つて、顔をしかめながらポリ／＼食つて居る。

それから路を歩くと、物を煮焼する臭がはつきりと鼻に來て、彼處の家では何を煮て午飯のお菜にして居るかなど、いふことが著るしく解つた。里の家に驅込みながら、『母さん、今日甘薯を煮て居てね?』など、言ひ中て、母親を驚かした。

非常に鬱ぐかと思ふと、またある時は人が變つたかと思ふ位にはしやぐ。月の戌いぬの日に、お孝のを取揚げた同じ産婆が來て、初めてだと謂ふので、里の母親がわざ／＼持つて來た紅白の腹帶を緊めた。神棚には珍らしく燈明が上げられて、勤は里の母親を相手に三四杯酒を飲んだ。

梅雨はいつか晴れて、暑いキラ／＼する夏は來た。別に變ること無かつた。日曜日には、親しいこ

三の友達が來て、例のお光には解らぬ話をして長坐をして行くばかり。下の家では相變らず賑かで、夜など近所の細君やら後家さんやらが來て、主人も一緒になつて戯談を言ひ合つて居る。お孝の子は餘り可愛くなつて手離せぬやうになつてからでは事が面倒だと云ふので、熱心に人に頼んで搜して貰つて、漸く里親になる人を見附けて、三十二日目に其處に遣る準備をして居た。

お光が行つて見ると、若い母親は可愛い赤兒を抱いて、ほろ／＼涙をこぼして居た。傍には襦袢やら小衣着物やらを包んだ風呂敷が置いてあつた。『かうして手離すのが悲しい、嫂さんなどは自分で可愛がつて育てられるんだから好いけれど……』と言ひさして泣いた。やがて俵が來た。

十一

勤は此頃總てのことに不平で不安で不健全であつた。所謂過渡期で、今迄の思想に徴が生えて、文を書いても、在來の調子で唯形式的に空なことを並べて居るばかり、讀返して見ると同じことが到る處に繰返されてある。他人の傑作が氣になつたり、文壇の形勢が癢に觸つたり、詰らぬ事に瞋恚を燃やして、ある時などは何だか人が寄つてたかつて自分を撲滅しようとして居るかのやうに思ふ。無意味に言つた人の言葉も訝のやうにすぐ頭に反響する。殊に社の編輯に居る間はそれが甚しかつた。机を並べた人々が、皆なかれの敵で、呪手で、自分の一舉一動に詳しく注意して居て、油斷も隙も無いやうに思はれる。西

洋雑誌の翻譯をさせられるのも、大家の訪問を遣らせられるのも、皆な自分の技倆を試めず爲めとのみ取られた。机に縋つて居るのが大儀で、何だか人々の視線が自分の一身に集つて居るやうで、自分の歩き方笑ひ方乃至顔のつくりまで氣に懸る。そんなことを誰が思つて居るものかと時には自分の臆病を笑ふこともあるし、また時には例に似ず人々の仲に入つてはしやいで饒舌つて見ることもあるが、それが何の反響も起さぬと分ると、忽ちしよけて、そして一層神經過敏になる。勤は長い丸の内の壕端の柳の下を、毎日毎日社をやめることをのみ考へながら歩いた。

新婚當座はそれでも若い細君が樂みであつた。四疊半にひとり空想に耽つて居るよりも、色の白い顔や赤い手絡や黄八丈の羽織がなつかしかつた。社の門を出ると、ほつと長嘆息をついて、これで先づ細君の顔が見られると思つたもので、横しぶきの雨にびしよ濡に濡れながらも、若い細君のことを考へながら歩いた。一年の間總てかれの不平不安不健全不満に對する唯一の慰藉は、若い細君の愛情と慾情であつた。——けれど今はもう倦んで了つた。勞れて了つた。光彩を失つて了つた、匂ひが無くなつて了つた。

『斷然退社する。侮辱！ 侮辱！』

と激昂して叫ぶことがあるが、『それぢや何うして食ふ？』といふ問題にすぐ逢着する。妻が懐妊しい前には、幾度も今までの豚小舎のやうな生活を破壊して、妻を離縁して新規蒔直しを爲ようと思つた。妻にしても自分のやうな男にくつ附いて居るよりも、もつと好い相手がある。軍人なり官吏なり其身も

満足し母親も満足し親類も満足するやうな夫を持つて、無意味に氣樂に生活して行く方が結局幸福である。また自分にしても、かういふ無意味な平凡な生活は堪へ得らるゝ處でない……とかう幾度も思つた。けれども今は駄目だ。自分と妻との間には相對の關係ばかりではなく、新しいものが出來た。

思つて居たこと、考へて居たこと、計畫して居たことが總て無駄になつて、自由といふものが重網の中に束縛され牽制されて了つて、自分の身でも自分の身が何うにも彼うにもならなくなつたやうに思はれる。勿論勤のことだから、これをいろ／＼に誇張して考へるので、普通の人なら何でもないことをも深く氣にする。神経がいつも苛苛する。妻が蒼い顔をして眼に立ち始めた腹を抱へて、不機嫌な様子をして居るのを見ると、一方では可哀相だといふ同情も起るが、それよりも先づ不快な念が第一に起つて、嘔氣を催したり、青梅を食つたり、生米や鯉節を嚙つたりするのが厭で無氣味で爲方が無い。で、をりをり夫婦喧嘩が持上つた。

勿論喧嘩と謂つても暗闘が多い。勤は神経家ではあるが、自己の感情を自己で押へて了ふ方の性質だし、お光は無意識に夫に従つて居る方であるから、それが火花を散らすやうなことは殆ど無い。けれどもす／＼と燃えもせず消えもせずに燻つて居るのは、稻妻のやうにぴかッと光るのよりも一倍つらかつた。いとゞ難かしい顔を一層難かしくして、言葉を懸けても返事も爲ない。感情が衝突したとなると、一日口を利かずに居ることなどは幾度もある。つい近頃までは、細君の持つて來た大きい膳に、お揃ひの

有田焼の女夫茶碗で、二人は向ひ合つて、睦しく食事を爲たものであるが、段々お取膳などは珍しくなくなつて——いや衝突した時などは都合が悪いので、ある時その女夫茶碗の一つをお光が粗相で壊したのを幸ひ、勤は春慶塗の廉いのを買はせて、全く膳立を別にした。

「茶碗が壊れて御膳が別になりましたね。」

と其時お光は淋しく笑つた。

ある時、お光は里から日が暮れてから歸つて来た。すると勤は甚しい不機嫌で、常になく烈しい小言を言つた。また里に行つて夫の告口をして来たといふ腹が勤にはあつた。結婚の當時、母親が素直にお光を呉れなかつたといふこと、それを別に腹に持つて居る譯でもないが、喜んで婚にしたのと澁々ながら呉れたのでは感情上非常な相違があることは免れ得ない。勤は里の母親に對していくらか反感を持つて居る。それにお光が母親をのみ便りにし、母親がお光をのみ力にして居るのを見ると、何だか自分が疎外されたやうな厭な心地がする。お光が自分のお光でないやうに思はれる。それも自分一人日が暮れて洋燈もつけぬ蚊の多い闇の中に置かれるやうなことが無く、一日厭な他人の中で氣苦勞をして働いて来て、腹を空かせて居なければならぬやうな目に出會さなかつたなら、そんなにくしやくもしなかつたかも知れないが——。

夫の小言が懐妊して過敏になつて居る神経を一層強く刺戟した。——お光はぬぎかへた晴衣を疊みながら泣出した。

これが更に勤の氣を悪くした。

「わたしがこんなになつたのに……わざと無理を言つていぢめるんだから。……」

とお光は愈々泣く。

「いぢめるも何も、……妻が夫の世話をするのが當り前ぢやないか。」

「たんと……おいぢめなさい！」

と丁度子供でもあるかのやうに、疊み懸けた晴衣の手を留めて、オイ／＼と歎けける……。

泣く度に丸髻が動いた。

勤は黙つて了つた。洋燈を點けて、戸棚をがたびさせ、自分で自分の膳を出して、鯉節を自暴にかいて、水のやうな湯を懸けて夕飯を済ました。お光は餘程悲しかつたと見えて、矢張泣いてゐる……歎けけるのが止まぬ。

其夜は裁縫をしながらも、お光はをり／＼鼻を噉つて手巾で眼を拭つた。十時過ぎに咽喉が乾いて、水飲みに勤が臺所に行つた時にも、矢張低頭いて低く刻むやうに歎けける。こんなことは今迄に會てなかつた。お光は泣いたり怒つたりすることがあつても、ぢき機嫌の直るのが常であつたのである。

勤が押入を明けて、寢具を出し始める氣勢がすると、それでもお光は立つて来て、丁度敷き懸けた蒲團を手傳はうとした。勤は突然、

『構はんで置け。己がする。貴様のやうな奴にして貰はなくても好い！』
とグツと引奪つた。

ワツとお光は又高く泣いた。

『泣きさへすりや好いと思つてやがる。馬鹿！』と罵つたが、其儘手ばしこく自分の床だけ敷いて、寢巻も着更へずに寝て了つた。お光は蒲團の傍に蹲踞つて、漸く收つた歎歎をまた新たにした。簞笥の前に行つても猶久しく泣いて居た。

『喧しい！ 子供のやうに何時まで泣いてるやがるんだ。』

と勤は腹の中ではそんなに強く言はうと思はなかつたが、つかう言つて呶鳴つた。『早く蚊帳を釣れ、蚊に食はれて爲方ありません！』

お光は黙つて矢張歎歎して居た。

『貴様のやうな奴に頼まん。』

と勤はがばとはね起きて、けたましい音をさせて、蚊帳を釣り始めた。蚊帳の金具の音がチャラ／＼

ツツと自分の寢具を蚊帳の中へ入れて寝た。泣じやくりはまだ止まぬ。

翌朝、お光は眼を泣腫して居た。

其日勤は社から例刻に歸つて来ると、驚いたことには、家の戸がびつしやり閉つて、夏の暑い夕日が雨戸に照つて居る。それが遠くから見える。

勤は胸を躍らした。

上り口の戸には錠が下りて居た。

取敢へず下の家へ行つて聞くと、嫂のお三輪は平氣な顔で、午後にお光さんが来て、ちよつと用が出来たから里に行つて来るつて鍵を預けて行つたといふ。

勤の顔の蒼いのを見て、お三輪は、

『何うかしたのかね？』

勤の身にしては、餘り話したくはなかつたが、止むを得ず昨夜のことを手短かに言ふと、『さうかね、ちつとも知らなかつたがね、お光さんもいつもの通り莞爾して居たから、……』と勤の顔を見て、『そんなことはないんでせう。何か用が出来て、急に行つたんだらうがね。』

『いや——』。

『思ひ當ることがあるのかね……』。餘り交情が好過ぎるから、ちつとはさういふことがあつても好

いやね。』

勤は調子の輕薄なのに腹を立て、鑢を貰つてすぐ歸つた。家に上るには上つたが、裏の戸を明けた限で、座敷に仰向に倒れて了つた。體がぶるぶると慄へて來た『馬鹿！ 馬鹿！』と罵つたが、誰を罵つたのか解らなかつた。

一番胸に應へたのは、自分がこれほどに妻に了解されて居らぬかといふ事であつた。一時の感情に任せての仕打と眞面目な夫妻の關係とが解らぬとは實に情ない。これで夫婦！ 新しい親！ と思ふと、神經がブリ／＼した。

種々の妄想も盛に起つた。男の一分が立たぬやうな忿怒も出れば、『勝手にしろ離縁なり何なりしてやる、』と口へ出して言つても見た。けれど勤は平生かういふことを常に恐れて居たのである。男女の關係、夫婦の關係には際立つて重きを置く方の性質で、世の中が『離縁』其物に對して、一種の淡い解釋をして居るのを不眞面目のやうに思つて居た。夫婦は努力すべきもの互に弱點を扶け合つて行くものといふ自信を持つて居た。けれどかれは熱烈なる實行者よりも疲れたる理想追求者であつた。――

『離縁！ 離縁！ あれほどにして貰つた妻を離縁！ 何の顔を以て西や田邊に……早川に對しても濟まん、』と心に叫んだ。

『何だ、雨戸も明けなくて熱いぢやないか、』とガラ／＼と前の戸を繰る。

話を聞き終つて、『なあに、そんなに心配せんでも好い、懷妊してる時といふものは、ぢきそんな氣になるもんだ……。けれどお前もやかましく言つちやいかんよ。まだ子供だから。』

勤の點頭くのを見て、

『お光はそれに一體小さなことでも何でもすぐ本氣にする方だから……里から歸つて來た時などに、そんなに小言を言つてはいかんよ。あれで里に行くのがどんなに樂みなんだか知れやしないんだから。』勤が善後策を相談すると、『待て待て己に任せて置きなさい。お光もひよつとするとそんな氣で行つたんでもないかも知れない。もう歸つて來るかも知れない。』

『そんなことは無い。』

『まア、待つておいで、大丈夫だから。』

と兄はひとりで手輕に引受ける。人一倍經驗に富んだ身から見ると、こんな事は何でもなかつた。新婚當座には、かういふ話は得て難かしくなるものだが、お光は懷妊して居る、確かなものだ多寡を括つて居る。それに此方にもいくらかは文句がある、少し成行を見ようといふ腹もあつた。

『丁度好い、今日肴屋が好い松魚かつおを持つて來たから、一杯相手をして呉れ。』
と元氣な調子で兄は歸る。

しかし勤には平氣では居られなかつた。それは無論兄の言ふ如く、何うせ歸つて來るであらう。けれどかうした事實があつたといふことは、二人の間に永却消え去るべきものではないのだ。成程お光は無邪氣である、兄の眼からは子供である。けれど此事實を簡単に解釋して了ふのには勤には餘りに大きかつた。——兄の家に行つてめづらしい松魚の刺身、兄が手づから拵へたお得意の鳥の吸物、酢の物などを膳に並べて、したゝか御馳走になつても、いつものやうに快活にはなれなかつた。

十二

悶着は四五日續いた。兄が出懸けて行つての話では、「一人で黙つて出て來るなど、は、お光が重々悪い。あんなものでもお詫をしたら許して下さるでせうか、……」と何處までも里の母親は下手に出た。けれど明日送り歸す送り歸すと言ひながら、容易にそれを實行しなかつた。

勤は五日目に自から里を訪ねた。社の歸途に寄つたのである。かう決心するに就いては少なからぬ侮辱を感じたが、それ以上にかれにはお光が必要であつた。他人に任せて置けぬといふ氣があつた。

里の母親は例の莞爾した顔で婿を迎へた。姉も笑つて居た。お光は二階に居たが、勤が來たといふのを聞いて、慌て、階段を下りて來た。矢張莞爾して居た。あんなことがあつたとは何うしても思はれない。

とお光は平氣で言つた。四五日里に遊びに來て居たといふ調子である。

母親は店から、

「此間、兄様がわざ／＼お出で下すつたにな、何もお構ひも出來んでな……失禮してな。」

「いゝえ。」

「まア暑いぢやないかな、羽織でも脱りなさらんか。」

「勤さん樂にする方が好いよ、」と姉のお榮も傍から言つた。

さうかうする中に氷が出る。近所で名代の鮓が出る。夕飯の準備が出来る。ホイ／＼と下にも置かぬ欸待振。——勤は變な不思議な奥齒に物の挿つたやうな心地がした。

御馳走になりながらも、勤は其話が今出るか出るかと思つて居た。けれど母親も姉もわざと避けたのか、一言もそれに觸れようとはしなかつた。いつもと同じやうな賑かな世間話、勤はビールに酔つて、社からの途中いろ／＼に思ひ悩んだ暗い心などはいつか全く忘れて了つて、常に似ず樂しげに話した。其處へ仲兄の政次が役所から歸つて來て、座が愈々賑かになつた。

政次は某省の判任官で、此家の相續者、兄弟中での好男子、勉強時代に胃の重いのに罹つて、遣り懸けた私立の商業學校も途中で廢學し、四五年家で遊んで居たが、二三年前に今の役所に勤める身になつたのである。おとなしい深切な性質で、當年二十七歳、近頃新派の俳句に熱中して、ホト、ギスだの卯

杖だのを常に買つて讀んで居る。手帳と鉛筆とを手から離したことがない。勤とは合口で、顔を見るといつもすぐ俳句の話が出る。

今日も此頃の紛紜などは夢にも知らぬやうに、すぐ手帳を出して、最近に得た自作の俳句を勤に讀んで聞かせた。『何うも旨く出来ません、』の、『何だかちき月並になつて了つて爲方が無い、』のと言つて、『何うでせう、これは？』と稍得意の句を鉛筆の尖で指して見せる。勤は俳句は作らぬが、其趣味は知つて居るので、遠慮なく批評して、

『これが一番好い』など、鉛筆を政次の手から取つて印をつけて見せた。

で、最後まで其話が一座に出なかつた。お光は歸る支度をした。勤は可也に酔つて赤い顔をして居た。一緒につれ立つて、暇を告げると、母親がお光に、

『それぢやね、お前よく勤さんの言ふことを聞かんといかんぞな。』

勤に向つては、

『本當にまだ子供でしやうがなからうがな、それでも面倒見て遣つてな。……。』

『私も悪かつたんですから。』

と勤も笑ひながら気軽に言つた。

二人は外に出た。

月の明るい夜であつた。氷屋の店には客が一杯入つて、せつせと氷をかいて居る亭主の顔に、瓦斯の光が青白く照つた。氷屋の前には小さい縁臺に夜目にも白く見えるほど白粉をつけた娘と若い男とが腰を懸けて何か話した、夏の夜は賑かで、ぞろぞろと人通りが絶えない。

一方汚い溝、一方富豪の高い石塀に月が射して、溝端の大きい楊樹の影の濃い鮮かな間を二人は楽しい心で通つた。

二人はもう其時のことを思ひ出す必要が無かつた。お光も莞爾と嬉しさうに笑つて見せた。勤にも何だかお光がいつものお光でないやうな氣がして、月を浴びた顔を美しく思つた。

それから貧しい人々の住む細い路を通つて、坂を登つて、舊大名の長い黒塀に添つて、冠木門やら建仁寺垣やら庭樹やらの多い屋敷町を向うの臺地に出る間の路——これは二人に取つて記憶の多い忘れぬ路であつた。春は曲り角に木連の花の咲く家があつた。廣い路の兩側に大きい八重櫻が咲き満ちて、見事な花のトンネルが出来た、此方の臺地から、向うの臺地に出る低い處には、カンテラの光薄暗い場末の町があつて、日中通ると、角にいつも蒸籠やら鯉節のダシ殻やらを並べて干して置く汚い蕎麥屋があつた。梅雨の晴れた日などには、番傘が干しつらねてあつて、泥に汚れた醜い茶色の毛をした犬がごろ／＼して居た。交番の巡查、剥身屋の婆さん、酒屋の肥つた莞爾した亭主、乾物屋の跛足の老爺、煙草屋のつそりとした馬鹿のやうな息子、其隣が近頃俄かに店をひろげた雜貨店で、若主人が如才が無

く世辭が好いので、附近の商家の眠つたやうに淋しいのに引替へて、士官や學校の生徒が其頃ボツ／＼街頭に見え始めた海老茶袴の女學生などが常に出たり入つたりして居た。

まだお光と結婚しない頃にも勤は此路を通つた。冬の寒い夜、お光の顔が見たくなつて、慇々壞端まで出懸けて行つたこともあつた。店にお光が出て居ない時は非常に失望した。それから新婚の當座、丁度其八重櫻の美しいトンネルの中を矢張今と同じやうにして並んで歩いた。其時は薄月夜であつた。心は快樂に慇れ切つて居た。

お光にはまた異つた記憶があつた。里に行く時の嬉しさ、歸る時の悲しさ、朝はいそ／＼として行き、夕はボツ／＼として歸つた。途中に陸軍の大尉に嫁いた學校友達の門構の家があつて、二階には新しい硝子戸がはまつて居る。ある日、其友達が立派な夫と盛装して門から出て來るのに逢つたことがあつた。羨しいといふ情が燃えわたつた。學校に居る頃には、學問は自分よりずつと出來なかつたし、容貌だつてさう大して好い方ではなかつた。お光は其身の不運を悲んだ。此間黙つて家を飛び出した時には、其門前で思はず涙を零した。

けれど今宵は二人とも嬉しなかつた。何だか新しい戀が其間に生じたやうな氣がする。言葉は餘り交さなかつたが、心はヒタと合つた。
二人は戀人のやうにして歩いた。

十三

下の家にはお三輪の親類の人々が常に訪ねて來る。早稻田に通ふ甥、女子高等師範の寄宿舎に居る遠縁の女學生、高等商業のハイカラ生徒、姪だといふ肥つた娘、それにお三輪が前に嫁いて生んで來たといふ七歳位の女の子も時々來た。主人が柔しいので誰も氣が置けない。

其中に一人綺麗な娘があつた。丈の高い、後姿の好い、顔だちのなだらかな、眉の好もしい子で、髪は常に輪の大きい銀杏返に結つて居た。春の頃勝色がかつた銘仙の羽織を着て、後向に銀の簪を見せて、お三輪と對して坐つて居た。勤が行くと、羞かしさうに、それでも行儀正しく挨拶をして、やがて立つて立關なり勝手元なりへ行つて避けて了ふ。女學生風では無論なく、さうかと謂つて下町式でもなかつた。「別嬪さんですね！」とある時勤が嫂に言ふと、「え、／＼大變な別嬪さんですとも！ 何處か好い處が無いかえ勤さん、嫁に行きたいつてキュツ／＼言つてるんだがね、」と例の大袈裟な笑ひ方をした。聞けばお三輪の姪で、小石川あたりのさる新華族に三年前から行儀見習に上つて居る。父親に早く死別れて、三人の遺兒を抱へて、母親は一方ならぬ苦勞をしたが今では皆な大きくなつたので、自分は茅ヶ崎の高田病院の首席看護婦をして居るといふ。

姪は叔母さんに何處か似て居た。口の利き方笑ひ方などがそつくりで、唯違つて居るのは、盾の邊に

何處か沈んだところが見える。お三輪のやうに氣もはしやいでは居なかつた。それといふのも難かしい、氣の置ける朋輩の多い中に居たからで、新華族の家庭などと謂ふものは、それは面白いものですよとお三輪は勤に話した。

其屋敷は小石川の、高臺にあつた。椎の樹の大きいのが庭に聳えて立つた。娘が見習に上がった當座、さる新華族から若主人に立派な奥さんが來た。娘は始め一年の間は、妾腹に出來た末の嬢様の七歳になるのに傳いて、毎日お茶の水に通つたが、二年目から座敷に出るやうになつた。容色がよく、舉止もちじが落着いて居るので、旦那様奥様のお氣に入りで、着物も三疊の押入の葛籠に一杯に出來た。門前に住んで居る庭掃除の爺婆とも懇意にして、暇があるとよく其家に行つた。

けれど朋輩との軋轢が随分ひどい。勝手を取締つて居る五十ばかりの女の機嫌を取るのも容易でなかつた。それに若主人夫婦の睦しいさまがちよい／＼眼に付く。娘は今年二十である。何時まで他人の家にかうして居た所で爲方が無いといふ氣がいつとなく萌して來た。路を行く若い洋服姿が眼に留つた。

ある日曜に、お光の仲兄の政次が、水色のアルバカの脊廣に白のズボン、色の際立つて濃い派手なネクタイをして、意氣な麥稈帽子を冠つてお光の家遊びに來た。勤は生憎朝出て居なかつた。で、妹を相手に氷など御馳走になつたが、餘り御無沙汰をして居るからとて、ちよつと下の家に行つた。十五分ほどして歸つて來たが、お光とのさま／＼の會話の中に巧に挿んで、

『下の家に來るのはあれは何處の娘？』

『娘つて？』

『そら顔の長い、丈の高い？』

『あゝあの娘？ 嫂さんに似た？ 今あの方が居て？』

『あゝ。』

『別嬪さんでせう。』

仲兄は笑つて見せた。お光は知れる限を話した。里の家でも此頃嫁を貰ふ話があつた。此間も母親が下の家の主人に、『何處かに好い娘がありましたら、』など、頼んで居たのである。

娘はおきよと呼ばれた。

おきよも一目見た洋服姿を忘れ兼ねた。忙しく立働く間にも、勝手元で水仕事の手傳をする時にも、おひけになつて朋輩と一緒に寝る際にも、派手なネクタイと丁寧に分けた髪と色白の柔しい顔とを思ひ浮べた。殊に、西洋館の若主人の居間に通ふ長い廊下の角を通る時には、何故か一層強く鮮かに其姿が眼に見える。其廊下には圓柱が立つて、庭に下りる石段の上に、大きな蘇鐵の鉢が置かれてある。其鉢は紫の地に白く模様が浮出してあつた。芝草の庭から築山の向うには、松やら楓やら高野槇やら棕櫚やらが繁つて、置石の處々に伽羅と丸ヒバの大きいのが綺麗に刈込まれてある。室には金縁金文字の書籍、

地圖、油繪、棚の上の人形の置物、八字髭の若主人は常に厚い洋書に讀み耽けつて居るが、夜などのお召の時に行つて見ると、其處に若奥様と一緒に居て、晴れやかな楽しいな笑聲が高く聞える。おきよは瓦斯の光に照り輝いた其室から、暗い廊下へと靜かに足を運びながら、一層鮮かに其の姿を頭に浮べた。おきよが朝の用を済まして、化粧をザツとして奥に行く頃には、其の洋服姿は丁度出勤の途中で、いつも九段坂を下りて牛ヶ淵に出ようとする位であつた。腰辨の群は大洋を流るゝ黒潮のやうに朝日に向つてぞろぞろと歩いて行く。政次はをり／＼此の附近で勤と邂逅して伴れ立つて行くことなどもあつた。

政次の勤めて居る課は、主として計算と統計とで、算盤を控へて桁の多い數を讀み合はすのが其日其日の仕事である。始めは二三日勤めると、誰でも大抵うんざりして了ふのが習ひであるが、さうした無趣味な仕事にも、人間は慣れ、ば慣れられるもので、政次は此處に勤めてからもう三年、加算は殊に達者で、いかに早い讀口にも、減多に數を誤ることなどは無い位に熟達した。

かれも其時から矢張其娘のことを忘れずに思つて居た。色は少し淺黒いが、後姿の好い、眼の綺麗な上品な處が少なからず氣に入つた。當世式ハイカラは嫌ひ、下町式の意氣なものも餘り趣味に適はないといふ政次には、其大きな銀杏返が際立つてよく眼に残つた。嫁を貰ふ話をまだ直接に母親から言はれたことはないが、妹が嫁いでから、家は無人、姉は其忘れ形見の娘と樂に二人暮をするだけの財産を持つて居るので、嫁さんでも出来たり一刺も早く別れたいと口癖に言つて居る。政次も暗に妻になる女を胸

に繰返した。

二つの心は人知れず互に燃えて幾日か過ぎた。おきよは二三度伯母の家を訪ねて來たが、其のなつかしい洋服姿を見ることが出来なかつた。政次も妹の家に來る毎によく下の家に寄つて行くが、矢張その銀杏返は居なかつた。早稲田の淺間神社の祭が來て、カンカンと鐘を鳴らす音が場末の町を賑かにした。通りの祖師満願の押灸の賑かな日もやがて過ぎて、お孝が京都の親類に向けて發つと、萩の咲く九月が程なく來た。

下の家の主人がある朝何氣なく、

『何うだらう、おきよは政次さんに、……………』

とお三輪に言つた。

『さうぢやね』とお三輪は考へたが、『好いちやらうと思ふがね、政次さんは柔和いし、それに男も好いから。』

『屹度好いよ。』

『あの子だつて、さういつまで奉公して居たつて爲方がありませんしね……………屹度好う御座んすよ。』では先づ當人に聞いて見ようといふことになつた。一週間ほど経つて、おきよが遣つて來たので、それとなくお三輪が氣を引いて見ると、おきよは何も言はず顔を赧くして低頭して了つた。

無論異存無し！で、其話を先方に持込むと、政次も胸を躍らした。母親や姉は流石に老功で、「私共のやうな世帯でも一緒に遣つて見て下さる積なら、嫂さんの姪、これほど結構なことはない、と上邊の挨拶は綺麗にして置いて、種々の方面から奉公先やら親類やらの様子を聞き糺した。別にこれと謂ふこともなかつた。娘の奉公先の門前の年寄夫婦は口を極めて其性質の温良なのを語つた。近所での評判も好い方であつた。話は段々進んだ。處が當人同士は一度逢つて知つて居るから好いやうなもの、母親か姉か一度逢つて置き度いと言ふので、それなら改めて正式の見合をしやうといふことになつて日が選ばれた。

其日は政次は姉と一緒に來た。緋の三ツ紋の羽織に糸織の單衣を着て白足袋を穿いた。おきよは結ひ立の銀杏返がよく似合つて、少し地味な白茶の帯がかへつて其姿を品好く見せた。座敷で姉と主人と政次とが話し合つて居る處に、茶を運んで出た娘の顔は上氣した。姉はガラ／＼者の遠慮もなく、思ふことをすん／＼言つて了ふので、政次は傍で聞いて居てはらはらした。

見合が済むと、姉弟が歸途にお光の家に寄つた。お光は笑ひながら姉の耳に口を寄せて何事かを囁くと、姉も笑つて、

「好い娘だね。」

「さうねえ、別嬪さんね、政次さん仕合せよ。」

と政次の顔を見てお光はまた厭に笑つた。八月のお光の腹は、前掛を高く緊めてももう隠されぬほど人目に立つた。

母親もお榮の歸るのを待ちかねて、「何うぢやつた？」と訊く。

「あれなら好きさうだよ。品の好い温和おとなしさうな娘ですよ。」

「店が出来さうかな？」

「さういふことは好きだつて言つて居ましたよ。」

「さうかな？ それなら好いがな……」

翌日役所の歸途に下の家の主人が壕端の店に訪ねて行くと、母親は下にも置かぬといふやうに歎待もてなして、鮎を大きな皿に盛つて出した。主人の笑ふ聲がお榮の笑ふ聲と一緒に高く聞えた。

おきよには母方の伯父が三人あつたが、主人が其話を持つて行つて相談をすると、孰れも皆賛成した。一番上の伯父は中でも殊に同意して、出来るだけは準備もして遣り度いと言つた。先づこれで此の縁談も世話甲斐があつたと喜んで居ると、意外にも茅ヶ崎の母親から不承知の手紙！

母親の意見では、折角の良縁だが、其身が舅姑小姑に苦勞し抜いた覺えがあるから、何うかあの娘にはさうしたつらい思をさせたくない。今少し樂なひとり者か何かに嫁かたぢけ度いと言ふのである。内々は少しでも好い處にと願ふ親心から、多少の財産があつたにせよ、判任官ではといふ腹があるらしく、猶一

二年も今の處に辛抱して居る中には、容色だつて、悪いと言ふのではなし、どんな好い處から望まれな
いものでもないと母親は娘の將來の榮華を夢みてゐる。

お三輪は、『姉さんがまア何うだらう、華族さんの處へでも遣れる氣で居るから可笑くなるぢやね、』と
無造作に笑つた。勿論お三輪にしても、もう少し厄介の少い生活の樂な處に遣り度いといふ考はあつた。
姉が夫に死なれて三人の子を抱へて難儀したことも知つて居る。自分の夫の俸給が少く、毎月つらい
遣繰を遣つてゐる經驗もある。

主人は腕を組んで考へた。今になつて纏まらぬとあつては口を利いた甲斐が無い。顔も立たぬ。徒に
感情を弄ばれた當人同士にも氣の毒だ。で、少時黙つて考へ込んで居たが、やがて端書をおきよのとき
ろに出した。

おきよは其夜奥様の手離されぬ用があるのを強ひて頼んで飛んで來た。お三輪が取敢へず母親の手紙
を見せると、小石川から長い夜路をさまよひに夢を見て嬉々して來た調子が忽ち變つて、沈み切つた悲
しさうな顔色になつて了ふ。

一座が少時深い沈黙に落ちてゐたが、突然、お三輪が、
『遣り切れんね、まア、此娘は。政次さんに首つたけなんぢやがね！』
と體を崩して笑つた。

おきよは黙つて顔を赧くして、手紙を膝に廣げたまゝ、低頭してゐた。
相變らず頓狂な奴だなどといふやうな顔をして、主人はお三輪の笑ひこけるのを面白さうに視て居たが、
やがてやさしげな微笑を八字髻の邊に湛へて、

『だから好いんだよ。向うだつて欲しがつて居るんだから、………母さん不承知を言つたつて、當人同
士が好くさへあれば、それで好いんだ。何も母様が結婚するんぢやなし！』と笑つて見せて、大丈夫だ
よ、心配せんでも大丈夫だよ。』

『そら、大丈夫だとさ！おきよ。』
と低頭して居る顔を強ひて覗くと、

『厭よ、伯母さんは。』
とおきよは其儘につこりする。

『厭もないもんぢやがね、………うんと御馳走して貰はなきや遣り切れんがね、………』とまた一しき
り笑ふ。

少時してお三輪が、
『それで、何うぢやね、お前本當に嫁く氣かえ？』

眞面目に出られると、おきよも流石に返答に困つた。嫁く氣だと明白と言ふのも氣恥かしいし、子供

のやうに黙つて居る譯にも行かず止むなくもじ／＼してると、お三輪は座敷に行つて、机の上から巻紙と硯箱とを持つて来て、おきよの前につきつけるやうに置いて、『政次さんの處に行きたけりや、今伯父さんが文句を教へて上げるから、言ふ通りに、伯父さんに寄越したやうにして、つくり手紙を書くんだとサ。それを伯父さんがね。茅ヶ崎に持つて行つて母さんを説きつけるんだつて……丸で狂言ぢやがね。』

主人は微笑みながら、いろ／＼と文句を教へてやる。お三輪は傍でひやかしを入れて笑ふ。おきよは筆を片手に持つて、巻紙を洋燈の下に廣げて、時々恥しい文句に出會つて顔を赧くした。おきよはいつそ家に歸つてさうした本當の手紙を書かうかと幾度か思つたが、まさかにもんなこと言へなかつた。やがて手紙の草稿が出来る。

主人が讀んで見る――

一筆申上まるらせ候、此間は御馳走様に相成難有御禮申上候、また此節中は私縁談につき伯父様伯母様一方ならざる御心配下され、此御恩は海山盡きせず一生忘れ申すまじく候、母不承知の由私のやうなものも少しも好かれと思ふ慈悲と思へば涙も出で申候、左には候へど私のやうな者はまたと縁談も有之間敷、萬一有之候とも最早一生他へは嫁よめき申さず、獨身にてさびしく暮す積りに覺悟致まるらせ候、伯父様伯母様あれほどに御世話下され候ふに、かゝること相成り候ふは私身に取つても口惜しく候、

しく存じ候、一生他人に奉公と覺悟仕候身の心の中お推もじ被下度先づは御禮旁御返事まであり／＼かしこ、

きよ

伯父上様

伯母上様

『これで好い、これで上等だ、』と主人は得意さうに點頭いて、

『それを清書して御覽。』

やがて清書した手紙を主人が讀返して見て、

『これで伯父さんが一狂言書いて遣る、首尾よく參ればお慰みだが、』と可笑しさうな笑ひ方をする。

お三輪も夫から其手紙を取つて字を拾つて讀んで居たが、『これは旨いねえ！』一生他人に奉公の身の心の中お推もじだつて……旨く遣つたね、まアおきよ、』と手紙を展けたまゝ轉けるやうに笑ふ。

主人はお三輪を顧でしやくつて、『さつき預けたもの持つてお出！』

お三輪は立つて簞笥の上の抽斗から半紙に包んだものを出して、厭に笑ひながら夫に渡すと、主人はそれを娘の前に出して……娘がそれを取らうとすると……

『おつと、お預けお預け！』

妻

娘が慌て、手を引込めるのを見て、

『さう容易くは渡されない、』と笑つて居る。

『何だか當て、御覽よ、』とお三輪は傍からいふ。

『厭ですよ、伯父さんや伯母さんは、……………』

『だつてお前の欲しいものだから好いちやないか。』

半紙の中にはハイカラな政次の寫眞！

昨日其人が来て、此處にあつたおきよの半身の寫眞と交換したといふ。おきよは今年春の頃使に出た途中、山の手の小さい寫眞屋で撮した其寫眞を思出した。横向の顔も悪いし、銘仙に縞子の帯の扮装も羞かしかった。

歸途は闇が嬉しかった。おきよは懷に大事に其寫眞を抱いて來たが、場末の町の薄暗い洋燈の光に一度ならず二度までも出して透して見た。蕎麥屋の角の郵便函に其手紙をソツと入れた。

あくる日の午後、主人は茅ヶ崎の病院をたづねたが、母親は存外弱かつた。それほどまで當人が思つて居るのならばとすぐ承諾した。白い服を着けた五十歳位の小柄の看護長は、少し褪めた紺の背廣を着た主人を、病室やら海氣室やら診察室やらに案内して廻つた。海氣室の小高い處に二人は立つて、色の濃い群やかな初秋の暮を見た。

十四

唐物屋がめづらしく店を閉めて休業したと思ふと、今日嫁さんが來るといふ噂が近所の人々の耳を驚かした。日の暮れる頃から、羽織袴を着けた見馴れぬ人が出たり入つたりして、今少し前魚屋の若衆が板臺を斜に狭い露路を裏に行つた。

二階が一間、下が一間、いかにも狭いので、足も踏立てられぬほどの混雜、竈の火の赤く燃えて湯氣の立つ中に、女連の手拭を冠つて働いて居るのが、汚れて黄くなつた硝子戸を透して不透明に見える。八疊には膳具、座蒲團、茶器などが一面に散らばつて、中央に吊した五分心の洋燈は腰を曲けて忙しさうに立働いて居る母親の色白の顔を照した。茶の間と店の闕の處に貞一が居て、それに羽織袴の勤が飽かず話し懸けた。姉の女の兒の今年十二になるのが、友禪縮緬の濃い水色の地に菊を白く出した晴衣を着て、縞珍の赤い帯を立矢の字に結んで、髪をおちごにして、莞爾と無邪氣に伯父さん達の肩に櫻つたり何かして居ると、其處に嫁さんの荷物が來た。

人々が手傳つて取敢へず店に上げた。店は残なく片附けられて、硝子棚に無理に押込んだ赤、青、海老茶などの毛糸と白いメリヤスのシャツが目立つ。箆笥二棹、鏡臺、日用道具、葛籠などがやがてずらりと其處に並ぶ。

『貞や勤さんはそんな狭い處に居ないで、二階に行つてお出な、』と荷物を見に來た姉に言はれて、二人は其儘二階に上る。

二階の八疊は綺麗になつて居た。中央に白い毛布が敷いてあつて、座蒲團が其周圍に幾つとなく並べられてある。置洋燈が二個、四邊は晝のやうに明るい。二人が上つて行くと、欄干に凭懸つて町の夜の賑ひを見て居たお光が、暗い中から派手やかな扮装と丸髻姿とを顯はした。女の兒も上つて來た。

『お婚さんは何うしたんだえ?』と勤が聞くと、

『もう來るだらう。家が狭いから、隣の二階を借りて、其處で支度をすることにして置いたものだから。』

欄干に行つた女の兒が、すぐ軒をつらねて居る隣の二階を覗き込んで、『伯父さん!』と呼んで居る。見ると其一間にも洋燈が照り輝いて、障子の硝子を透して政次が袴を穿いて居るのが見える。手焙てあぶりに茶道具が置いてあつて、穿きかけた袴の髻に光線が動く。

裏の高窓を明けると、冷たい十月の空気が入つて來て、向うの家の庭の高い梧桐の葉ががさがさと夜風に鳴る。明神山の常夜燈がホツツリ見えて、黒い大銀杏の上に星が光つた。

貞一と勤とは盡きざる話に耽つた。二人は政次の結婚の席に列するといふよりも、かうして語り合ふ機会を得たのを一瞥うれしく思つたのである。貞一は田舎寺の方丈さんになつて了つた。五月逢つた時

よりも面寝れがして、顔色が悪い。何うも持病の胃が出て爲方がないといふ。貞一はまた勤がいくらか世馴れたやうな調子を見て取つた。顔も稍肥つたやうである。西、田邊の近況もやがて出た。西は此夏大學を出るとすぐ、書籍を抱へて鹽原に二月ほど行つたが、今は丁度文官試験で忙しがつて居る。田邊は三月ばかりで主筆と衝突して新聞社をよして、四谷に引越して、筆で食つて居る。明日、君が都合がよかつたら、近郊散歩旁先生の處に行つて見ようではないかなど、勤は貞一に言つた。

客が漸く集つて來る。十數年某省に勤めて居る酒好の元氣な伯父の鬚と勤の兄の八字鬚とが新聞を種に世間話を始めると、伯母達は今度の結婚からいろいろ昔話を持出す。やがて時計が八時を打つ。下がガヤガヤと賑かになつて嫁の一行が來た。

儀式の間は客は皆下に降ろされる。栗梅の縮緬の紋附に繻珍の帯を緊めた嫁が、先方の伯父に伴れられて、二階に通ると、媒妁役の勤の兄夫婦が続いて階段を上る。

店と茶の間には羽織袴と縮緬の紋附とが彼方此方に立つたり坐つたりして、低い笑聲と嘯きと勝手の物音が一緒になつて、狭い家を更に苦狭しくした。高く吊つた洋燈の心しんが出過ぎて、ホヤが半ば黒くなつたのを貞一は氣にして、幾度も直して見たが、室は矢張暗かつた。引替へて二階はぱつと明るく、階段の黄い壁に張附けた石版繪の美人の横顔が浮出すやうに見える。

三々九度が始まつたと見えて、今迄折々話聲がしたのが急に止んで、二階はひつそりとなつた。女の

兄は階段を二段ほど上つて足を爪立て、覗いて見たが、やがて下りて来て、『伯父さんが盃を持つてゐてよ、』と言つて、長い袖を口に當て、笑つた。

『お嫁さんが見えたか、』と貞一が訊くと、

『え、え、見えてよ。それや別嬪さんよ……床の間の處に坐つて、下を向いて、困つたやうな顔をして居てよ。』

と誰も知らぬものを自分ばかり見たといふ無邪氣な調子。

この二階のひつそりとなつた間を、勤は店の硝子戸に凭り懸つて坐つて居た。自分の結婚と引較べて二人の戀を頭腦に浮べて見た。

羨ましいやうな氣がする後から、自分のは要するに片戀であつたとおもふ。お光は戀などを知らず、唯望まれるまゝに嫁いで來たのである。勤はこんなことなら寧ろ其時失戀した方が好かつたと後に思つたことすらある。勿論自分からも其の理由の無いことを知らぬではないが、知つて居ても矢張片戀は片戀であつた。自分の戀は冷たい水をかけられて、じめじめと燻つて消えて了つた。……ふと考が變つて、お光の姉がさびしい未亡人の身で、かうした新婚の夫婦と一緒に家に起臥するといふことが氣の毒のやうにもあり、同情に堪へぬやうにも思はれる。

氣が附くと、もう常人同士の式は済んで、二つの燃えた心が暗れて此世で合ふことゝなつた。續いて

母親、姉、貞一、お光とかはるる階段を登つて行つて、親子兄弟のかための盃を済ました。母親は寫眞よりも立勝れて嫁の容色の好いのを見た。

やがて膳が狭い八疊に隙間なく並べられる。嫁と婚とは上座ではあるが、隅の方へ押附けられて、十餘人の伯父やら伯母やら親類やらがずらりと膳に着く。勤は貞一と並んで坐つた。

手傳に來たものゝ中に下町の綺麗な娘が二人居て、人々に酒を侷めた。姉のお榮は晴衣を平常着に着替へて、如才なく席を斡旋する。少し酒が廻つた頃に、母親が出て改めて挨拶をした。

勤の兄の氣輕な洒落と、酒好の伯父の大きな笑聲とが殊に一座を賑かにした。姉の女の兒は派手な扮装を絶えず鮮かに見せて、無邪氣なことを言つて人々を笑はせた。

其夜酔つたのは伯父ばかりではなかつた。貞一も嫁の兄もしたゝかに酔つた。勤は席が散じてからも、踰躑ながら大きな聲で詩を吟じた。今までこんなことはなかつたのである。貞一も覺束ない調子で新體詩を歌つた。

十五

十一月の末にはもう雁が鳴いて通つた。

宵から何うも様子が變だと言つて居たが、夜中に愈産氣が催して來たことが解つて、勤は暖かい夢か

ら呼び起された。薄暗い行燈の下にお光は白い顔を出してブルブル身を戦はして居た。

夜は既に寒かった。

お光は終夜一睡もしなかつた様子。腹の痛みが波の寄せるやうにをり／＼来て、そして間が段々近くなつて、その度毎に痛みも強くなつて来る。『今は鳥渡途切れて居ますけれど……もう生れるに違ひありませんから、』とお光は苦しさに呼吸を吐く。

勤がズボン下を穿いたり寝巻を着替へたりして居ると、『それからね、貴郎、すつかり支度をしなくちやなりませんから……其處から……押入から……』腹が痛んで來たと覺しく、言ひ懸けたのを急に止して、打伏になつて腹を蒲團で押すやうにする。

『痛んで來たか。』

返事がないので、勤は其傍に寄つて見る。白い顔には苦痛に堪へようとする眞面目な表情が出て居て、大きい丸髻がだらしなく半ば潰れ懸けて居た。勤は自分の妻とこれから世に出でようとする一塊肉との間に、一種否むべからざる關係と束縛とがあるのを思つて厭な氣がした。お光が呼吸を刻むやうにする度に、勤は生物の産れる力の壓迫を其身にも感じた。

やがて少し痛みが落着く。

此間にと勤は押入から豫め準備をして置いたいろ／＼の物を出して、寝具を赤柱に近く寄せて、五六枚

折の屏風を半ば立廻した。其屏風に、かれ等の友達の群の手紙が、若い情熱時代の記念として張られてあつた。寝てゐるお光の丸髻のすぐ上に、かの西さんが利根川の戀を勤に報じた手紙が白く鮮かに見える。『この堪へ難き思を抱きて一人此地に別れ行くべきわが運命のはかなきを思へ』と書いてあるが、一人といふ字とはかなきといふ字が殊に際立つて大きく出てゐた。

夜は寂として居る。寒さがもう嚴冬であるかのやうにゾクゾクと身に沁み渡る。勤は臺所に行つて、竈の下から鉋屑を攫み出して來て、先づ第一に火を起した。鉋屑がペラ／＼と燃えて、消炭に螢のやうな火が附いたのを、勤は顔を押附けてふう／＼吹く。

火が起る間にも、痛みは二三度來たらしかつた。産婆を呼びに行かうかと、其度毎に勤は思つたが、成るべくなら夜明までかうして保つて居て呉れ、ば好いと思つた。今は二時、下の家にしろ産婆にしる、この夜中に起すのは氣の毒だ。それに自分も寒い。

勤はある雑誌に原稿を遣つて置いた。出産の費用にと思つたのである。けれど雑誌社から昨日其原稿を送り返して來た。財布に月の始めに一圓位はあつたのが、今はもう銅貨ばかりになつた。また社の編輯長に泣附いて、自分の文學者たるの矜持を侮辱されるのかと思ふとつく／＼厭になる。それに産が神經を昂らせる。難産？ 死？

勤は始めて親になる夜をかうした不安な心で過した。

妻

痛みが漸く募つて来て、身悶をして唸聲を立てる。傍に行つて、顔を覗いて、『何うだ、もう産れさうか、』と聞くと、それでも微笑を顔に見せて、『まだでせうけれど……』と言ひ懸けて腹を押す。

『婆さんに行つて来ようか。』

『寒くつて大變ですね。』

『なあに、わけはない……何うせ夜が ажけるまで持ちはしまい。』

『え、朝までは……』と顔をしかめて、『それぢや下の家に寄つて嫂さんに來て貰ふやうに頼んで、お婆さんの處に行つて来て下さい……お婆さんの家知つてるでせう。』

『よく知らんけれど……』

『あのお醫師さんから向う通りに出て、左へ行くと酒屋がある。それから二三軒先に下宿屋がありますが、その裏で軒燈が出て居りますから、すぐ解ります。』

勤は古びた二重廻を引懸けて、磨減らした駒下駄を引摺つて出懸けた。下の家に來て、縁側の雨戸の處から二三度聲を懸けたが、熟睡して居ると見えて返事がない。止むなく雨戸をトントンと叩くと、今度は聞えて、お三輪がだらしない寢巻姿で戸を開けて、白い顔を闇に出す。

『愈々始まつたかね……』と眠むさうな眼を摩る。

『さうでせうともね。初めてツていふものは心配なもんだから……』と言かけて、『今すぐ行くがね。』

『それぢやどうぞ……』

かう頼んで置いて、勤は田畝を越して、淡竹の籬に沿つた暗い路を急いだ。星のキラ／＼と閃めく夜で、寒い風が路傍の枯れた萱をカサ／＼と吹鳴らした。産婆に遣る金のことが絶えず氣になる。

産婆の家はすぐ知れた。軒燈に『さんば』と平假名で書いてあつた。下宿屋の裏庭にある松が斜に其光線を受けて細かい葉を明かに見せて居る。産婆はかういふことには馴れて居るので、一二度戸を叩くと、すぐ返事がして、マッチを摩る音と共に二分心らしい洋燈がぱつと點いて家の中が明るくなる。

『上の中村さんですね、』と戸を明けずに産婆の聲がした。

『何うかすぐ来て下さい。宵から苦んで居るんですから……』一刻も早く來て貰ひ度いといふ氣が勤にあつた。

『はい／＼かしまりました。今すぐ参ります』

寢床の中で煙草を吸ふらしく、灰吹を叩く音がトントンする。

家に歸ると、嫂はもう來て居て呉れた。例の元氣な調子が尠くとも暗い家を明るくした。勤もいくらか氣が安まる、産婦も大に心丈夫になつた様子。『もうさう長くはないでせう。催して來る間が大變短かくなつて來たからね。』と嫂は小聲で囁く。

痛みが催して来ると、お三輪は取敢へず夜着の下から頻りに腹を摩つて遣つて居たが、一刻毎に其いきみが強くなるばかり、寝て居てはいかにも不便なので、葛籠を其處に運んで来て、其上に蒲團をかけて産婦にそれに凭り懸らせて、後へ廻つて、両手で強く下に扱くやうに腹を押して遣る。勤が珍らしいものを見せられるといふ顔をして立つて居ると、お光はきまりが悪さうに、彼方に行つてといふ態度をする。お三輪は、

『勤さん、彼方に行つてお出よ。こんなものを男は見るもんぢやないがね。』

勤は茶を注いで飲んでゐたり、煙草を吸つて見たりしても、矢張頭腦は隣の間の唸聲に引附けられる。平生うはの空で聞いて居た難産の話が又しても新しい力で襲つて来る。お産は棺に足を半分入れて居るやうなものだといふ言葉も今更のやうに胸に響く。

壓迫が時を刻んで烈しくなつて来ると、女はたしなみなどは言つて居られない、身を悶えて苦痛を耐へようとするので、額には汁が滲んで、丸髻が半ば壊れた。お三輪は出来るだけ力を強く撫つてやつて居る積であるが、『もつと強く……後生ですから嫂さんもつと力を入れて……』と産婦はいふ。

其處に産婆が来た。

茶も飲まずに手ばしこく白い服を着て産後の準備を残りなく整へて、「さア、私が……」と勞れたお三輪に代つた。

時が来れば産れるものにきまつて居るんですか、「ら」と勵まして力強く腹をさすりながら、「お三輪さんお氣の毒ですが、髪を束ねて下さいナ」

お三輪は櫛と鋏を持つて来て、向うむきに打伏して居るお光の髪の元結の根を切ると、丸髻の形は落ちて、長い房々した髪が亂れた。

唸聲が唸聲に續く。

お三輪が茶の間に来る度に勤が、

『まだ中々生れさうな様子はありませんか、』と訊く。

『え、まだ……』

『重いんぢやないですか？』

『いゝえ大丈夫、そんな心配をしないで寝て居る方が好いがね。』勤が噓をするのを見て、『そら御覽なさい、風邪を引きますよ、床を玄關に敷いて上げようかね。』

『床なぞ好い——』

『でも起きて居たつて爲方が無いがね、今好い兒を見せて上げるから、それまでじつとして休んで居る方が好いがね。』

座敷の一隅につかねて置いた蒲團を玄關の三疊に運んで来て敷いて呉れる。けれども勤は寝るどころ

ではなかつた。男が生れるか、女が生れるか、或は不具の兒が生れはせぬかと前から繰返して居た心配、そんなことよりも、今は唯一刻も早く生れさへすれば好いといふ氣になつた。

まぎらせやうとして戸外に出て見た。けれど角の家の軒燈が前の下宿屋の羽目をさびしけに照して、寒い夜風が闇を吹くばかり、矢張氣がまぎれぬので、勤は下の家の近くまで行つて引返して来て、今度は庭からわざと他人の家でもあるかのやうに中の様子を覗いて見ると、雨戸の隙間やら穴やらから處々光が闇に洩れて、中の障子が明るく見える。生れたやうな氣勢もない。と、忽ち、

『勤さん』

と、お三輪の呼ぶ聲がする。

急いで家の上ると、お三輪が今勝手に二分の洋燈を點けて、竈に火を焼き付けようとするところ。呼んだのは、湯を沸す用である。で、勤は嫂に代つて、揚板の下から木屑やら杉の枯葉やらを出して火をつけると、青い黒い煙が一面に渦き上つた。薪が生なので、容易に燃え附かぬのを、勤は火吹竹で吹いて吹いてあたりを灰だらけにする。

やがて竈の前に蹲居つた勤の髪面は燃え出した火に赤く照されて見えた。

湯が沸いた頃には、黎明の光が既に東の空を染め出した。近所の工場に汽笛の音がして、朝の聲が微かに町の方から来る。やがて瓦屋根に霜の白いのが見えるほどに明るくなつても、子はまだ産れなかつ

た。

産婦は次第に疲れて、いきんで来ても、これに伴ふ力が出ない。呼吸が切れてすぐぐたツとなつて了ふ。生鶏卵を二度までもお三輪が皿に割つて飲みました。産婆は生れる際になつての力の缺乏を、經驗上尠なからず心配したが、勤が里の母親を迎への車を頼みに行つて歸つて来ると、門の處で小やかな性急な生兒の啼聲が朝の鮮やかな冷たい空氣を劈いて鋭く聞えた。

勤の胸には今まで經驗したことのない新しい喜悅が漲り渡つた。

生れた子は女の子であつた。新しい世の空氣に觸れるのを恐れるやうに手足を縮めてひた啼に啼く。後産が下りないので、あたりは昨夜から散ばつたまゝになつてゐて、屏風の傍には洋燈が消し忘れられてほんやり點いて居る。

でも里の母親が心配しながら腰を曲げて遣つて来る頃には、生兒はもう産湯を使つて、産衣を着せられて、若い母親の傍に寝かせられて居た。産は重い方ではなかつたが、何しろ始めてで力が充分に出ないものだから豫定よりも時間が長引いたなど、いろいろな話が出る。笑ひ聲も盛にした。たき立の飯の臭ひ、味噌汁の臭ひが茶の間に充ちて、朝日が晴れやかに南向の障子を照した。

兄も心配して遣つて来た。昨夜からの話がまた繰返される。

お光は此方を書いて寝て居たが、勤が行つて見ると、莞爾と笑つて見せる。顔色が昨夜とはあゝも違

ふものかと思ふほど晴々して、頬のあたりが際立つて赤い。傍に臥かして置いた生兒を覗くやうにして、

『寝てますか。』

生兒はスヤスヤ寝て居る。勤はじつとそれを見た。自己の子といふ感よりも、鼻の隆い口の小さい容色の好き、うなのが第一に嬉しかった。勤は常に夢みて居た理想の女性をこの小さい一塊肉に當て、見た。戀に覺め世に覺め自己にすらも覺め懸けて居るかれも、今日は何うしてか胸に若々しい血が燃え渡つた。久しく忘れて居た西の國の詩人の歌を思ひ出した。二年前、連中の遣つて居た雑誌に、かの西さんが、『女の子を生みたる友に。』といふ文を載せた。大きくなりての後をさまざまに想像しての美しい言葉の中に、『この君琴弾き給はん秋の萩の花いかに幸なるべき』と言つた風な句があつた。人々は皆な其若々しい優しい心を賞めた、へた。西さんが女性ならば、これが理想的女性だなどと言つた人があつた。

『西君に名をつけて貰はうぢやないか。』

『え、』とお光は笑つて居る。

『好いだらう。』

『結構ですけど……』と勤の顔を見てまた笑つた。

勤は出勤前に西に當て、手紙を書いた。西は近く文官試験に好成绩で及第して、某省の奏任官になつて居た。並谷に近く官舎の坂を北に入つた素人屋の一室を借りて下宿した。霜降の路で、いつも出入の靴がだいなしになるが、家の周囲には大きな樟の木が聳えて、武蔵野の木枯が夜もすがら寒く落葉を吹捲いた。此間勤が行つた時、庭に紅白のしほりの山茶花が一輪二輪咲いて、南縁の籐椅子に冬の日が暖かに射した。

西と田邊とは此頃勤には缺くべからざる慰藉者であつた。さびしいとは訪ね、苦しいとは行き、不平があるとは出懸けた。社の俗塵に塗れて眼の前に黄い埃の舞ふやうな時にも、西の昂つた眉と沈痛なる言葉とに接すると、忽ち勇氣を恢復して新しい希望を得た。『今の中勉強して本をたんと読んで置くさ、今に勉強したくつても暇が無いやうな忙しい時代が来るからねえ。』

かういふ風ふうに西は常に勤を勵ました。西は自分が文藝を目的として居ないにも拘らず、先に立つて西洋の新しい書を購つて来て讀んで見せた。フランスの輓近文學が殊に其趣味を動かして、最初にドオデエ、次にゾラ、フロールベル。露西亞ではツルゲネーフとトルストイが其机の上に離さず置かれてあつた。勤もこれに勵まされて漸く新しい西洋作品に親しんで、金があれば丸善の二階をあさつて、思はぬ掘出し物を得るのを喜ぶやうになつた。

不完全な書目から骨折つて搜して註文した小説戯曲類も月を逐つてかれ等の机に到着した。

二人は餓ゑたもの、やうに全くそれに心を集めた。獨逸のレクラムの廉い叢書の中からも、ハイゼとドオデエとツルゲネーフとをさがして讀んだ。

此間勤が西を澁谷の郊外に訪問した時にも、ズウデルマンのカッツェンステツヒが二人の話の題目となつた。一週間ほど前に到着したのを二人は逸早く読んで居たのである。西はニツケル臺の明るい洋燈の下に、其緑色の表紙の本を展けて、主人公がクリスマス晩に雪の庇に落つる音を聞くの條を激賞した。かの新しい文藝の潮はこの遠い國のさびしい二人の胸にも波を打つたのである。其夜勤は西からピエル・ロチのアイスランドフイツシャアマンを借りて闇の田舎道に躍る心を抱きつゝ家に歸つて來た。

田邊の四谷の家は練兵場から穩田の方へ行く途中にある。小さい川が岸に深い樹を鬱蒼と茂らせて、うねくくと曲つた流に、水車が音高く水を亂して居るが、其前に草の生えた土橋が架つて、竹藪の奥に庇の低い家が一軒、勤は路の遠きを厭はず、牛込の山手から此處におとづれて來る。日中には細君が子供を負つて、いつも井戸端で洗濯をして居る。西の書齋では多く外國文學の話が出たが、此處では當時の文壇の趨勢や作物の批評が一室を賑かにした。二人は伴立つてよく野を散歩した。

田邊は窮して居た。賣れぬ原稿を抱いて餓と戦つた。けれど氣は熾んに、胸は功名に燃えて、勤とは著しく生々してゐる。西の年に似合はず老成なのに引替へて、田邊は飽まで眞率な若々しい處がある。勤が始めて親になつたのを聞いて、田邊は逸早く訪ねて來た。初産の馴れぬを氣遣つて、お光の姉が二十一日まで手傳に來て居たが、それを相手に快活に雑談をしたり、お光の産尊に行つて生兒を見て、其容色を賞めたりした。勤は産婦に座敷を奪はれて、立間の三疊に机や本箱を移して、夜も一人ぼつね

んと其處に寝たが、其日は田邊と夜遅くまで話した。赤兒の泣聲が氣になる話もした。

西は五日目に來た。もう政府のお役人で、新調のハイカラな背廣を着て、白いリボンで襟を取つた中折の帽子を冠つて、リウとした扮装。喜んで起上らうとする若い母親を手で制して、其處に寝てゐる生兒をのぞいて見て、『何うも名づけ親には年が若過ぎるけれど……』と笑つて風呂敷の中から、お祝の唐縮緬と長く折つた奉書紙とを出した。勤が受取つて展けて見ると、眞中に綺麗な書で——咲子。

十六

床揚の日に姉が歸つて行くと、生兒をはごくむ責任は全く若い夫婦に歸することゝなる。乳が充分に出ぬので、神樂坂あたりの有名な乳もみに頼んでもんで貰つたが、結果は矢張思はしくなかつた。鷲印のコンデンスミルクの小罐と赤いゴム管の長くついたミルク罐とが常に長火鉢の傍に置かれた。

若い母親に取つては、一刻も其傍を離れない小さい束縛が尠からぬ重荷であつた。抱きやうもまだ満足に出来ない。襤褸の當てやうも不器用である。朝毎の汚れた洗物も何だが汚いやうな氣がする。殊に火のつくやうな泣聲にはしたゝか困つた。

生れた當座は唯スヤ／＼と寝てゐた。乳も欲しがらずに、時には何うかしたのではないかと思はれるほどおとなしかつた。『此子は本當におとなしい好い兒だよ。』などと世話に來てゐた姉は常に言つた。け

れど三十日も経つと、段々難かしくなつて来た。抱癖が附いて、下に置くとすぐ泣出す、晝と夜とを取違へて、夜中に大きな眼をして起きて居る。だましてもだましても泣止まぬことがある。

経験のあるお婆さんでも家に居れば、こんなことはなんでもない。だます方法も知つて居る。氣にも懸けない。子供はかうしたものだ多寡を括つて居ることが出来る。けれど二人はさうしては居られなかつた。かれ等はアダムとイブのやうにして子を育てなければならなかつたのである。

小やかではあるが性急な小兒の泣聲、それが少くとも家の空気を一變させた。年中一緒に顔を突合して居ながら、其心もその趣味も其の傾向も、溝を隔て、並行して走つて居る二筋の道のごとく永久に相逢ふの機會が無い夫婦の間に生れた兒の泣聲は、普通の夫婦の間に生れた兒の泣聲とは、著しく異つて二人の耳に響いた。

勤には子は夫婦の間の鏟と言つたやうに唯簡單に解釋して済まして置かれぬ。かうした夫婦の間にも子が産れたといふことゝ、男女一緒にある年月同棲さへして居れば、戀などが無くても子が生れるといふことが何だか不思議のやうにも思はれる。

一三年前から破れて来た自分の思想が愈々敗滅に近づいたやうにも思はれる。意味が無いと思つた處に思はぬ意味があつて、意味があると志した處に意味も何もなかつたやうにも思はれる。親になると心の持方が變ると人はよく言ふ。西は「君は人の親になつたんだ、大に眞面目にならんければいかん」と

此間も言つた。別段心持も變らない、眞面目にもなれない、けれどかうした二人の間にかうした子が生れて、朝に晩に口をあけて乳をさがして泣いてゐるといふ事實——いよゝゝ免れられぬ新しい辛い羈絆。

女に取つてはその泣聲が餘程男と變つて聞かれた。可愛いといふ情が溢るゝばかりにあつた。勿論、お光はまださうしたことを意識しては居らぬが、泣聲を聞くと、身内の血が沸き立つて、其儘じつとしては居られぬやうな心持になる。

お光は不馴れで取扱が自由に充分に出来ぬのをわれと自から腹を立てた。それに、男はそんなことなどは察しませずに、唯喧しい〜と言つて、揚句の果は、『何故だまさんのだ、何故負はんのだ、』と厳しく叱つた。少しは見て呉れても好いといふ腹があるので、ブツブツ言はぬまでも厭な顔をする。男もまた不愉快になる。

勤は一日働いて来る。晚餐後から寝るまでの數時間は、渠に取つては實に重要な時間である。此間に筆も執らなければならぬ、思想も練らねばならぬ、新着の洋書も讀まねばならぬ。此間だけは種々の雑務、種々の係累、種々の束縛から身を自由にして、頭腦を一洗して、將來に於ける戦鬪の準備をしたいと思います。それなのに、夕暮から夜にかけては、兒が殊にむづかつて泣く、何うかしたのかと思はれるほどに烈しく泣く。

二人きりで居る中は、何の彼のと言つてもまだ餘裕があつた。夕飯の膳を並べて楽しく食つたことも

ある。一合の酒にほんのりと顔を赤くして戯談を言合つたこともある。けれど今はそんなのんきなことはして居られなかつた。漸く一時間も懸つて、お光が寝つけて来て勝手元に行つたと思ふと、すぐ目を覺して泣き出す。飯を食つて居る間もじつとして落附いて居られない。それに、間數が三間しか無いので、いつも机の傍に寝かして置く兒が氣になつて氣になつて爲方がない。今にも目を覺ますか、泣き出すかと思ふと、筆を取つても氣が乗らず、本を讀んでも氣が乗らず、思想をまとめようとしても氣が乗らず、神経が常にイラついて居る。

時にはこんなことをすら思ふことがある。『あゝもう自分は生活の係蹄の中に入つて了つた。妻といふ係累さへ自分には重過ぎるのに……今は子といふ重荷も附いた。もう駄目だ、自分はもうこの係蹄から脱却することは無論出来ない……恐るべき係蹄、恐るべき生活の係蹄！』

又ある時は憤を發して、

『妻と子！ 妻と子などは何だ。何うでもなるが好い。己はそんな意氣地のない平凡な人間になり得るか。世の中の普通一般の人間のやうに單に妻を愛し子を愛するのが己の能か。己は何の爲めに生きてる。何の爲めに煩悶してゐる。子を育てる！ それにも痛切な意義はあらう。けれど子の爲めに自己を犠牲にする必要が何處にある。子は子、妻は妻、自己は自己。』

讀み懸けたルウソウの『コンフェッション』を伏せて頭に兩手を當てた。

『繁殖？ 妻を娶るのは唯だ繁殖の爲めか？ 然り、繁殖の爲め、戀といふ美しい花の咲くのも要するに肉體と肉體とを合せしむる爲め——繁殖を計る爲めの自然の一手段であるのだ。憤慨したつて、煩悶したつて人間はこの天地の大きい係蹄——然り單に生活の係蹄ではない——この大きな係蹄から脱却することが出来るか。』

少し考へて、

『要なき煩悶、要なき苦痛、要なき同情、少くとも今まで自分は要なきものに餘り多く憧れた。戦闘と常に言つて居ながら實際は何物にも觸れて居なかつたのだ。何物をも知つて居なかつたのだ。生活の波に觸れることが恐ろしかつたのだ。』

『まことなる生活、まことなる戦闘。』と勤は獨り叫んだ。

まことなる生活は日に日に迫つた。年の暮はもう近く、毎日通る神樂坂の通りには、下駄屋、砂糖屋、小間物屋など店の飾附が景氣よく出来て、人がぞろぞろと通る。不景氣の聲は到る處に聞えるが、町は賑やかで、そんな様子は少しも見えなかつた。西風がドツと吹いては黄い砂埃を擧げた。

裏の林は海近くにも住んで居るかのやうにゴーと鳴る。松だけに殊に淋しく吼えるやうに聞える。つい此間までは、境を縁取つた檜の乾いた葉が、風の一吹毎にばらばらと散つて縁側の角、座敷の中庭の一隅などを轉つて通つたが、今はもう残り少なくなつて、空いた梢から寒さうな弦月が微かに見える。

朝毎の霜は前の新建の瓦屋根を白くした。

兒はいつも早くから目を覺して泣聲を立てた。母の乳が無いので、抱いて寝ても體が暖らなないと見え、兎角むづがり勝である。もう一度寝かしつけてから起きようと思つても寝つかなくつた。子守か下女が頼みたいと口を諸方にかけて置いたが、澤山の給金が出せないのだから来るものがない。月一圓位で盆暮の仕着せを持つて氣安く來て居て呉れる田舎者が欲しかつたのである。で、爲方がないので、初めの中は細君が結附けに負つた上にねんねを被けて、竈の下を燃し附けにかゝつたものだが、後には勤が見兼ねて、朝の中だけ子傳こづゑをすることにした。

ねんねこで負つて、表の雨戸を明ける頃は、いつもまだ薄暗かつた。向うの丘の上には、榛のひよろ長い梢が黎明の赤い空に黒く並んで立つて居て、淡竹の大藪のかげの寺からは、朝の讀經の聲が鉦の音と共に聞えて來る。大地は凍つて踏む毎にざく／＼と霜柱が崩れた。

毎朝出懸けて行く砲兵工廠の職工があつた。勤が子を負つて、まだ人の起きた氣勢もない近所を歩いて居ると、角の柴垣のあたりで、いつもその男に邂逅であひあはした。髪を蓬々とさせて、縞の汚れた羽織ひつがを引被けて、染返しぞめのへこ帯を小さく結んで、朝の寒さにふる／＼慄へながら、小聲で鼻唄を唄つて通つて行く。睡眠が不足だと見えて、顔の色が蒼褪めて厭に白い。勤は労働者の哀むべき境遇を思ひ遣つた。夜業まで交せて十六時間の労働、漸く歸つて寝たかと思ふと、すぐ夜が明ける。心も安まる暇があるまい

と思つた。するとすぐ自分のことが頭に上つて來て、「自分も矢張労働者だ」と思ふ。丁度其男が矢來の交番あたり迄行つた頃、砲兵工廠の第二の汽笛が鋭く朝の寒い空氣を劈いて榛の木を越して來る。

新に建築しかけた家屋があつた。五間位で間取の具合が巧に出來て居る。勤は脊の子を揺りながら、よく其中に入つて見た。新しい鉋屑が前に山のやうに積まれて、庇の外に出たところは霜で白くなつてゐることもある。夜風の荒れた朝は、その鉋屑が柴垣の根元やら溝の中やら家の軒下やら大きな家の門の前やら處々に吹寄せられて居た。

十七

木枯が凄じく裏の森を鳴らすと、がら／＼と落葉が家の周圍を舞つて通つた。山手線の汽車が遠くで轟と聞える。

夜の九時過ぎから目を覺ました咲子は、泣いて泣いて何うしても泣き止まぬ。ミルクの吸口を宛がつても、口を脇に遣つて了ふ。抱いてほろつて歩いて、洋燈の明るい處に連れて來ても、後にそり反つて泣く。寒いのだらうからと言つて、襦袢じゆばんを更へて暖かい肌につけて遣つても、矢張駄目であつた。初めの中は、お光がいろいろにしてだまして居たが、何うしても泣き止まぬので、少時して勤が行つて見ると、若い母親はもう思案に餘つたといふやうに、泣き叫ぶ子を横抱にかゝへたまゝ、襖の陰に手を空し

くして坐つて居た。

『此子は何うしたんでせう？』

若い母親の眼には涙が光つた。

『何だお前も泣いてるのか？』

『だつて、此子はいくらだまして、だまらないますもの。』

横抱にした咲子は、小さい手足を震はせて、身もだえして益々泣く。

『何か着物に痛いものでも附いて居るんぢやないか。』

半ば裸にして彼方此方と調べて見たが、そんなものは見當らなかつた。『どれ、己がだまして遣る！』
と言つて、勤は武骨な大きな腕にぐいと抱上げて、よし／＼と茶の間から座敷の間をほろつて歩いた。
少しく止み加減になつたかと思ふと、また恐いことでも迫つて来たかのやうにけたましく啼き出す。

『襦袢を犬でも咬へて居るんぢやないでせうか。貴方、鳥渡見て来て下さいな。』

『そんなことは無いだらう。』

『だつてさう言ひますからさ。後生ですから見て来て下さい、』と咲子を勤の手から取らうとする。

『そんなことはない。』

『でも……』

馬鹿々々しいと思ひながらも、勤も矢張お光と同じく不安の念に驅られて居た。絶えざる烈しい見の
泣聲の中には、何か恐ろしい見えない力があるやうに思はれた。

外に出ると、庭には寒い月が明かに照つた。樹の影と言ふよりも枝の露はな影が鮮かに地に印せられ
た。裏の樅の樹に吹寄せる風が、凄じく潮のやうな音を立て、冴え渡つた月の光が散るやうに見える。
勤は裏に廻つて、いつも襦袢を干すあたりを歩いて見たが、垣から垣に渡した繩が霜に白く照つて居る
ばかり、犬の咬へたやうな様子もなかつた。

若い夫婦は一生懸命に泣く兒をだました。お光は低い眞面目な聲で『……ねんねんよう』を歌ひな
がら、寒い前の縁側を揺ぶつて歩いた。

坊やは好い兒だ、ねんねしな

坊やお守は何處へ行た、

あの山越えて里へ行た、

あの山越えて……

歌の中には打克つべからざる力に對するやうな悲しい哀れな調が籠つた。『子守唄——子守唄は一種の
軍歌だ。自然の力に對する軍歌だ。』かう思つた勤の胸には、熱い熱い涙が流れた。

風が近くから遠くに鳴つた。

妻

若い母親の乳がないといふことも非常な苦痛であつた。鷺印のコンデンスミルクは一罐三十八錢、それは五日目にはなくなる。餘り高いので、和製のを二三度飲まして見たが、質が悪く粘りが薄く、小便にばかりなつて了ふので、ぢき止した。勤は社の歸途に白銅と銅貨とを財布から傾けて、ぢやらんくと音させて、神樂坂の尾澤で其の罐を買つた。土曜日ごとの豚の肉などはもう買ふ餘裕もなかつた。

舶來の鷺印は鷄卵色にやゝ青みを帯びて、匙にしやくつても何處となく濃厚である。時を定め分量を定めて飲まずのが好いといふことも知つて居たが、若い夫婦にはそんな落附いた眞似は出来なかつた。子が泣き出すと、大急ぎで、ミルクを一匙しやくつて土鍋に入れて、湯で溶かすのが待遠な位に饅にあけて、泣く子の口に宛がつて遣る。兎角よく溶けて混つて居ないので、細い護謨管につかへて、吸つても吸つてもミルクは出て來ない。また管も四日に一度位は、掃除して置かないと、通りが悪くなつた。無精をした爲め、朝起きるとから、子の焦れて泣き叫ぶのを餘所に、ぶつ／＼言ひながら、勤は流元に蹲居んで、かじかんだ手で細い管に粗い毛の洗滌器を通した。

また時には朝日の當る縁側の柱の處に、綺麗に掃除したミルク罐と護謨管と硝子管と洗滌器とが並べて干されてあることもあつた。

若い母親がねんねこで負つて遣ると、屹度背の子は白い丸い鏝の當つた乳口をすば／＼音をさせて吸つて、長いゴム管のだらりと下つたミルク罐は、まことの乳のやうに若い母親の懐に入れられてある。鏝が饅に當つていつもカタ／＼と音を立てた。

夜はことに困つた。ミルクを溶かす爲めの湯がいつも沸いて居なければならぬので、枕元には火を入れた箱火鉢に鐵瓶をかけて、盆に土鍋やら罐やら饅やら一切の準備を整へて置く。火が消えて了つて、鐵瓶が水になつて居ることもあれば、夫婦がいぎたなく熟睡して居るすぐ枕の上で、火が活々と起つて、鐵瓶がガラ／＼沸え立つて、凄じく湯氣を一室に漲らして居ることもあつた。

其傍に暗く點いて居る二分心の洋燈、それがまた随分危険であつた。勤は神経性だけに、若い細君の無頓着を氣にして、口喧しく常に注意を與へては居たが、お光は一日の子守に疲れて、床に入るや否、前後を忘れてぐつすりと寝込んで了ふ。或時などは其洋燈を引くりかへして危く大事に及ばうとした。

勤はまた生兒の窒息を恐れた。若い母親には得てさうした過失があり勝である。乳房で壓し殺した話は新聞などにもよく出て居る。乳がないとはいひながら、矢張吸はせて抱寝をするので、勤は夜中に目を覺して餘り靜かに寝て居るのに胸を騒がして、兒の體に觸つて見てホツと安心することなどもある。

勤は毎夜子の泣聲に起されて、はだけた寢卷を合はせる暇もなく、夜の寒さに震へながら、枕元の鐵瓶の湯で、ミルクを拵へた。

大家の訪問、原稿の催促、何の掛でものんきに煙草をふかして居るものはなかつた。机の上には原稿だの校正刷だの、雑誌の綴込だのが一面に散らばつて、糊と鋏とが誰の手からも離れない。新年大附録の雙六の石版の綺麗な校正刷を下から持つて來ると、人々が周圍に寄つてたかつてがやがやと批評した。其聲を聞かなければ年の暮が來たやうな氣がしないといふ原稿の催促掛も、横綴の成績記入帳を抱へて、騒々しく二階に上つて來た。誰も彼も皆そはく〜と心を空に編輯長の駄洒落に相槌を打つて居るものもない。二十日頃から日に迫つた忙しさ——それも今は終つた。大抵の雑誌は校正も済み、控も揃ひ、原稿料も書出して了つた。忙しがつて居るのは庶務ばかりで、古びた脊廣を着た男は、原稿料の請求簿やら書留にする状袋やらの中に身を埋めて、小僧を相手に頻りに算盤を弾いて居る。十二月二十八日、一年中の仕事納め、楽しい正月を誰も胸に描いて、近い所の温泉に行く話をして居るものもあれば、面白く正月を遊ぶ相談をして居るものもある。午後四時に近い日は晴れて、硝子窓を透した光線は廣い一室に斜に射し渡つた。戸外には西風が立つた。

俸給と賞與——その渡るのを誰れも皆待つて居るのである。

其處に小僧が二ダース入の麥酒の函に鬚斗が附いたのを運んで來た。石版屋から例年の通に編輯にお

歳暮として寄越したのである。連中の中の酒好が先づ「あけて飲まうぢやないか」と言出すと、賛成者が其處にも此處にもある。小僧が鉈を持つて來て、函の蓋をこじ明けて、罎に冠せた藁をあたりに散らして、栓抜きで敏活に栓を抜いて、机を並べて居る人々の前に一本づゝ配つて歩いた。酒好は茶碗でぐんぐん呷つて飲んだ。

勤は隅の方に小さくなつて居た。かれの掛には仕残した用事がまだある。明日も來て校正を爲なければならぬ。

勤は主筆に麥酒を差されて、校正の筆を止めて、われ知らず二三杯呷つた。顔が火のやうに赤くなる。一室は俄に賑やかになつた。誰の顔にももう春が來たやうだ。饒舌と笑聲とが到る處に起つて、「何か酒の肴がないか、おい小僧、罐詰でも買つて來い」と言ふものがある。「もう財布も空だ」と笑ひながら、錢の音をちやらく〜させて居るものもある。不意に其處に社長がフロックコートで、今何處か會社にでも廻つて來たといふ風でスウと入つて來た。編輯長の机の前に足を留めて、「何うです、もうすっかり雑誌は出來ましたか。」

「え、もうすつかり」と編輯長が答へると、社長は莞爾して別に其出來榮を聞かうでもなく、其儘徐かに歩を運んで、雑誌、寫眞、麥酒の罎、それに酔つて其處に一團、彼處に一團固つてゐる編輯員の顔を笑つて見て通る。西洋の繪入の雑誌をちよいと手に取つて見る。二語三語編輯員の重立つた顔に話し

懸ける。と思ふと何か思出したやうに、またスウと出て行つて了つた。

間もなく店の小僧が来て、名を呼んで、『社長さんが』といふ。俸給と賞與とを渡し始めたのである。名を呼ばれた人は、眞面目な、しかし待つて居たといふやうな顔をして出て行く。席順でそれからそれへと呼ばれる。濟んだ人は何處となく莞爾と嬉しさうな顔をしてゐる。もう折靴の鍵をして歸り支度をしてゐるものもある。不景氣で金融逼迫だからと言つた杞憂も消えたらしい。

やがて勤の番になる。

社長の席は店の一隅で、一段高くなつてゐる。大きな丸い陶器の火鉢に櫻炭が半ば熨じやうになつて、机の上には新刊の出版物が二三冊載せてある。傍には綿の厚い大きい座蒲團が敷いてあつた。

社長は笑を含んで、

『中村君。』

と顔を見て、豫め準備して置いた金を封じた幾組かの封筒を引繰返して、其名の書いてあるのを二つ取つて重ねて、『甚だ少しですけど……これはお歳暮のしるし、來年からは上げて上げますから、』と其増俸の額を言つて、勤が頭を下げて禮を述べるのを待たず、誰君に來るやうにと其後の人の名を言ふ。勤は長い急な階段を一呼吸に馳昇つた。毎日種々な感想を抱いて昇降する階段！ その階段にも妙なからぬ追憶はある。

勤はある暗い處に行つて、人知れず歳暮の賞與の金額を數へた。思つたより多かつたので、胸は喜悅に溢れた。自から顧みて意氣地のないのを笑つても見た、それに來年からの増俸も嬉しい。僅少ではあるが、兎に角これで兒のミルクを買ふ錢にはなる。亡なぐなつた母が子供は幾人も成るだけ多く生んで置け、子供には屹度扶持が附いて來る。何んな困つた人でも、子供を餓ゑさせるといふことはない。こんなことを平生言つて居た。今、その言葉を思ひ出した。何たか世の中を渡つて行く上に一種の新しい意味を發見したやうに思はれた。

編輯の一室は賑かである。麥酒の栓はボンボンと景氣好い音をして抜かれた。小僧も編輯の人々からお歳暮を貰つて、常になく莞爾して居る。ハイカラの獨身者の學士は、赤坂邊あかたりに前觸の電話を懸け出した。勤は猶二三杯麥酒を呷つたので、好加減に酔つた。いつもの不平も不安もない。詩でも吟じたいやうなうかれ心になつて、元氣よく階段を踏鳴して下りた。

店には瓦斯がついてゐた。算盤の音が到る處から聞える。發送掛では忙しく荷を積出して居る。店は大晦日まで休暇といふものがない。店の者が二階に來ては、編輯の方は羨しいとよく言つた。勤はそれを思出して、勞働者といふことを考へて、事務に忙殺されて疲れた聲を出して働いて居る人々を見た。簿記帳、インキ壺、廣告の木版、寫真版、板の間に積み重ねた當用日記などに光線は晝のやうに照つた。戸外は鐵道馬車が通る。車も通る。人の往來は織るやうで、町の角の電氣燈がピカ／＼と青く光つた。

夜風は剃刀のやうに頬に當る。角に来て勤は車に乗つた。

車夫は元氣な男で、前の車を幾臺となく追ひ抜いて行く。で、いつもの路——雨の降る時などはねを二重外套に上げて、しよほくと濡れそほちて通る路を、懸聲で、ガラムと威勢よく過ぎた。錦町河岸の龍紋氷室の前には、夏の日には屑氷塊を廉く買つて、一杯五厘の安アイスクリームをガラガラと廻して製造して居る連中が幾組も並んでゐて、濠を隔てた高い石垣の上の涼しい樹の陰には、田舎から來たばかりの新兵が、覺束ない調子で頬を膨らせて、馴れぬラツバを鳴らして居るのをよく見懸けたが、今は夕陽の名残が微かに濠に暮れ残つて居るばかり、岸にかゝつた舟で裸火を燃してゐるのが、赤く鮮かに暗い水に落ちた。

二十

霜解で路がぐしやぐして居る。冬の薄ら寒い日影は井戸端の傍に躑躅んで、襦袢を洗つて居るお光を照らした。黄縞の新紬のねんねこに毛糸で編んだ白い頭巾、兒は母の脊に心地よけに寝て居た。

水が荒いので手は散々に舂が切れる。娘の時分、白魚を並べたやうだなど、賞められた面影はもう見たくも見られない。汚れたものをザブムと振つても振つても容易に落ちない。固く絞る時には冷たいので手が切れさうになる。お光は漸く下洗を終つて、汚い盥の水をこぼして、霜に凍てた井戸繩を手繰

つて居ると、向ふから霜解路に重い車の輪をめぐらしながら、一臺の俵が遣つて來た。

俵には丸鬘の女が金茶色の流行の肩掛をして乗つて居た。別に眼にも留めずに、汲上げた水を盥に明けて居ると、俵は段々此方へと近づいて來た。自分の家にはあのやうな奥さんが訪ねて來る筈はないのと思つて居ると、俵の梶棒はすぐ其處に下された。

『まア、お常さん。』

『お光さん。』

昔の學校友達は互に喜悅の聲を擧げた。お常は此五月に豫て噂のあつた技手を養子にしたが、結婚が濟んだ翌々日、夫の役向きの都合で、急に遠い愛媛縣に一緒に行くことになつたので、二人は別離を惜しむ暇すらもなかつたのである。お常は春とは肥つて、何處となく奥様振つて、丸鬘がよく似合つた。流行の栗梅の縮緬の羽織を着て、指には二つまで純金の指環をはめて居た。お光が洗ひ懸けた襦袢を其儘に、お常を家に請じようとする。

『まア、洗つてお了ひなさいよ、私、待つて居ますから。』

『でも、もう好いのですから。』

『まア、好いからお洗ひなさいよ、』と強ひてお光に襦袢を洗はせて、其傍に立つて居たが、脊の子の頭巾を鳥渡まくつて見て、『まア、よくねんねしてねえ、可愛い兒ねえ、昨日お里に上つて、すつかり聞

いたんですよ。』

娘時代の人懐っこい言葉の調子はもうなかつた。

お光は急いで洗つて了つて、さてお常を家に請じた。お常が此處に尋ねて来たのはこれで二度目である。最初はお光の新婚の當座、まだ其頃は家が狭いとは言ひながら、あたりが綺麗に片附いて居たので、さう羞かしくもなかつたが、兒が生れてからは、襦袢は彼方此方に散らばつて居る。着物がぬいだま、疊ますに座敷の一隅につくねてある。疊は汚くなつて居る。お常の扮装の立派なだけに、お光は一層自分の家を醜く羞しく思つた。

一通りの挨拶が済むと、お常が、

『旦那様は？』

『鳥渡、其處まで買物に出懸けましたのよ。』

『さう』と言つたが、いつ出て来たといふお光の間に答へて、

『私、一昨日着いたばかりですよ。』

『旦那様も御一緒？』

『え、』と澄まして居る。

『これから、始終、こちら。』

『い、え、冬休暇にせびつて、やつと伴れて来て貰つたんですよ……私、行つてる處それは田舎ですの、松山ですと、まだ少しは賑かなんですけど、其處からまだ四里田舎なんですよもの、話相手つて言つてね、そりやねえ、お光さん、田舎者ばかりで、淋しいんですよ。』

『東京にお出なさるやうにすれば好いのにねえ。』

『三年位、何うしても其處に居なくつちやいけないんですよ、厭になつて了ひますのよ。』

脊の子が泣き出したので、

『まア、一度おろして御見せなさいよ。』

『でも喧しいから。』

『よう御座んすから、一度下して抱かして頂戴。』

脊から無理におろさせて、お常は喉子を抱いた。兒は漸く物が見え始めたやうな眼附をして、小さい口を動かしてあたりを見まはした。

『好い兒、まア何て好い兒でせう。眉があなたにそつくりね。』

と見較べて笑ひながらいふ。

いろ／＼な話——夫の話、子の話、ことに田舎の話がお光の好奇心を惹いた。神戸、須磨、明石、讃岐の金毘羅、松山の高い城、道後の温泉、さうした珍らしい處を夫と一緒に旅する友の境遇を自分の平

凡な樂みのない日毎の生活に比べて羨しく思つた。

學校友達の話も出た。

座敷の長押に四つ切の集合の寫眞が額になつて懸つて居る。小學校を卒業する時、紀念に撮つたので、校長の瘦せた洋服姿と裁縫の女教師の肥つた姿とが好い對照をなして見えた。振袖を着て居るものもあつた。袴を着けて居るものもあつた。お常も居た、お光も居た。

『まア、あの時の寫眞。』

とお常は態々立つて、凝と見る。

『まだ、三年しか経ちませんが、随分變りましたねえ。』とお常はさも感じたやうに、『松島さん、お子さんが出來ましたよ。』

『オヤ、さうですか。』

『昨日、番町の通りで逢ひましたのよ。』

『男の兒？』

『え、男の兒よ。もう餘程大きくなつて居ましたよ。あのお轉婆な方がね、あんなに澄まして居るかと思ふと變な氣がしましたよ。鞆に乗つては大きな聲をしてよくふざけてゐたのがまだ眼に見えるやうですのにねえ。』

『本當ねえ。』

二人は其身の變つたのには氣が附かなかつた。

寫眞にある人々はもう大抵人の妻であつた。華族のお嬢様も居たが、其人は二三年前同族の勢力家に嫁いて、今では交際界の花とまでたゞへられてゐる。外交官に嫁いで外國に行つて居るものもあれば、夫に従つて臺灣に行つて居るものもある。それでも中にはまだ嫁がぬ人が二人あつた。一人は日本畫を學んで居た。一人は英語の教師になつて居た。死んだ人も數へると三人まである。

お常はお光と比べると、割合に世間が博いので、種々の噂を聞いて知つて居た。嫁いて間もなく肺病になつて、平塚の病院で死んだ友達のことを話して聞かせた。此友達の色いろの白い小づくりなやさしい子で、お光とも仲が好かつた。ラブした人の手を握つて、莞爾と笑つて、呼吸を引取つたといふあはれな話を聞いた時は、お光も思はず涙組んだ。

琴が袋に入つて床の間に立てられてあるのを見て、

『此頃、矢張琴をなすつて？』とお常が訊く。

『いゝえ、もう琴など弾いて居る隙ひまはありませんの、……すつかり忘れて了ひましたのよ。松づくしなどもう弾けませんのよ。』

『私も暫く……』

「でも、貴方などまだお子さんが無いから好いですけども……子供が出来てはそりや本當に駄目なの、琴どころではないんですもの、……内などもよく言ふんですよ、女が琴など鳴らすのは、嫁入支度にするばかりで、何の役にも立ちはないッて……それも上手に出来るんなら聞いて遣るけれど、お嬢さん藝では爲方がない、それより料理でも旨く出来る方が餘程好いッて申しますのよ。」

「それはさうですねえ。」

とお常は笑つた。すぐ話頭を更へて、

「お里でも好いお嫁さんが出来ましたね。」

「いゝえ、もう……。」

「本當に好い奥さん……何處からいらしたの？」

「下の嫂の姪に當りますの。」

「さう、それぢやまア重縁見たいね、母さん御安心ですねえ。奥さんも政次さんがやさしいからお仕合せですわねえ。」

「兄にお逢ひになつて？」

「いゝえ、政次さんは何處かお歳暮廻りに御出になつたつてお留守でした。」
「そりや、二人仲が好いんですよ。」とお光が笑ひながら言ふと、

「それは結構ですねえ、交情が好いのが何よりよ。」
ませたこととお常はいふ。一度は政次に氣があつて、顔を見るのを樂みにして、お光の家に出懸けて

行つたものであつた。お光は薄々それを知つて居た。お常は、

「政次さんにも、一度お目に懸つて行きたいと思つて居ますのよ。」

「兄もお目に懸つたら、屹度喜ぶでせう。いつもお噂はして居ますの。」

「さう。」

何か思ひ出すやうな顔色をして、

「奥さん、お幾つ！」

「二十でせう。」

「綺麗な方ですね。」

「丸髷に結つて居まして？」

「えゝ。」

「此間、御夫婦で寫眞を撮つたのよ。」

「さう……此處に持つて居らして？」

「えゝ。」

妻

『お見せなさいよ！』

お光は兒を抱いたまゝ笑つて立つて、寫眞箱から一葉の寫眞を出して見せた。政次は立ち、おきよは腰を掛けて居た。かうした寫眞はお光もお常も寫して持つて居る。お常はちつとそれを見て居たが、

『お睦ましさうね。』

と笑つてお光に返した。

以前ならば、今の境遇を打明けて話して、夫といふものゝ難かしいことも、子を育てることの容易でないことも、何も彼も隠す所なく、愚痴も言ひ、同情もして貰ふのであるが、今はお光は何うしてもさういふ氣にはなれなかつた。若々しい無邪氣な友情よりも女友の快活な様子と立派な扮装とが胸につかへた。

猶ほ話を續けて居ると、勤が乳母車をガラ／＼押して歸つて來た。兒はまだ乳母車に乗せるには早いが、金がある時買つて置かうと言ふので、勤は神樂坂にわざ／＼出懸けて行つたのである。車の中には、砂糖だの、お茶だの下駄だのと買物が入れられてあつた。餘りに値切つて負けさせたので、乳母車屋の亭主は、暮で忙しいのを口實に、何うしても持つて行つては上げられぬといふ。止むなく勤は賑かな椀町の通りを自分で押して來たのである。

靡り減らした下駄、鬚の生えた顔、洗ひ晒しの着物、かうした夫をお常に見られるのが、お光には悲

しかつた。

やがて暇を告げる友をお光は門まで送つて出た。丸髻姿が向うの角を曲るまで見送つて居たが、急に淋しいつらい感が胸一杯に溢れて來た。なつかしい友達と久し振で逢つても、心の底を割つて見せることの出来ぬ悲しさ——この悲しさは里の家に嫁が來てからの淋しい心に似て居る。母親がちやよと嫁にやさしくするのを見ると、何となく其身が疎くされたやうな氣がする。『お前は餘所に行つた體だ、おきよは家の人、これからいかやうにも世話にならなければならぬから、』と此間縮緬の羽織を嫁に拵へて遣つた時に、母親は申譯のやうに言つた。お光は其時の淋しさと悲しさを繰返した。

二十一

お孝が京都の親類から歸つて來ると、四五日して宇都宮の勇造が術科修學の爲め、八箇月間戸山學校に聯隊から派遣されて上京した。正月は賑かであつた。

勇造は取敢へず太田の後家の持家の一軒明いて居たのを借りて住んだ。不自由なものは下の兄の家から借りて間に合はせることにした。

兄弟三人は互に往來した。女連も常に下の家を集つて、笑聲と饒舌とが絶間なく聞えた。

お孝の兒は里親が伴れて見せに來た。乳が充分だと見えて、丸々と肥つて居た。額から眉のあたりが

妻

お孝に酷肖そっくりである。里親はまだ年の若い洋服屋夫婦で、其時、亭主は酒に酔つて、したゝか管を巻いて勇造を困らした。

ある日勇造が主人に、

『隣(太田のこと)に下宿して居る中尉は、同期生で知つて居るが、困つた男だね。』

『お前知つてるのか。』

『知つて居るといふほどでも無いが、顔は見て知つて居るさ。學校に居る時分から評判の餘り好くない男だつた。』

『何うも軍人にもあゝいふ屑が中にはあるなア。』と兄は笑つて居る。

『すぐ垣一重だもんだから、いろんなことが聞えて爲方がありやしない。あの後家も後家だね。今、いちやついて居たかと思ふと、すぐ喧嘩を始めるんだから、實にやり切れんよ。親類で喧しく言ふものなどないのか。』

『うむ……………。』

兄は要領を得ない笑方をする。

『石渡の鼻もえらい女だね。』

『うむ、』と兄は矢張要領を得ない返事をして、『此間其話が向うに知れて、大問着があつたよ。』

來いつて言つて來ても、何うしても行かないツて言つてる。』

『えらい女だ!』

『この春には主人が歸つて來るさうだから……………。』

『兎に角えらい女だよ。』

と言つて茶を飲んで、羊羹を頬張つた。勇造は軍人肌の無邪氣で、何も彼もぐんぐん言つた。

『兄さん、歌留多を取らうぢやないか。』と勇造は主人に言つた。長兄も昔からの歌留多好きである。

此間も暮の忙しいのに、のんきに紙を買つて來て、丁寧に歌留多牌を張つて、自分で歌を書いて置いた。勇造も成城學校に生徒で居る時分から、歌留多に懸けては夢中になるほど好きで、田舎では正月になつてもあの楽しみが出来ないと常にこぼして居た。歌留多をするといふことを樂みのひとつにして田舎から遣つて來た位である。

歌留多會に就いては、兄弟三人の間に随分種々の追懐がある。其頃一家は二十騎町に住んで居た。おけいさん、お梅さん、お貞さんなどといふ美しい娘達が居た。おせんといふ快活な早口な夢中になつて男と引組んだり何かする女もあつた。勤はあまり歌留多を好きではなかつたが、長兄と勇造とは毎晩のやうにそれからそれへと押懸けて行つて、よく夜明しをした。朝早く歸つて來ると、屋敷町の松飾には霜が白く、路には羽根やら手糸やら蜜柑の皮などが落ちて居た。時の經つのは早いものである。おけい

さんは日本橋邊の商家に嫁いてもう男の子がある。お梅さんは藥王寺前町あたりで大丸鬚に結つてハイカラの道行などを着て歩いて居るのを常に見かける。お貞さんは空扶斯を病つて死んで了つた。おせんさんは中學校の先生の細君になつて出雲の松江に行つて居る。おけいさんに死ぬほど戀した勇造の友達の中尉は、別な女と結婚してけろりとして居る。

『若い女が居なくては面白くない。兄さん誰か別嬪をかり催して來る人はないかな。』などと勇造がいふ。歌留多をするといふ日、長兄は福引の材料をわざ／＼町まで買いに出た。福引の文句を二三日前から楽しみにして考へて居るので面白い文句をしほり出すと、勇造でも勤でも其時其處に居たものを捉へて、『何うだ！ 富士の雪で時計を出して見せてすぐ引込ませる。とけやらぬは面白いだらう。』など言つて高笑ひをした。町から歸つて來た風呂敷包の中には、白粉、茶碗、埃拂、一錢菓子、上しん粉、海苔、おかめの面、ガラ／＼煎餅、小十能、ライオン齒磨などが雜然として入れられてある。高箒と大根一本と播鉢と草鞋、これに當る人を想像して主人は獨り悦に入つた。

座敷の隅で熱心に考へて遣つて居る處にお孝が顔を出す、

『待つてお出！ 今、旨いことを考へて居るんだから。』

と言つて、中で面白さうなのを一つ二つ話して聞かせて、『黙つて居なくちやいかんよ。誰にも内所内所。』と手を振つて見せる。お孝は聲を立て、笑つて、『兄様、本當にお上手ですことねえ！』

お三輪は『小遣もありもしないのに、本當に儲方がありやしない。子供見たいに、内ぢやあんなことが面白んだがねえ。』とこぼして居る。と、主人は、唄どんがまた喧しいことを言つてござる位に聞き流して平氣である。お三輪はわざと戲談らしく、『少し皆なに寄附でも募る方が好いがね。』

『本當にさうする方が好いんですよ。宅にも出させますから……………』

とお孝が挨拶に困つて眞面目に出ると、

『さういふわけぢやないけれどねえ。』

『馬鹿な奴だ！ しみつたれたことばかり言つてる！』と口には似合はず主人は笑ひ懸けて、『いくら

ビービーでも、まだ福引を買ふ位な小遣はあるはな、お孝。』

『まア、兄さんが……………』とお孝も笑つた。

若い娘を彼方此方驅り催して見たが、二十騎町時代のやうに集つて來なかつた。親類から親類、娘の居る家には、遠い處まで電話を懸けた。裏の二階家に容色の好い娘のあるのを、主人がわざ／＼出懸けて借りに行つたが、學校の下讀をしなければならぬからとて謝られた。女連には娘よりも若い細君が多かつた。細君の中には、子供がありながら、何うか取らせて下さいといふ熱心者もある。

夕暮から人々が集つた。歌留多を始める頃には八疊の間が狭い位になつた。けれど客種は揃つて居なかつた。白髪の爺さんもあれば、まだ歌留多を取つた経験がないといふ中年の腰辨もある。荒くれ書生